

季節感の文学史

— 七月から九月まで —

島内景二

【はじめに】

平成十三年七月一日から九月二十三日までの三箇月間、毎週日曜日の午前八時十五分から八時四十五分までの三十分間、調布FMで「季節を生きる……文学歳時記と現代」というラジオ番組を担当した。全部で十二回の構成であった。

放送当日あるいは放送前日や放送翌日の日付が、文学作品の中でどのように描かれているか、またその日に亡くなった文学者たちがどのような業績を達成したかについて、話した。「今日は何の日？」の文学バージョンを目指したものであった。

留意しなければならないのは、例えば九月一日という日付が、「旧暦」に基づく古典文学の場合は「晩秋」であるが、「新暦」に基づく近代文学では「初秋」となることである。この番組では、旧暦と新暦の二重化にいたずらに悩み、季節感のずれを気にするのではなく、「今日」というかけがえのない一日が、旧暦と新暦とで二つの「季節感」を持っているという贅沢さを味わおうと提唱した。

本稿は、この「季節を生きる」の放送台本に基づいて加筆し、話し言葉の文体を書き言葉に変換したものである。この番組を企画された調布市文化・コミュニティ振興財団事業課の北島勝俊氏と、実際の収録を担当された調布FMディレクターの袴田庄之介氏に心から感謝する。

【最初の一回の大切さ】

これから七月から九月までの時間の流れに身を任せながら、文学作品に言葉で表現された季節感を、わたしたちの身体で感じ取るためには何が必要なのか、考えてゆきたい。トピックスとして取り上げたいのは、古典から現代までのすぐれた作品と文学者たちである。

その執筆の開始に当たり、「始めよければ終わりよし」という諺の真意を説明しておきたい。「最初の一回」と聞いてわたしがまず思い出すのは、『源氏物語』

の世界である。桐壺巻から夢浮橋巻までの五十四巻（五十四帖）の中に、主人公である光源氏が作った六条院という壮大な建物での人々の暮らしが語られる巻々がある。およそ二万坪の壮大な大邸宅を舞台として、壮年期の男盛りの光源氏の絶頂期が語られるのだが、登場するヒロイン（玉鬘）の名前に因んで「玉鬘十帖」と総称されている。「玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱」などという雅やかな巻の名前が付けられている。

それらの巻に描かれているのは、光源氏が造営し居住する六条院での「最初の一年間」の春夏秋冬、四季折々の美学なのである。厳密に言えば一年間ではなく二年間なのだが、新築間もない六条院の「最初の一年間」が語られたあと、この六条院に移るう四季の巡航が詳しく語られるのは、光源氏が出家を決意した「幻」という巻になってからである。これが、光源氏の登場する最後の巻となる。今は亡き最愛の妻・紫の上をしのぶ光源氏の俗世での「最後の一年間」が春夏秋冬の順を追って纏綿と語られている。

「最初の一年」と「最後の一年」に、光源氏の壮年期と老年期のすべてを圧縮した時間が凝縮して提示されている。文学作品の内部の時間は、同じ密度の歳月がずるずるべったり、のんびんだらりと流れるのではない。最初の一年、最後の一年に人生のすべての歳月を凝縮して描き出す。「特別の時間」と「日常の時間」とのメリハリが、実に印象的なのである。

【全体を見る目と、部分を見る目】

これから書き始められる「季節感の文学史」にとっても、ここがまさに「最初の一回」最初の一文なので、「わたしたちにとって季節とは何か」という大切な問題に触れておかなければならない。

わたしたちの住む世界には、変化に富む春夏秋冬の四つの季節がある。それぞれ季節ごとに、無数の植物が花を咲かせ、かわいらしい動物や昆虫が生まれ、

五月雨・時雨・雪などの気象の変化もある。その植物・動物・気象のすべてを季節ごとにきちんと整理して配列してあるのが、竜宮城と呼ばれる異界の建物である。浦島太郎など、竜宮城を訪れた人の報告では、竜宮城の宮殿の周囲には四つの庭があり、東側には春景色、南側は夏景色、西側には秋景色、北側には冬景色が広がっていたと言われている。浦島太郎は、乙姫と共に、毎日この「春夏秋冬」の庭を散歩していたわけだ。この理想的な庭の構造を、「四方四季」と呼ぶ。

四つどの季節も同じくらいに美しく、わたしたちはすべての季節が同じくらいに好きである。歌手の芹洋子の持ち歌に、『四季の歌』という名曲がある。「春を愛する人は、…」という歌いだしを、記憶されている方も多かろう。四つの季節と、父親・母親・友だち・恋人とが組み合わせられて、「ぼく」の人生を豊かに彩っている。

この『四季の歌』の歌詞の大切な点は、「ぼく」と呼ばれている人物がどの季節を最も好きなのかということだ。「ぼく」は、春も好きだし、夏も好き、そして秋も冬も同じくらいに好きなのだろう。だから、父親も母親も友だちも恋人もみんな大好きということになる。心の中に、「春の暖かさ」「夏の厳しさ」「秋の悲しさ」「冬に耐える力」のすべてを持った人間こそが、「四季の美学」の体現者なのである。

これから、七月・八月・九月という三箇月間の、それぞれの季節の限定された説明をすることになるが、読者は、「自分が好きな一年間すべて」の特定の部分が各章各節で取り上げられているのだということを常に意識して読んでもらいたい。一年間は五十二週あるので、ある特定の週についての説明は「竜宮城の広い庭の全体から見ると、五十二分の一」に当たるわけである。同様に、ある特定の一日についての説明は、「二年間の三百六十五分の一」に該当する。

多様性を誇る全体を忘れないようにしよう、ということだ。
そうすれば、個性的な部分部分の美しさがいよいよ輝き始めることになる。

【旧暦と新暦】

そういうわけで、これから例えば七月一日から始まる一週間という「五十二分の一」という「部分」の話に移ろう。

読者は、「七月一日」がどの季節に含まれるとお考えだろうか。おそらく、多くの人からは「夏に決まっているではないか」という返事が帰ってくると思われる。けれども、俳句を学んでいる人は、七月と聞いてすぐさま「秋」と連想する

のではないだろうか。夏と秋、どちらが正しいのか。

まず、古典文学(旧暦)の季節感から説明した方が、わかりやすいだろう。

「一月・二月・三月」が、春である。「新春、あけましておめでとうございませ」と年賀状で書くのは、一月が「春」だからだ。三月(弥生)が、春の終わりになる。現代の卒業式の答辞や送辞でも、「弥生」という月の名前を用いつつ、「春の終わり」と「学生生活の終わり」とを重ねたスピーチがなされる。

そして、「四月・五月・六月」が夏となる。四月は「卯月」とも言うが、卯の花の咲く月である。佐佐木信綱作詞の歌に「夏は来ぬ」があり、「卯の花の匂ふ垣根に」という歌詞であるのは、よく知られている。五月は、夏の盛り。「伊勢物語」第九段で在原業平が東下りをして、富士山を見て驚く場面がある。「五月(さつき)のつごもり」、すなわち「盛夏の五月下旬」に雪が降っていたからこそ、都人の業平が腰を抜かしたのである。

秋は、「七月・八月・九月」の三ヶ月ということになる。「七月七日」の七夕は、俳句では秋の季語である。八月十五夜は、秋のど真ん中ということで、「中秋(仲秋)の名月」と呼ばれる。九月は、秋の終わり。

そして、十月から冬に入る。十月を「神無月」とも言う、神無月は冷たい「時雨」の降る冬の始まりとして、和歌に詠まれることが多い。

この「一・二・三月(春)」「四・五・六月(夏)」「七・八・九月(秋)」「十・十一・十二月(冬)」という古典文学の季節感に慣れてくると、『源氏物語』の自然描写や、『古今和歌集』の和歌の情緒などが少しずつわかってくる。そのうえで、新暦の「三・四・五月」が春、「六・七・八月」が夏、「九・十・十一月」が秋、「十二・一・二月」が冬という現代の季節感を重ねるとよいだろう。

八月十五日は「昔は秋だったが、今は夏である」と認識するのが文学的な季節感であり、「今は夏だが、昔は秋だったらしい」と認識するのが現代の科学的季節感である。後者では、「八月＝秋」という体感が不可能である。

このように、「旧暦」と「新暦」の二本立ての季節感の中を、現代のわたしたちは生きている。新暦の暑い盛りに旧暦の立秋が来てしまうなど、ある意味では不便なのだが、ある意味では便利でもある。例えば、七月一日には誰しも夏の暑さを感じるわけだが、『源氏物語』の七月は「野分」という台風の吹く季節なのだと思っただけで、何となく涼しく感じられるものである。この「何となく」の中に、旧暦以来培われた「日本人の伝統的な季節感」があり、それが今もなお暮らしの中に存続していることがわかってくる。

る。けれども、俳句を学んでいる人は、七月と聞いてすぐさま「秋」と連想する。

現実の季節感（新暦）と、暦の上での季節感（旧暦）との「ずれ」に悩むのではなく、大いに楽しもうではないか。わたしたちは、「思う力」すなわち「想像力」や「イマジネーション」を使いこなすことで、「季節を二倍に楽しむ」ことができる。それが、現代社会で急速に消滅しつつある「文学を作る力」や「創造力」「クリエイション」の復活につながる。

くどいようだが、「七月一日」は、古典文学では秋の初め、近代文学では夏の盛りである。王朝の十二単では表と裏の二つの色彩の「襲」を楽しんだが、現代人も旧暦と新暦の醸し出す時間の表と裏の「襲」の微妙な色目を味わうべきだろう。

【旧暦の七月の季節感】

旧暦の七月は、「文月」ふみづき」と言う。「ふづき」とか「ふんづき」と発音する場合もある。「ふみづき」の季節感を漂わせている古文を、いくつか紹介しておこう。

まず、『古今和歌集』の巻四は、「秋の上」という巻である。九〇五年、今から千百年近く前に成立した我が国最初の勅撰和歌集の四季の構成は、「春」と「秋」は上と下との二巻に別れており、夏と冬は一卷のみである。であるから、平安時代の歌人たちは「夏」と「冬」にはあまり美意識を感じずに、「春」と「秋」とを愛していたようだ。

「四つの季節を平等に愛する」という「理念」建前と、「やっぱり春と秋が好き」という本音を両立させていた点に、王朝人の人間味が感じられる。

奈良時代の『万葉集』にも、額田王の「春と秋のどちらの季節が優れているか」という内容の春秋優劣問答歌があるので、古典文学では古代から「春」と「秋」とが人気の高い双璧だったようだ。

昔の人が好きだった「秋」という季節を詠んだ『古今和歌集』の歌の中で、最初に載っている歌がある。作者は、藤原敏行。「詞書」すなわち「前書き」は、「秋立つ日詠める」とある。厳密には、「七月一日」ということではない。けれども、旧暦の「立秋」だから、七月一日前後ということになる。その歌。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

立秋だから、まだ完全には涼しくなりきってはいない。しかしながら、ふとし

た風のけはい、風のたたずまいに、かすかな秋の訪れを感じて、はっとしてしまつた、という内容である。近代詩人のサトウハチローは、「誰かさんが、誰かさんが、誰かさんが見つけた。小さい秋、小さい秋、見つけた」と童謡で歌つたが、このような「秋を発見した驚き」を表現する詩歌のお手本（最初の一回）が、藤原敏行の歌なのだ。

次に、涼しい風に秋の訪れを感じた名場面として、『源氏物語』の桐壺巻の一篇も紹介しておこう。桐壺帝という天皇が、桐壺更衣という女性を寵愛したが、桐壺更衣は光源氏という一粒種を残してはかなくなってしまう。それが、暑い夏のことだった。やがて秋、文月になるが、この世に一人残された帝は更衣のことを忘れられずに、眠れない夜を過ごす。その場面に、

野分立ちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも（亡き人を）おほしいづること多くて、

という名文がある。「野分立ちて」は、「台風めいた風が吹いてきて」という意味で、「にわかに肌寒き夕暮のほど」は「急速に肌寒さを感じさせる夕暮の頃」という意味だと、普通には解釈されている。「野分だつ」の「だつ」は、『枕草子』冒頭の「紫だちたる雲の、細くたなびきたる」の「紫だつ」の「だつ」と同じで、「何々のようになる」という意味の動詞を作る接尾語である。秋に台風のように強い風が吹いて、帝の服を通して肌までひんやりとし、その皮膚感覚によって帝は普段よりも強く亡き人をしのぶ思いを強くしたのである。

「野分立ちて、にはかに肌寒き夕暮」というフレーズは、秋の初めの季節感をもがなしいトーンで表現した名文の一つであろう。

ところが、『源氏物語』の主題は「もののあはれ」であるという優れた見解を述べた江戸時代の国学者・本居宣長や、幕末の独創的な国学者である萩原広道などは、この桐壺巻の名文句を次のように解釈していた。濁点の打ち方が、通説と少し違っている。

野分立ちて、にはかに、はた寒き夕暮のほど、

すなわち、「野分立ちて」ではなく、「野分立ちて」。「肌寒き」ではなく、「はた寒き」。風が吹くことを、「風が立つ」と言う。だから、「野分立ちて」は、「台

「風めいて」ではなく「台風そのものが吹いて」という意味になる。「はた寒き」の「はた」は副詞で、「やはり」とか「また」とかいう意味。「はた寒き」は、まだ暑さを多分に残しているながら、時として寒い日も入り交じるといふ微妙な季節感の錯綜を表現したものだ、本居宣長たちは考えた。こちらの解釈にも、わたしは大きな魅力を感じる。

『源氏物語』という古典中の古典の文章ですらも、まだ学者たちの間に統一された唯一絶対の解釈はないということだ。だから、現代人は高等学校で勉強する「野分だちて、にはかに肌寒き」で暗記してもよいし、現在は少数説に留まっていれば、「野分だちて、にはかに肌寒き」で暗記してもよい。できるならば、旧暦と新暦の両方の季節感を体で感じることを望まれるように、二つの本文をどちらとも暗記してもらいたい。年を取るにつれ、また自分の人生経験が増えるにつれ、二つの解釈のどちらがより自分のフィーリングにぴたりくるかが微妙に変わってくることだろう。わたしは四十六歳だが、本居宣長たちの、

野分だちて、にはかに、はた寒き夕暮のほど、常よりもおほしいづること多くて、

という季節感の方に、なぜか心引かれるものがある。

現在では少数説となつてしまつた「野分だちて」という『源氏物語』桐壺巻の表現を目にして、近代文学者である堀辰雄を連想した読者がおられるのではない。堀辰雄は、短編の名手・芥川龍之介の弟子に当たる。婚約者が結核を患つて若くして亡くなつてしまうことを描いた『風立ちぬ』は、軽井沢や富士見高原を舞台としていることもあつて、抒情的で、とても美しい小説である。その『風立ちぬ』の最初の部分に、小説のタイトルの由来となつたポール・ヴァレリーの詩句が引用されている。

そんな日の或る午後、（それはもう秋近い日だつた）私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべて果物を齧っていた。砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処からともなく風が立つた。

（中略）

風立ちぬ、いざ生きめやも。

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に凭れているお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返していた。

季節は、「秋の近い晩夏」。暑さと涼しさとの入り交じる微妙な高原の雰囲気、言葉がよく映し取られている。

「風立ちぬ」は、「風が吹いた」という意味。「野分だちて」と、似た表現である。「いざ生きめやも」の「やも」は反語。『万葉集』の柿本人麻呂に、

さざなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも会はめやも

という歌があり、「昔の人にまた会えるだろうか、いや会えない」という意味である。だから、「いざ生きめやも」を直訳すると、「さあ、わたしたちはこれから長く生きたいのだろうか、いや生きていくことはない」ということになってしまう。むろん、作者のつもりでは、そうではなくて、「さあ、わたしたちは生きねばならない。しっかりと生きてゆこう」の意味を持たせたのだろう。

堀辰雄は、昭和四年に東京大学の文学部国文科を卒業している。同級生には、入江相政元侍従長や、作家の臼井吉見などがいた。一学年上には、作家の舟橋聖一がいた。ちなみに、わたくし島内景二は、昭和五十四年の卒業なので、昭和四年に卒業した堀辰雄のちょうど五十年後の後輩ということになる（旧制と新制の違いもあり、単純な引き算は出来ないのだが）。

堀辰雄に話題を戻すと、国文科で勉強したわりには、「いざ生きめやも」の「やも」の反語の使い方がよくないと言わざるを得ない。おそらく国文科に入り浸つていて、国文科の勉強が不足していたのだろう。しかし、この間違つた「やも」にも、それなりの理由があつたとも思われる。

堀辰雄は、王朝文学に造詣が深く、後にいくつかの王朝物の小説を書いた。当然、『源氏物語』は読んだはずで、生前の彼の蔵書を並べた軽井沢の書庫にも、江戸時代に北村季吟が『源氏物語』を注釈した『源氏物語湖月抄』の活字本が並んでいるのを、わたしは自分の目で確認している。『源氏物語』の桐壺巻には「野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど」、あるいは「野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど」という文章があり、なおかつ桐壺更衣という女性が「まだ自分分は生きていたい」と切実に願いつつこの世を去らねばならなかった苛酷な運命が描かれている。これらが走馬灯のように堀辰雄の脳裏を駆け巡つて、「風が吹

いた。わたしたちはいつまでも生きていたいと願うが、それはできそうにない」という意味を持つ「風立ちぬ、いざ生きめやも」という詩句になったのではないかと、勝手に想像したりしている。

桐壺巻の夏と秋の入り交じる季節の哀切な桐壺更衣へのレクイエムへの堀辰雄の知識が、反語の「やも」をめぐって、ポール・ヴァレリーの詩句の翻訳を微妙に狂わせたのではないだろうか。それほどまでに、堀辰雄の近代文学は『源氏物語』の季節感と隣り合わせだったのだ。

なお、堀辰雄を愛する人は、南軽井沢にある「軽井沢高原文庫」を訪れてみたら、いかがだろうか。堀辰雄の別荘や有島武郎の別荘などが保存してある。数年前に、夏休みのアルバイトで軽井沢高原文庫で働いたという文学好きの教え子（男子大学生）から、軽井沢高原文庫の入場券を何枚ももらったことがある。忘れがたい思い出となっている。

古典文学の季節感をひきずっている例として、堀辰雄の小説『風立ちぬ』を挙げてみた。高原にある軽井沢は、平地にある東京よりも季節の移ろいが早いために、旧暦と近い季節感となったのかもしれない。堀辰雄は、『美しい村』という小説でも、六月から七月にかけての高原を舞台として美しい短編小説を書いている。

また、七月七日は、周知のように「七夕」である。この「七夕」については、もう少し後で詳しく説明することにした。けれども、七月七日のみが、七夕なのではない。松尾芭蕉の『奥の細道』には、七夕を詠んだ、

荒海や佐渡に横たふ天の川

という名句があるが、その直前には、

文月や六日も常の夜には似ず

という発句・俳句が載っている。「七月六日」も、何か特別の夜のように思われるという意味である。「七夕」の前奏曲として、その数日前から空を眺めていると楽しい気持ちになる。

【現代短歌の七月】

次に、現代の新暦での七月の季節感を示している例を、いくつか挙げておくことにしよう。

短歌の世界で「〇月」という月の名前を詠み込んだものとしては、なぜか「五月」と「十月」が多いようだ。「七月」は、なかなか見つからない。数少ない用例の一つに、『サラダ記念日』で一世を風靡した俵万智の、

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

という歌がある。ボーイ・フレンドを女性が「君」と呼ぶ現代的なフィードバックも好ましいし、「サラダ」というみずみずしい青春を連想させるフレッシュな言葉つかいもいい。七月上旬のさわやかさを感じさせる。

また、一八七三年、日本で言えば明治六年に当たりますが、この一八七三年の七月十日、ベルギーのブリュッセルで、一人の天才詩人がもう一人の天才詩人を愛憎の果てに鉄砲で狙撃するというショッキングな事件が起きた。「秋の日のヴィオンのためいきの」で有名な象徴主義の詩人ヴェルレーヌが、『地獄の季節』でこれまた有名な早熟な天才児アルテュール・ランボーに向けて発砲したのである。我が国の戦後短歌界をリードした塚本邦雄は、この事件をもとに「水銀伝説」という連作短歌を創作したが、そのクライマックスで、

七月十日ブリュッセル、昼、蒼水の壁なし昏るるつひの耳鳴り

と歌っている。暑い夏に、「蒼水」すなわち青い水のように心を凍らせて、ヴェルレーヌが幻聴に苦しめられつつ、愛するランボーを憎むようになって発砲するに至った瞬間を劇的に詠んでいる。「壁なし」は、「壁のように」の意味。この事件の後、ヴェルレーヌは捕えられて入獄し、ランボーは『地獄の季節』を編集して、一人としてアラビアに向かって去ることになる。

塚本邦雄には、また、

七月の泡だつ蓮田 ラスコリーニコフ戦争にゆかば何せし

という短歌もある。ラスコリーニコフは、むろんドストエフスキーの『罪と罰』の主人公である。世界文学の傑作と言われる『罪と罰』は、次のように書き始め

られている。

七月はじめの酷暑のころのある夕暮である。一人の青年が、小部屋を借りているS横町のある建物の門をふらりと出て、思いまようらしく、のろのろとK橋のほうへ歩きだした。(工藤精一郎訳)

ロシアの帝都・ペテルスブルク。七月の夏の狂気によって、一人の若者が高利貸の老女を殺害した。天才は、自分のために他人を殺害しても許される、というのが若者の陥った狂気だった。塚本邦雄は、日本の暑い夏の七月に、蓮の花の咲き誇る田圃を見ているうちに、ふと不思議な興奮を感じ、もし『罪と罰』のラスコーリニコフが徴兵されて戦争に従軍することになったならば、やむを得ず(あるいは喜んで)敵兵を殺害しただろうか、それとも殺せなかっただろうかという疑問を抱いたのではないか。あるいは、田圃の水の下の蓮根が、鉄砲の弾を込める銃弾の形を連想させたからかもしれない。人間、誰しも殺人者となりうるという恐ろしさを、この短歌は暴き出している。夏は、狂気の季節なのでもある。そういうえば、『源氏物語』で光源氏が継母に当たる藤壺と不義密通してしまうのも、夏の出来事だった。

話がやや人間性の暗部の方へ行ってしまったので、爽やかな例も示しておきたい。俳人の山口誓子は、『凍港』という句集に、

七月の青嶺まぢかく溶鉢炉

という代表句を残している。梅雨明け直後のすがすがしい大気の中に浮かび上がる青々とした山々を詠んで、忘れがたい俳句である。また、文芸評論家・山本健吉の妻だった俳人の石橋秀野は、「七月二十一日入院」という詞書を持つ、

蟬時雨子は担送車に追いつけず

という哀切な俳句を残して、若い命を了えた。「担送車」とは、病室から手術室に患者を運ぶ手押し車のこと。東京でも蟬が鳴き始めると、その耳を聳する「蟬時雨」の中で、人間の生と死を凝視した石橋秀野の俳句を思い出す俳句愛好者は多い。藤沢周平の時代小説の傑作『蟬時雨』も、「蟬時雨」という俳句の季語の

持つ哀切な響きが「悲恋」というテーマをみずみずしく輝かせる効果を發揮している。

【七月七日＝七夕】

七夕は、旧暦の七月七日の行事である。まだ梅雨の終わらない新暦の七月七日の空に天の川が見えるべくもないのだが、「七」という奇数が二つ並ぶ縁起のよい日なので、新暦の今でも「七月七日」を七夕の日としているのだろう。宮中行事としては、「乞巧奠きこうでんきこうでん」と呼ぶ。

旧暦では、七月・八月・九月の三カ月間が「秋」なので、七夕は秋の行事ということになる。日本人の季節感を美しく秩序だてて配列している『古今和歌集』の「巻四」は「秋の上」であるが、「七夕」「天の川」「ひこぼし」「たなばたつめ」などの言葉が多数見えている。「読み人知らず」の一首を、紹介しておこう。

秋風の吹きにし日よりひさかたの天の河原に立たぬ日はなし

この歌は、牽牛すなわち彦星の訪れを待つ織女の立場で歌われている。毎年、七月七日には恋しい彦星と逢瀬が持てるのだが、その日時はあらかじめ決まっています、変えられない。そう頭ではわかっているものの、立秋になり七夕の日が近づいてくると、彦星を待つて何日も天の川の河原に立たずにはいられない、という「待つ女」の哀切な心境を詠んだものである。「ひさかたの」は、「あま」とか「日」などにかかる枕詞。

「秋風の」の歌を一読すれば明らかのように、牽牛が川を渡る、織女が男を待つ、という設定である。ところが、この「七夕」の行事は中国から移入されたのだが、本家の中国では何と女である織女の方が天の川を渡って積極的に牽牛に逢いにゆくものであったという。

我が国でも、女性が愛や憎しみの力によって男性に対面すべく川を渡る、というストーリーの伝説はいくつかある。有名な例では、『娘道成寺』では清姫という女性が安珍という若いお坊さんを追いかけて、蛇の形になって日高川を渡るという場面がクライマックスである。また、近代文学になるが、白樺派の有島武郎に『或る女』という小説があり、恋多き女が新しく生まれ変わるために船に乗り、太平洋を渡ってアメリカを目指すという結末になっている。「川や海を渡る女」という点で、中国におけるもとの「七夕」伝説の男女関係を連想させるもの

がある。ちなみに、「橋を渡る女」という発想も根強く、『源氏物語』の最後が夢浮橋巻であるのは、浮舟が生まれ変わるために「橋を渡る女」であることを強く示唆している。

ただし、『万葉集』の時代から、既に男の牽牛が天の川を渡って織女に逢いにゆくというかたちになっているので、こと「七夕」に関しては、我が国では「男が女に逢いにゆくために川を渡る」という発想が好まれたことがわかる。

それでは、「待つ側」の織女にとって、牽牛を待ち続けるのはどのような心境なのだろうか。一年に一日だけしか逢えないというのは、もちろん悲しいことである。けれども、毎年毎年七月七日になれば、牽牛は必ず自分のもとに逢いにきてくれる。永遠に逢いつづけられるという点では、大変におめでたいことだと言えよう。

先程も名前を出した紫式部の『源氏物語』に、「総角」という巻がある。宇治を舞台として展開する宇治十帖の三番目の巻である。その巻に、匂宮という絶世の美男子が登場し、宇治に住む中の君という女性と結ばれるが、天皇の息子という身分柄、そう頻繁に遠い宇治を訪れるわけにはいかない。待つ側（待たされる側）の女の気持ちを描いた箇所があって、ごくたまに訪れる匂宮のすばらしい姿を見ると、

げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ。

という心情だと説明されている。現代語に訳すと、「七夕のように一年に一度しかない訪問であったとしても、こうした彦星の美しい光を待ちつづけたいものだ」というのだ。「待つのはつらい」、しかし、「待つただけのことがあって、会えた時は生きていてよかったと思う」ということだろう。

【星の宮】

やや話題は変わるが、九州の筑前国（現在の福岡県）には「星の宮」という神社があって、独特の風習があった。「天の川」という川を挟んで北側に彦星を祭る宮があり、南側に織女を祭るお宮がある。女性が自分にとって最良の夫を決めたい時には、七月一日から七日まで神社にお籠もりをする。そして、天の川の中に棚を作って、盥を三つ置き、それぞれに一人ずつ男の名前を書いておく。七夕の夜、彦星がどの盥に映るかによって、星の光の映った盥に名前を書いてある男

性が、天が女性に授けた理想の配偶者として決定される、というのである。この星祭りの詳しい式次第はよくわからないが、運命的な神の託宣で結婚相手を決めようとするものようだ。この「星の宮」の風習は、『古今和歌集』や『伊勢物語』の本文の解釈するための予備知識として、国文学の注釈書で広く知られるようになった。

現在、福岡県の小郡市に、野田宇太郎文学資料館がある。山口県の小郡市ではなく、福岡県の小郡市である。福岡市から西日本鉄道で行く方法もあるが、わたしは佐賀県の鳥栖市からタクシーで行くようにしている。ここには、「文学散歩」という新しい文学普及の方法を考え出した小郡市出身の詩人・野田宇太郎の集めた貴重な書籍や雑誌が所蔵されている。森鷗外や上田敏や木下杢太郎などの貴重な書籍が研究者に公開されていて、わたしはこれまで何度お世話になったかしかない。

さて、この福岡県の小郡市の野田宇太郎文学資料館の敷地内に、「小郡ふれあい広場」という公園があって、「星の宮」のお祭りが再現されている。「文学散歩」の考案者である野田宇太郎の旧蔵書を集めた福岡県小郡市を「文学散歩」して、貴重な書籍を閲覧したあと、「星の宮」の昔をしのぶというのは、本当に楽しいことである。

この広場のすぐ近くには、宝満川（たからみづがわ）をはさんで牽牛と織女をまつる二つの神社（神社跡を含む）が現存している。小郡市は、現在では筑後国に入るとされるが、王朝文学で語られるのは筑前国の星の宮である。おそらく、筑前と筑後の国境に位置するのだろう。

【毘沙門の本地】

牽牛と織女の話をもう少しつづけよう。室町時代には、「お伽草子」と呼ばれるジャンルに属する短いフィクションがたくさん作られた。本当に、内容はさまざまである。その中に、男性主人公が愛する女性と死別したものの諦めきれずに、死者の世界までたずねてゆき、もう一度彼女を人間の世界に蘇らせようとする話がある。それが、『毘沙門の本地』という作品である。

天竺のある国の王子が主人公である。愛する女性は死んでしまい、再会するには梵天様の宮殿の井戸まで旅をせねばならないと、助言される。それは、何と宇宙の果てにあるというのだ。ここから、『毘沙門の本地』という作品は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』と雰囲気似通ってくる。

王子は、空を飛ぶ竜馬にまたがって、宇宙の旅をつづけるが、室町時代の人々の世界観を反映していて、とても興味深いものがある。王子は、宵の明星、明けの明星、お月様、お日様などと次々に出会っては、彼らに最終目的地である梵天様の宮殿への道筋を質問するのだが、その中に「牽牛星」と「織女」に出会う場面があるのだ。引き裂かれた男女の再会を語るストーリーなので、ごく自然に七夕の二つの星が登場してきたのだろう。

わたしが面白いと思うのは、牽牛が腰のところに二、三匹の「犬」をぶらさげている点である。一方の織女は、二人の幼な子をかわいがっているというイメージである。牽牛の「犬」は、牧羊犬なのだろうか。さきほど紹介した福岡県小郡市の宝満川を挟む通称「七夕の里」でも、牽牛をまつる神社は「犬飼さん」と人々から呼ばれていたそうである。そして、織女のまわりの二人の「幼な子」は、彼女と牽牛との間に生まれた子どもたちなのだろうか。いろいろ、イマジネーションが広がってゆく。物語の最後は、巡り会った二人が再び結ばれるという、典型的なハッピーエンドとなる。

【長恨歌の悲恋】

七夕をめぐる男女の愛の物語を、人類普遍の感動にまで高めたのは、やはり中国の『長恨歌』ではなからうか。唐の時代の大詩人・白居易の作品である。白居易とも言ふ。玄宗皇帝と楊貴妃との愛と別離を主題としていることは、広く知られている。先程ストーリーを紹介した『昆沙門の本地』の場合には、男と女が死別したあと、残された男のみならず死者の世界へと旅立つのだが、『長恨歌』ではそうではない。男の代理人の旅立ちというパターンが採用されている。

玄宗皇帝は、美女・楊貴妃を溺愛し、そのために政治を忘れてしまい、内乱が勃発した。国が乱れた責任を取られ、馬嵬という所で楊貴妃は玄宗皇帝から死を賜わってしまう。まもなく内乱は収まり、玄宗皇帝は都にもどってくるが、楊貴妃のいない生活が寂しくてならない。ここに、魔法使いが現れる。そして、玄宗皇帝の愛のメッセージを携えて、死者の世界にいるはずの楊貴妃を尋ね出すのだ。魔法使いが楊貴妃に向かって、「あなたと玄宗皇帝の二人しか知らない秘密があったら、あなた本人とわたしが会った証拠にぜひ教えてほしい」と頼む。そのあとの『長恨歌』の本文を、読んでおこう。

七月七日長生殿

夜半人無く私語の時

「天に在りては願はくは比翼の鳥となり

地に在りては願はくは連理の枝とならむ」と

天長地久時ありて尽くとも

此の恨みは綿々として尽くるの期無けむ

玄宗と楊貴妃とは、かつて七月七日の七夕の夜に、たった二人だけになった時に、これから何度死んでも生まれ変わって愛し合おうと誓いあったというのだ。天上に生まれるのであれば、雄と雌とが一体となっている「比翼の鳥」になりたいのだ、地上に生まれるのであれば、二本の木が一つに結びあっている「連理の枝」になりたいものだ、というのである。

今でも、仲むつまじい男女のカップルを「比翼連理」と言う。「比翼」と「連理」という日本酒大吟醸の銘柄もある。この永遠の愛の誓いは、「七月七日の七夕」の宵だったことに、意味があるのだと思われる。牽牛と織女は、一年に一回だけだが、この宇宙がなくなる限り、永遠に会いつづられる。それにあやかって、自分たちも愛を貫きたいというのである。

【長恨歌から日本文学へ】

この『長恨歌』の世界は、我が国の古典文学に広く受け入れられた。『源氏物語』の中にも、桐壺更衣を失った桐壺帝の悲しみ（桐壺巻）、妻である葵の上と死別した光源氏の嘆き（葵巻）、そして最愛の紫の上に先立たれた晩年の光源氏の断腸の思い（幻巻）などという具合に、何度も何度も『長恨歌』の表現が引用されている。

平安時代には『長恨歌』から『源氏物語』が影響を受けたという話をしているのだが、次の鎌倉時代には、『源氏物語』が例えば『平家物語』などに影響を与えることになる。文学は、影響を受けたものが今度は影響を与える側に回るといふ重要な特徴がある。それが積み重なって「伝統」というものを形成する。

人間の感受性が何人ものすぐれた文学者の心を通過することで蓄積され、数百年あとの時代を生きるわたしたちの心までをも感動の渦に巻き込むのだ。だからこそ、先人に教えられたわたしたちの「感動」は、次の世代へと譲り渡すのがわたしたちの義務であると言えよう。

『平家物語』の中の「小督」の部分は、完全に『源氏物語』桐壺巻の換骨奪胎

である。高倉天皇と小督の「引き裂かれた愛」を語る『平家物語』の叙述は、『長恨歌』と『源氏物語』桐壺巻の世界を足して二で割ったようにして生成したものである。

【七月九日森鷗外忌】

七月七日の七夕から目を転じて、七月九日へと話題を変えよう。近代文学の代表的な文豪である森鷗外は、本名を森林太郎と言う。石見国の津和野という城下町で生まれた。現在は島根県であるが、島根県と言っても、電車で行く時には山口県の小都市から山奥へと入ってゆくの、山口県に近い島根県ということになる。その津和野で、鷗外は西暦一八六二年に生まれた。明治維新の六年前のことである。そして、西暦一九二二年、元号で言えば大正十一年に亡くなった。この命日が、七月九日なのである。

鷗外の墓は、我が電気通信大学のある調布市の隣の三鷹市の禅林寺にある。黄檗宗の寺であると言う。鷗外は晩年「鷗外」というペンネームを嫌い、自分は「石見人・森林太郎として死にたい」と遺言したので、禅林寺の墓には「森林太郎之墓」とだけ記されている。この鷗外の墓のすぐ向かい側には、昭和二十三年六月十三日、玉川上水に入水自殺した太宰治の墓がある。

毎年、七月九日には、「鷗外記念会」の主催による追悼式と講話会とが開催されている。文京区立鷗外記念本郷図書館の共催でもある。森鷗外の直系の子孫の方も、必ず出席しておられる。一九二二年になくなったので、この文章を書いている二〇〇一年は、数えて丁度「八十回忌」ということになる。この日には、わたしも禅林寺に必ず参列して、鷗外の墓前に献花したいものだと思っている。ちなみに、献花料は、一人千円である。鷗外記念会の長谷川泉理事長の司会で、参列者の一人一人が鷗外文学に寄せる思いを語り合う文学講話会も、献花式の直後に開かれ、有意義である。

禅林寺の立派な山門を入ったところに、病床の鷗外が口述して親友の賀古鶴所が書き写した有名な「遺言」が記念碑に刻まれている。

なお、鷗外と並び称される明治の文豪は夏目漱石だが、夏目漱石の墓は豊島区雑司が谷霊園にある。わたしは目白の日本女子大学で非常勤講師をしていた時期に、講義の後で近くの雑司が谷霊園まで足を運んで漱石の墓を見に行ったことがある。とにかく、予想以上に巨大で、ものものしい墓なので驚いた。戒名も実に立派なものが墓に刻まれていた。鷗外の墓は、立派なことは立派だが、どこ

なく落ち着きと風格が感じられる。漱石の墓が好きか、それとも鷗外の墓が好きかは、判定者がどちらの文学者の愛読者であるかによって微妙に異なってくることだろう。このエッセイの読者には、二つの墓をぜひ見比べていただきたい。わたしは、鷗外の墓の「たたずまい」が好きであると言っておこう。

【小説家・森鷗外の苦闘】

二〇〇一年七月九日に八十回忌を迎えた森鷗外という文学者は、なぜ近代を代表する「文豪」と呼ばれるようになったのだろうか。どこが、それほど素晴らしいのだろうか。この点について、わたし自身の考えを述べておこう。

わたしは若い頃から、大学と大学院でひたすら『源氏物語』の勉強と研究をしてきた。だから、ずっと古典文学の世界にひたひた生活をしてきた。ところが、四十歳を過ぎたころから、「古典文学」と「近代文学」はどこが同じでどこが違うのだろうか、という疑問を感じるようになった。そして、初めて本気になって明治の文豪たちの残した代表的な小説を読むようになった。

現代とは違って、明治時代にはどのような日本語で小説を書くかという難問があった。結果的には「言文一致」と言って、「話し言葉」と「書き言葉」が融合して一つに融け合った日本語で小説が書かれるようになった。二葉亭四迷の『浮雲』という小説が、そのターニング・ポイントだったと言われる。その文体の試行錯誤の時期に、多数の明治の文豪たちがさまざまな野心的な挑戦をしているのだが、中でも森鷗外は『源氏物語』の世界を近代文学に取り込むためのさまざまな工夫をしていることが、わたしには肌で痛感できたのだ。これは、本当に心からの驚きだった。

森鷗外は、明治十七年六月から二十一年九月まで、ドイツに留学している。帰国後、明治二十三年から二十四年にかけて、彼はドイツを舞台とする短編小説を三つ、たてつけに発表した。『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』の三つである。研究者は、「ドイツ三部作」と呼んでいる。

この「ドイツ三部作」は、『源氏物語』を思わせる美しい文語文（雅文体）で書かれている。その中には、いくつも『源氏物語』や『伊勢物語』や『古今和歌集』の古典語がちりばめられている。例えば、『文づかひ』という小説に、日本の軍人がドイツ人の女性と二人きりの時に、頼み事をされる場面がある。その時、小林という名前の軍人は、自分は決して「色なる心」の持ち主ではないのだが、美女を前にして心がときめかないではなかった、と告白されている。

この「色なる心」という言葉は、『源氏物語』の「宇治十帖」に登場する匂宮という特徴ある人物のキーワードである。匂宮は、先程「七夕」の話題で名前を出したことがあるので、思い出していただきたい。ライバルと目される求道的な薫とは違って、匂宮は大変に好色な人物であって、しかも情熱的な男性である。森鷗外は、明治時代の近代小説『文づかひ』に「色なる心」という『源氏物語』に起源を持つ言葉を使用することで、小林という人物が決して「匂宮のような好色な人物ではない」こと、つまり「薫」のように信頼するに足る青年であることを、読者に教えている。

鷗外は、自分の生きていた時代よりも九百年も過去の平安時代の言葉を使いながら、近代人の苦悩と孤独を描くことができた。そして、鷗外の作品を読む明治時代の読者たちも『源氏物語』を媒介とした鷗外のメッセージを正確に読み取ることができたのだ。「日本の近代文学」の根底には、『源氏物語』が無視し得ぬ役割を發揮している。

【森鷗外の短歌】

鷗外と『源氏物語』の深い関わりを示す例を、さらに挙げておこう。今度は、鷗外の短歌作品を使って説明しよう。鷗外の短歌については、従来は低い評価が与えられてきたが、「文豪森鷗外」の文学者としての資質を最も端的に示している短歌は、「鷗外の文学観」を凝縮したものとして、再評価されねばならないのではないか。

石見国の城下町・津和野の出身だった森鷗外は、隣の長州藩出身の政治家・山県有朋に接近する。そして、山県有朋を中心として、「常磐会」という短歌サークルを結成した。その会合で詠んだ歌を集めたのが、『常磐会詠草』である。

東京大学総合図書館には、森鷗外旧蔵の『常磐会詠草』の刊本がある。これには、鷗外だけでなく多数の参加者たちの「入選歌」が印刷されている。『鷗外全集』では、この中から鷗外の作品のみが抜き出されている。なお、文京区立鷗外記念本郷図書館には、鷗外が常磐会に参加した時のメモが現存しており、複数の選者たちが提出されたすべての短歌作品の優劣を具体的に論評した内容が鷗外自筆で書き込まれている。

この『常磐会詠草』の中に、「藤」という題で詠んだ鷗外の歌が載っている。明治四十年七月二十一日の短歌作品であり、『源氏物語』の蓬生巻を本歌取りした痕跡が発見できる。

門に待つしのびぐるまの榻のうへに藤の花散るよもぎふの宿

「榻」というのは、牛車を停止させる際に用いる道具のこと。「よもぎふの宿」という言葉が示しているように、明らかに『源氏物語』の蓬生巻の世界に鷗外はひたりこんでいる。光源氏は、須磨・明石への三年間の旅から都にもどってきたあと、花散里という女性のもとを夜にこっそり訪れる。その時の乗り物のことを、鷗外は「しのびぐるま」と呼んでいる。しかし、花散里の屋敷に向かう途中で、荒れ果てた屋敷の壁から藤の花が咲き乱れているのを見て、光源氏はそこがかつて交際のあった「末摘花」という不思議な女性の住まいだったことを突然に思い出した。そこで、「惟光」という腹心の部下を蓬やペンペン草の生い茂る屋敷の中に遣わして、末摘花が今でも住んでいるのか、確認させたのである。

国宝『源氏物語絵巻』にも描かれている有名な場面である。この場面を短歌に詠むことで、「惟光が末摘花の屋敷に入って探索している間中、光源氏の乗っている牛車には、さぞかし満開の藤の花が月光を浴びながらちらほらと散りこぼれていたことだろうな」と、鷗外は面白がっているのだ。

常磐会に参加しているメンバーは、短歌革新運動に消極的な保守的歌手（旧派歌手）が多かったため、『源氏物語』を読んだことのある選者は多かったことだろう。ただし、前述の文京区立鷗外記念本郷図書館に残る『常磐会詠草』の鷗外の自筆メモに基づいて、会の選歌作業の模様を復元してみると、意外な事実が分かる。選者の一人である鎌田正夫は、「榻のうへに」という鷗外の第三句に対して、「なくもがな」という批判を述べたというのだ。むろん、この時点の鎌田には、自分が批判したのが鷗外の作だとはわかっていない。しかし、鎌田の批判を何げない顔をしてメモに取っていた鷗外の心の中はどんなものだったろうか。結局、この歌は鎌田正夫が批判したものの、佐佐木信綱と井上通泰の二人が加点して、無事に入選を果たした。

明治の「旧派」の歌手の中でも、『源氏物語』は皆の共通認識となっていない。彼らは、古典を踏まえた表現の滋味が理解できず、ただ単に見たものを見た通りに歌っただけの作品をよしとする傾向があった。鷗外の短歌を耳で聞いて、人々が「鷗外さん、巧みに『源氏物語』の世界を本歌取りしたことですね。さぞかし、あなたも光源氏のように、末摘花のような変わった女性と交際した体験があったのではないですか」などと冗談を言い合ったりすることは、まったく

なかつた。「源氏物語」を近代短歌に利用した鷗外の試みは、まことに孤独な営みだった。

【真の古典の継承を目指して】

森鷗外には、映画にもなった『雁』という小説もある。岡田という大学生が、散歩の途中で「お玉」という不思議な美女を目撃するというストーリーである。この二人の出会いの場面は、何と『源氏物語』の夕顔巻の世界を下敷きにしていて。この「お玉」は、高利貸の男の愛人だったのだが、その高利貸の男のぎすぎすした夫婦関係は、『源氏物語』の夕霧と雲居雁の家庭内のどたばたを描く部分を下敷きにしていて考えられる。

「七夕」という行事が古代から連綿と現代まで伝わったように、『源氏物語』という今から千年前に書かれた王朝物語の「魂」が、生きたまま明治時代の近代文学に受け継がれている。そこに、わたしは森鷗外という文学者の偉大さの一面を発見しえたという感動を持つ。その鷗外の命日が、七月九日なのだった。

また、おまけのようになつてしまったが、鷗外の命日と同じ七月九日は、『海潮音』という素晴らしい翻訳詩集を出版した上田敏の命日でもある。上田敏は、森鷗外より先に亡くなったが、「森鷗外の系列」に属する偉大な文学者だと言える。

「森鷗外の系列」とは何か、という疑問を抱く読者のために、少しだけ補足説明しておく。わたしは、前述した福岡県小郡市の野田宇太郎文学資料館を何度か利用しているが、ここには「鷗外・敏・空太郎・龍之介・白秋・晶子・鉄幹」たちの宝物のような資料が収蔵されている。他の図書館では、近代文学に関して「夏目漱石の系列」に属する文学者たちの資料が中心となっていることが多いようだ。

現代にあつて、実際に小説を読んだことのある「読者の総数」において、森鷗外は夏目漱石の後塵を拝している。しかし、野田宇太郎文学資料館の所蔵物を総覧していると、「系列」として眺めた場合に、近代文学全体の中で「森鷗外の文学の系列」が「夏目漱石の文学の系列」を質的にも量的にも上回っているのではないかという気がしてくる。さらに、古典文学との関係を視野に収めた場合、文学の正統の位置は「森鷗外の系列」の方にあることがはっきりと断定できるというのが、『源氏物語』研究に二十数年を費やし、『源氏物語の影響史』という論文集で博士号を得たわたしの文学史的見通しなのである。

古典を受け継ぐ近代人がいて、初めて伝統文化は美しく輝く。彼らの労多くして益少ない試みを、これからも積極的に顕彰してゆかねばならない。

【七月十五日 盂蘭盆会】

七月十五日は、わたしの誕生日であるが、旧暦ではお盆に当たる。「盂蘭盆会」うらぼんとか「盂蘭盆会」うらぼんえなどと言う。「うらぼん」という発音は、古代インドのサンスクリット語（梵語）に漢字を当てはめたものだとされている。ちなみに、水を意味する「閻伽」あかもサンスクリット語である。

『仏説盂蘭盆経』（略して『盂蘭盆経』）という経典に書かれている内容によつて、七月十五日に亡親を供養することが始まったと言われる。ただし、この『盂蘭盆経』はインドから伝わった正式の経典ではなくて、中国で作られた「偽経」だとされている。

昔、目連尊者という釈迦様の弟子がいた。その名前は、『源氏物語』の鈴虫巻にも出ている。正しくは「目健連」と言つて、釈迦十大弟子の一人。まず、『源氏物語』の中の目連から説明しよう。『源氏物語』には、六条御息所という恐ろしい女性が登場する。彼女は、「生き霊」となったり「死霊」となったりして、光源氏の周りの女君たちに、執拗にたたりつづけた。その六条御息所が死後も成仏できずに、地獄で苦しんでいることを知った娘の秋好中宮は、自分が出家して尼になり、母の苦しみを救いたいと光源氏に訴える。鈴虫巻に語られているエピソードである。

この場合で、光源氏は目連尊者のエピソードを口にしながら、「地獄に落ちた母親の魂を助けるのは素晴らしいことだが、あなたが今すぐに、尼になるのはよくないことだ」と、秋好中宮の出家願望を強く諫める。このように、目連尊者は平安時代ではごく普通に人々の会話の中の話題となっていたのだ。

それでは、光源氏が口にした目連尊者は、どうやって母親を地獄の苦しみから救ったのだろうか。『盂蘭盆経』という経典の中身を、説明しよう。目連は、ある日、特異の神通力を発揮して、自分の父母が地獄に落ちていることを知る。親が骨と皮ばかりに痩せ衰えていたのを見て、食べ物をあげようとするが、その食べ物は地獄の業火、つまり炎に燃やされて、母の口にはどうしても入らない。泣く泣く地獄からこの世にもどつた目連尊者が釈迦に相談すると、釈迦は「七月十五日は仏教にとって特別な日だから、この日に、器に食べ物を盛り合わせてお坊さんたちに供養をすれば、その功德によって、父母や祖先たちを地獄の苦しみが

ら解き放つて悟りを得させることができる」と教えてくれた。それ以来、七月十五日に、孟蘭盆を営むことになったというのである。

七月十五日は、「夏安居^{II}げあんこ」と言つて、僧侶たちの夏の長期間の修行が終わる日であるので、確かに特別の一日なのだと思う。

かなり古い時代の『源氏物語』の注釈書である『紫明抄』という本（鎌倉時代の成立）は、鈴虫巻について感動的な説明をしている。目連尊者は愛する母親が地獄で苦しんでいることを知つて、みずから地獄へ旅立ち、母の替わりに自分が地獄に留まるから母を救つてほしい、と地獄の獄卒に嘆願したとまで書いてあるのだ。いつの世にも、母を思う子どもの真心は胸を打つ。目連尊者の母親が地獄に落ちたのも、おそらく愛する子どもを思う母親の愛情と執着心が強すぎたからだろうから、これも胸に迫るものがある。

『源氏物語』に登場する六条御息所も、光源氏を愛し過ぎた気持ちの強さが裏目に出て、地獄に落ちた。それを、「后の位」を捨ててまで救いたいと願つた娘の秋好中宮の真心も、感動的である。

【正しい心の盆と、悪しき心の盆】

さて、この「孟蘭盆」という行事は、古く推古天皇の頃から行われていたようで、平安時代の女性の書いた日記である『蜻蛉日記』などでも、「ぼん」に言及されている。

王朝文学に描かれた「孟蘭盆」の中から、感動的な話と恐ろしい話の正反対の二つを、ここでは紹介しておきたい。

まずは、「恐ろしい孟蘭盆」の話から。清少納言が書いた『枕草子』に載っている親不孝者のエピソードである。ある男が、つまらない父親を持っていて、いつも世間に対して父親の存在を恥ずかしく思っていた。ある時、伊予国と言うから、今の愛媛県で船に乗って瀬戸内海を通つて都に戻る旅をした時に、よい機会だと思つて、何と父親を船から波間に突き落とすとして殺害してしまつた。この悪事は、いつの間にか、世間にも知られてしまふ。しかし、本人は平気な顔をして、亡き父親のための「孟蘭盆」を七月十五日に行おうと準備し始めた。父親を殺した息子が父親の追善をするというのは矛盾しているのですが、世間の人々は言葉もない。この時、道命阿闍梨（^{II}どうめいあじやり）という僧侶がいて、この人は『蜻蛉日記』に出てくる右大将藤原道綱の子どもののだが、一首の歌を詠んで親不孝息子を痛烈に批判したという。

わたつ海に親おし入れてこの主の盆する見るぞあはれなりける

歌の意味を、解釈しておこう。「海に親を転落死させた張本人が何食わぬ顔をして孟蘭盆の施主を努めているのを見るのは、何とも驚きあきれるばかりであるなあ」。許しがたい、最悪の孟蘭盆である。

次に、真心の籠もつた孟蘭盆の話を紹介しよう。『今昔物語集』巻二十四の第四十九話。今は昔、都のある所に、ひどく貧しい女性が住んでいた。七月十五日の孟蘭盆の日が巡つてきたが、あまりにも貧しくて、親の供養のための供物の準備ができない。それで、自分が身にまとつていた一つの衣服の表絹をほどこいて、それを器に乗せて供物の替わりにしようと思ひ立つた。器の上に古着の絹を乗せ、それを蓮の葉で覆い隠した。そして、「愛宕^{II}おたぎ」（今の清水寺から南側にかけての一带を指す）にあつた寺に供えて、泣く泣く家に帰つた。

人々が、その蓮の葉を見てみると、貧しい女の詠んだ歌が書いてあつた。その歌は、次のようなものだった。

タテマツル ハチスノウヘノ露バカリ コレヲアハレニミヨノホトケニ

「わたしが献上できるのはたったこれだけです、蓮の葉に置いた露はわたしの涙です。この涙に示されているようなわたしの親孝行の真心を、仏様たちも『あはれ』と御覧くださいまして、わたしと亡き親とを救ってください」と、という意味である。「あはれに見よ（見てください）」と、「三世の仏」（過去・現在・未来の三世の仏たち）の懸詞になっている。

この立派な心掛けをした女性の本名は、ついにわからなかつたと、『今昔物語集』は結んでいる。

【江戸時代の盆のエピソード】

平安時代にも、『枕草子』や『今昔物語集』のように、悲喜交々の孟蘭盆があつた。いつの時代にも、人間の心の美しさや醜さが、この七月十五日の孟蘭盆の日には、はつきりと現れるようだ。

江戸時代の儒学者に、室鳩巢という人物がいる。その室鳩巢が書いた『駿台雑話』という随筆は、かなり広く読まれた。その本の中に、孟蘭盆の日に関するエ

ピントが載っている。

舞台は、加賀百万石の城下町・金沢。殿様の前田家の代々の墓所がある野田山には、家臣たちもその麓に先祖代々の墓を作っていた。盂蘭盆の日には、先祖を敬って、お墓の前で盛大に供養をしてたくさんのお供えをするのだが、夜は飾り付けをそのままにして家に帰らなければならない。そのお墓参りの人々が帰宅した後、心掛けの悪い男たちがやってきて、灯籠の火を消し、蠟燭を盗み、せっかく奇麗にしてある供物を目茶苦茶にしまった。

その場所に、浮浪者がいて、薦をかぶって寝ていたが、悪党どものあまりの狼藉ぶりに腹を立てて、注意する。「人々が御先祖のために真心からお供えした盂蘭盆の供物を目茶苦茶にするというのは、どういう見なのか」というわけである。注意された悪党どもは、反省するどころか、「浮浪者ふぜいに注意される謂れはない」と反論する。説得をあきらめた浮浪者は、「あなたたちが今している泥棒のような悪行を自分はしたくないからこそ、おとなしく、このような浮浪者になっているのさ」と言ったというのである。

この話の主題は、「盂蘭盆」という日に、礼儀をきちんとわきまえた人間と、そうでない悪人との違いがはっきりと日に見える形で現れる、ということではないか。その心の正邪は、身分や外見からだけではわからない、と室鳩巢は指摘しているのだろう。

この「お盆」の行事は、現在では新暦の八月十五日の前後に行うことが多いので、また八月の項で「お盆」の話題をするつもりである。七月十五日のお盆の話は、ここまでにしたい。

【七月十六日前後Ⅱ藪入り】

さて、「盂蘭盆」の話には一区切りがついたのだが、「お盆」に関連して、「藪入り」という行事がある。江戸時代など、店の奉公人や務め人たちが正月と盆の十六日前後に休みをもらって実家に帰ることを、「藪入り」と言う。なぜ「藪入り」と言うかという語源については、いろいろな説があって解決していないようだ。ただし、文字面を見ると、藪の生い茂る草深い実家に帰省して藪の中に入っただけからだと、とする語源説がリアリティがあるように思える。

現在でも、八月の旧の盆になると、大都市の会社から長期休暇をもらって草深い郷里に帰省するサラリーマンが多いが、これなども現代の「藪入り」の一つの形態なのだろうか。

もともとは新年の「一月十六日」だけが藪入りだったようで、後から盂蘭盆の七月十六日も加えられるようになった。それで、七月十六日の「藪入り」のことを、「後の藪入り」と俳句では言う。ということとは、俳句の世界では、単に「藪入り」と言っただけでは、新年・月の藪入りと解釈されても仕方がないということなのだろう。

炭太祇（「たん・たいぎ」という十八世紀の俳人に、藪入りを詠んだ有名な句がある。

藪入りの寝るやひとりの親の側

「ねるや」ではなく、「ぬるや」と発音するのだろう。父親が早くに亡くなっ てしまい、母親の女手一つで育てられた子どもがいたという設定。「母一人、子一人」が別々に暮らさなければならぬ悲劇は、古くは平安時代の『伊勢物語』八十四段にも描かれている。在原業平は、母親の伊都内親王にとつては、たった一人の息子だった。その一人息子を母親は平安京の宮廷へ「宮仕え」に出す。母親は、古い都である長岡京に一人が残った。ある年の暮れに、母親は一人で暮らす寂しさに耐え切れず、宮仕えしている息子に歌を贈る。息子も母親に会いたくてたまらないのだが、そこは「すまじきものは宮仕え」の諺の通りで、自由に母親に会えないのを悲しんだという話である。この『伊勢物語』と、炭太祇の俳句は、母子関係の設定が似ている。

さて、炭太祇である。「藪入りの寝るやひとりの親の側」。久しぶりに帰省した子どもの目と心で、母に添い寝するようすが歌われている。半年の間にたまりにたまった話題で、二人はなかなか寝つけずに、いつまでもひそひそ話をしていたというのだろう。子どもが母親の寂しさを慰めれば、母親の方でも子どもに仕事のつらさを我慢するように励ましていたのだろう。その長い会話もいつの間にか終わって、子どもは久しぶりに母親の側で安心してぐっすり熟睡に入った。いかにも心温まる光景である。

なお、「藪入り」の文学史の中で、最高傑作と称されているのが、与謝蕪村の『春風馬堤曲』である。藪入りで帰省する女性の奉公人を描いている。ただし、『春風』馬堤曲というタイトルが示しているように、七月の藪入りではなくて、一月の藪入りである。タンポポが咲いていたりして、季節感が七月の藪入りとは違っているので、ここでは作品のタイトルだけを紹介しておくに留める。

江戸時代を背景としている数々の時代小説でも、必ず「藪入り」は重要な季節感を提供してくれている。近代を描いた小説でも、山本有三の『路傍の石』に、「藪入り」についての言及があった。

主人公の「吾一」少年が奉公に出て初めて、母親の待つ家に「藪入り」で帰る場面がある。小説の作者が突然にナレーターとして表面に出てきて、

あづき煮てやぶ入り待つや母ひとり

という俳句を紹介しつつ、母と子のきずなの強さを確認している。

【七月十七日 水原秋桜子忌】

近代俳句の世界で、黄金時代を築いたのが昭和初期の『ホトトギス』であることはよく知られている。大御所である高浜虚子の門下に、俳号が「S」という頭文字で始まる才人が四人いた。それで、彼らを「四S」と呼ぶ。今ならば、さしずめ「四天王」と呼ばれるところだろう。

この四人の名前は、水原秋桜子（しゅうおうし）、阿波野青畝（せいほ）、山口誓子（せいし）、高野素十（すじゅう）。この中の水原秋桜子を、取り上げたい。

水原秋桜子の「秋桜子」は、コスモスのこと。本名は、豊。東京大学医学部を卒業した産婦人科医である。わたしは東京大学の法学部と文学部とに在籍した経験があるが、医学部にも何人か友だちがいた。彼らは、「医学部の勉強が忙しすぎて、遊ぶ暇もない。むろん、俳句など作る時間的な余裕があるはずもない。昔の、水原秋桜子は医学の勉強をしながら、俳句の世界で名を成したのだから、本当に偉かったと思うよ」と口々に言っていた。

さて、この水原秋桜子だが、明治二十五年（西暦一八九二年）の十月九日に生まれて、昭和五十六年（西暦一九八一年）七月十七日に亡くなっている。亡くなって間もないので、俳句の歳時記にもまだ「秋桜子忌」という秋の季語は載っていないようである。けれども、近代俳句を語る際に大切な人物であることは言うまでもない。

水原秋桜子の第一句集は、『葛飾』。その中から、代表作を一つだけ挙げるとすれば、次の句になろう。

来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり

季語は「馬酔木」で、季節は春。奈良の東大寺三月堂で詠まれたもの。「来しかた」は、過ぎて来た方、という意味で、時間と空間の両方にわたって用いる。だから、「二通りの解釈が可能である。ちなみに、「来し方」には、「こしかた」と「きしかた」という二通りの発音があつて、『源氏物語』を音読する際にも迷うことがある。ここでは、「こしかた」と読んでおく。

まず、「自分が過ぎてきた方角」という意味にとつて、「ここ東大寺三月堂に来ると、自分が今そこを過ぎてきたばかりの方角に、馬酔木が咲き春の光が注いでいるのが見えるよ」という解釈ができる。おそらく作者も、このように解釈してほしいと思つていたことだろう。

また、作者の創作心理からは若干それるかもしれないが、「自分が過ぎて来た時間、すなわち過去」の意味に取ることも可能である。「馬酔木の花に春の光が差すのを見てみると、自分が生きてきた過去の日々がなつかしく思い出されることだ」と解釈しても、文法的に決しておかしくはない。

ここで『伊勢物語』を持ち出すと話が混乱するかもしれないが、在原業平が東下りして、その旅の途中で詠んだ歌がある。第七段。

いとどしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくも帰る波かな

この歌を詠んだ瞬間の業平の目の前には、波が打ち寄せては返す海岸の光景が見えている。自分の元来た方へ何度でも帰ってゆける波を見ているうちに、「過ぎ行く方」に二度と帰ることのできない我が身が悲しくてたまらなくなった、というのである。

この在原業平の歌の「過ぎ行く方」は、水原秋桜子の「来し方」と同じ意味の言葉である。だから、「自分が過ぎて来た方角、すなわち自分が幸福にこれまで暮らしてきた都の方角」と解釈してもよいし、「自分が生きて来た時間、すなわち幸福だった昔」と解釈してもよい。どちらか一つに、無理して決めてしまわなくてもよいのではなからうか。

水原秋桜子の有名な俳句、

来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり

の「来しかた」も、鑑賞する側の感受性によって、「方角」と「時間」という二通りの解釈があつてよいと、わたしは思う。

【七月十九日＝在原行平忌】

時間を一気に平安時代までさかのぼると、西暦八九三年の七月十九日が、在原行平の命日である。水原秋桜子の場合は新暦であるし、在原行平の場合は旧暦である。こういう事情があるので、単純には文学者たちの命日・忌日の一覧表を作成できない。在原行平の命日である七月十九日は、旧暦では初秋、秋の初めになる。

在原行平は、『伊勢物語』の主人公である在原業平の兄。母の違う異母兄弟ということになる。弟の業平の方は、西暦八八〇年に亡くなっている。兄の行平は、業平よりも十三年あとまで生きていたことになる。

在原行平は、台所で使われている「行平鍋」という道具の名前の中に、現代でも痕跡が残っている。「雪平鍋」とも書くが、「行平鍋」の方が正しいらしい。行平には、三年間、摂津国の須磨に左遷されていたという伝説がある。この伝説を利用して、紫式部が『源氏物語』の最初の山場である「須磨巻」と「明石巻」のストーリーを作り上げた事実は、よく知られている。

光源氏が須磨で都を思つて涙を流したのは、秋の初め（おそらく七月）のことだった。『源氏物語』の中でも屈指の名文とされる一節を、引用しておこう。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。

おおよその意味は、次のようになろう。「須磨では、いつそうものを思わせる秋風が吹く季節になりました。海は、光る君の御座所からは少し隔たっているのですが、かつて在原行平中納言が「旅人はたもと涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦波」とお詠みになった、その須磨の浦波が寄る音が、夜ごと夜ごと光る君の耳にまで聞こえてきます。これ以上は心になみみるのは、まさにこういう所の秋なのであります」。

さて、『源氏物語』に大きな影響を与えた在原行平の伝説だったが、室町時代になると在原行平の須磨流離を題材にして謡曲『松風』が作られた。世阿弥の作

つた傑作だと言われている。

在原行平は、蛸居先の須磨の地で、松風と村雨という名前の二人の海女を愛していたが、やがて都にはたった一人で戻っていった。まもなく、須磨に残された松風と村雨の耳に、行平が都で亡くなったという噂が届く。謡曲『松風』の表現にははつきりと書いてないけれども、この在原行平の命日が七月十九日なのである。二人の海女は、後を追うように亡くなる。けれども、その亡霊が月の美しい秋の夜に、さまよい出てくるというのである。幽玄の美学を大成した能舞台であり、詞章だと言われている。

もし七月十九日に月が見えるようであれば、わたしは松風と村雨の女心を思つて手を合わせたい。

【七月下旬の忌日】

七月の下旬は、気候的に暑いせいだろうか、多くの文学者が亡くなっている。二十四日が芥川龍之介の命日で、普通には「河童忌」と呼んでいる。月末の三十日には、伊藤左千夫、幸田露伴、谷崎潤一郎などが亡くなっている。

日を旧暦に転じると、七月二十六日には元良親王と太田道灌、三十日には飯尾宗祇が亡くなっている。

亡き人を忍ぶには秋の涼しい季節がふさわしいが、『源氏物語』でも桐壺更衣など「夏の暑さ」に耐え切れずに逝去する人物は多い。

【七月二十四日＝芥川龍之介忌】

まず、芥川龍之介の命日である七月二十四日から、話を始めよう。芥川は、明治二十五年三月一日に生まれ、昭和二年七月二十四日に自ら命を断つた。西暦に換算すると、一八九二年から一九二七年までとなる。今風の満年齢で言えばわずか三十五歳の死去である。

先程紹介したばかりの俳人・水原秋桜子は、芥川と同じ明治二十五年に生まれた人だが、何と昭和五十六年まで生きていた。もしも、昭和二年に自殺した芥川に、あと五十年余りの歳月が残されていたならば、どんな小説を書いてくれただろうかと思わずにはいられない。それでいて、わずかの期間にあれだけの名作群を残したのだから、本当に脱帽するばかりである。しかも、芥川龍之介の文学には大きな特徴があると言われる。

夏目漱石には『明暗』、尾崎紅葉には『金色夜叉』、志賀直哉には『暗夜行路』、

島崎藤村には「夜明け前」というように、「文豪」と世間から認められる文学者の代表作は、ほとんど「長編小説」である。ところが、芥川にはそれほど長い長編小説はない。短編小説だけ書いて「天才」と呼ばれたのは、おそらく芥川龍之介だけではなからうか。

芥川は、『今昔物語集』などの古典文学に題材を得て、それに近代的解釈を加えることで、『羅生門』『六の宮の姫君』『鼻』などの名作を書いた。ほんのわずかの人為的な操作を加えることによって、古典文学が近代文学に生まれ変わるといって「コンプスの発見」をした人物が、芥川である。

芥川龍之介と共に、夏目漱石の晩年の弟子だった内田百閒は、芥川への哀切な追悼文を残している。それも名文だが、わたしは現代の作家・嵐山光三郎の短編小説『水漬抄』もまた、何度も読み返している。この『水漬抄』は、平成十二年十二月の『オール讀物』に発表された作品。恒文社から刊行された『おとこくらべ』という短編集にも『葬儀』と改題されて収められている。芥川龍之介の自殺の第一報を聞いて駆けつけた近所の下島という医者に、遺族が示したという芥川本人の俳句の表現をタイトルにしている。

水漬や鼻の先だけ暮れ残る

この俳句には、「自嘲」、つまり自分で自分をあざわらうという意味の詞書が記されていた。

「自分は、だらしくなく鼻水を垂らしているような、みつともない存在ではない。拭かれもせずに垂れたままの鼻水がなぜか白く光って、顔のほかの部分は夕暮れの暗さに紛れていったのに、この鼻の部分だけが反照によって、ぶざまに光っていることだ」という意味だろう。

嵐山光三郎の『水漬抄』は、芥川の自殺が発見された七月二十四日の早朝の出来事、急を聞いて田端にあった芥川家に駆けつけた大勢の文学者たちの発言と行動、その夜に近所で行われたお通夜の様子、日を改めた七月二十七日に、谷中斎場で執り行われた葬儀の模様など、実によく調べられており、当事者たちの発言と人間性が目に浮かぶように書かれている。

特に、恋多き男だった芥川をめぐる女性同士のライバル意識が、リアルに書き込まれている。それが深刻になりすぎていずに、かえって笑いを誘っている。また、芥川の友人だった久米正雄が、長男の芥川比呂志に向かって、「きみの父は

闘いに勝ったのです」と励ます場面、兄の有島武郎に自殺されたつらい過去のあつ作家・里見弴が、「死にやいいいってもんではありませんや」「残されたほうがずっとつらい」などと発言する場面など、迫力に満ちている。

また、歌人・斎藤茂吉が、

むしあつくふけわたりたるさ夜なかのねむりにつきし死をおもはむ

という追悼歌を詠む場面など、印象的である。斎藤茂吉の短歌は、「昨夜は、とても蒸し暑く寝苦しかった。芥川氏は、寝苦しさのあまり睡眠剤を飲み過ぎて、それがそのまま永久の眠りにつながったのだろうか。その眠りぎわの彼の心の中を推測すると、いたたまれなくなってしまうことだ」という意味だろう。「つきし」の「つき」は、連続するという意味の動詞「つく」の連用形。「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。

わたしも、七月から八月にかけて熱帯夜が何日もつづいた深夜に目が覚めたりすると、「むしあつくふけわたりたるさ夜なかの」という斎藤茂吉の歌の出だしの表現を思い出したりする。夏の夜のべとべとした不快で不吉な皮膚感覚を、巧みに詠んだ歌である。

【『源氏物語』の影響力の消滅期】

ところで、芥川龍之介という文学者は、我が国の長い文学史の中でどういう時期に出てきた人なのだろうか。わたしは近代文学が大きな曲がり角を迎える転換期に、彼が小説を書き始めたことを強調しておきたいと思う。

大正時代に人格を形成した博識・博学の「教養人」たちは、語学の才能に恵まれ、何ヶ国語もの外国語に堪能だった。また、漢字で書かれた漢籍にも、明治の文人たちよりは劣るとはいえ、かなり精通していた。しかし、我が国の古典中の古典である『源氏物語』だけは、もはや原文で読めなくなっていたのだ。

与謝野晶子の有名な『新訳源氏物語』という口語訳が出版されたのが、明治四十五年、すなわち大正元年のことだった。すなわち、大正時代は、我が国の教養人が西洋文明に憧れ、その結果として日本文化の根底とのつながりをなくしてしまった時代であると言えるのではないか。大正時代の教養人は、ほかならぬ文学者を含めて、『源氏物語』を原文で読む能力を無くしてしまった。

芥川龍之介は、府立三中・第一高等学校・東京帝国大学という最高レベルの教

養教育を受けた知識人だった。英語やフランス語には、きわめて優れた才能を示したと言われる。その芥川は、『文芸的な、あまりに文芸的な』というエッセイの中で、正直な読書体験を告白している。つまり、自分の周囲の知識人の中で、『源氏物語』を原文で読んだことのあるのは、たった二人しかいない。一人は谷崎潤一郎、もう一人は明石敏夫だと言っている。たまたま二人のうち一人である貴重な明石敏夫は、現在は一般人にほとんど知られていない人物である。

後世に名前の残る文学者の中で、谷崎くらいしか、『源氏物語』を原文で読める文学者がいなくなったというのは、鳥肌立つ事実である。これは、与謝野晶子の現代語訳で十分だということではなくて、『源氏物語』に学ぶという基本姿勢が失われたことを意味している。ここで、古典から連続としてつづいてきた日本文化の伝統は、一端途絶えてしまう危険性があった。

芥川龍之介は、名作『羅生門』の表現を推敲するプロセスで、鎌倉時代に書かれた鴨長明の『方丈記』の本文を引用した痕跡がある。また、平安時代の『今昔物語集』はいくつもの短編に見事に蘇えらせた。つまり、こういうことだ。大正時代の文学者たちは、西洋文学と接することによって「文学に開眼」した。その西洋的な文学の見方や人間に対するリアリティな分析は、我が国の「中世文学」と偶然に似通っていた。また、平安時代の「説話文学」とも似通う側面があった。ところが、不幸なことに、我が国の文学スタイルの独自性を示してあまりある「王朝物語文学」とは共通点をさほど持たなかったのである。

この不幸は、元号が大正から昭和・平成に変わっても、つづいている。小林秀雄を筆頭として、たくさんのおうぐれされた文芸評論家が昭和の時代に出現した。彼らは、西洋文学によって理論武装し、見事に日本の「中世」（あるいは近世）という時代の精神性と人間性をえぐり出すことに成功した。けれども、なぜか彼らは『源氏物語』の本質に迫ることができなかった。吉本隆明の『源氏物語』論すらも、この物語の本質に触れてはいない。一方で、中世文学に関しては、芸術と人間性についての鋭い考察の成果が目白押しである。

むしろ、芥川龍之介の知友の中の例外である谷崎潤一郎など、『源氏物語』を原文で読める文学者の系譜が、それこそ細々と続いていた。彼らは理論家ではなかった。『源氏物語』の素晴らしさを、一般の読書人に届く言葉で伝えることができなかった。こういう時代に、芥川龍之介は文学者となり、みずから死を選んで、満二十五年の人生を了えることとなった。日本文学が『源氏物語』との「臍の緒」を切ってしまう時期の代表的文学者だったのだ。

芥川龍之介が死んでから、この文章をわたしが書いている二〇〇一年で、早くも七十四年。彼の文学の長所と短所は、同時代の文学風潮との関連だけではなく、千年間の文学伝統の中で正當に評価されるべき時期にさしかかっている。日本語で小説を書く際に、『源氏物語』を原文で読んでおく必要があるという文学状況が、芥川の時代に史上初めて出現した。それが吉と出たのか、凶と出たのかは、これから判断されることになる。

【七月三十日 谷崎潤一郎忌】

『源氏物語』を原文で読めた数少ない一流の小説家だった谷崎潤一郎は、明治十九年七月二十四日に生まれ、昭和四十年七月三十日に亡くなった。生まれた日と没した日が接近しているというのは、かなり珍しい。

わたしは、今でもはっきりと覚えている。小学校の四年生だったわたしが、テレビでNHKニュースを見ていたら、夕方頃の短いニュースだったが、『細雪』や『鍵』、『台所太平記』などで知られる文豪の谷崎潤一郎さんが、なくなりました』とアナウンサーが報じた。「谷崎潤一郎さん」というふうに「さん付け」だったことが、印象的だった。

わたしの高校生時代に、中央公論社の中公文庫から、ノーベル文学賞をもらった川端康成の推薦文付きで、谷崎潤一郎の『源氏物語』の現代語訳が出版されたことがある。大学入試で古文の点数を上げたかったので、早速に何冊も買い込んだ。しかし、一番最初の桐壺巻で、いきなり「おやっ、これは何とも読みにくい文章だ」と、とまどってしまった。そして、二番目の帚木巻は有名な「雨夜の品定め」だから、期待して現代語訳を読み始めたのだが、どうしても帚木巻の最後まで読み通すことができず、谷崎潤一郎訳の『源氏物語』全体をここで放擲してしまっただけだった。「このような文体に最後まで付き合わされたら、いらいらしてしまっただけ頭がおかしくなってしまう」という、生理的な反感さえ感じた。その一方で、谷崎の小説群には波長を合わせて読了し、それなりの感動もしていたのだから、何とも不思議だった。今から考えれば、谷崎潤一郎は「小説の文体」は確立したが、「現代語訳のスタイル」を確立できなかったのではなからうか。

大学に入って、わたしは三好行雄教授の近代文学の講義を聴いた。三好先生の「百年に一度しか出ない文学者は何人もいるが、谷崎潤一郎は千年に一人の文学者だった」という言葉には、思わず腰を抜かした。この「千年に一人の文学者」という言葉は、単なる褒め言葉ではないのかもしれない。我が国の「近代」ある

いは「反近代」の角逐に背を向けて、たった一人で自分だけの世界を探求するという谷崎の姿勢を、時代からの逃避と捉えることもできる。現代社会との接点の少なさが批判される谷崎の『源氏物語』の現代語訳は、現代社会にどのような力を及ぼし得たのだろうか。はなはだ心もとない。しかも、それが大変に読みにくい文体だと来ている。

後年には『源氏物語』の研究者となるわたしが、高校生の頃になぜ谷崎潤一郎の『源氏物語』の現代語訳が読めなかったのか、自分でも長いこと大きな疑問だった。ある日、谷崎潤一郎の短いエッセイを読んで、その謎が解けたように思った。谷崎は、「自分はフェミニストであり、女君たちは大好きだが、光源氏は大嫌いだ」と述べていた。光源氏の色好みや一夫多妻への批判はともかくとして、『源氏物語』を訳した人物が主人公の光源氏に反感を持っていたのでは、読者が光源氏に感情移入できるはずはない。

谷崎潤一郎は、小説家としては、確かに千年に一人出るか出ないかの才能の持ち主だったかもしれない。けれども、千年間も通用する普遍的でオーソドックスな『源氏物語』の読み方を、谷崎はできていなかったのではないか。

芥川龍之介が断言しているように、大正時代の文学者は『源氏物語』を読まないうでも小説が書けるようになった。西洋文学の流入のお陰である。その中で、『源氏物語』の世界に沈潜したほとんど唯一の一流文学者である谷崎潤一郎ですらも、『源氏物語』の読み方を近代風に変えてしまっていたのである。

むしろ、谷崎潤一郎は何度も『源氏物語』を訳し直しており、文体の変貌もさまざまなに試みている。また、第二次世界大戦の戦時中に、軍部の圧迫にくじけずに、『源氏物語』の砦を守り抜いた姿勢には、心から頭が下がる。にも拘らず、わたしは谷崎潤一郎の現代語訳によつては、『源氏物語』の生命力が現代社会に蘇ることはないように思う。

この文章を読んでおられる方々は、わたしの発言がまことに不謹慎であり、不遜であるとお感じだろうか。しかし、わたしにとつて「これはよい」と思えたのは、円地文子の現代語訳だけであり、それすらも半分くらい（玉鬘十帖のあたり）で読むのを止めてしまった。訳文よりもわかりやすい原文があるのに、あえてわかりにくく、読んでいて常にいらいらする訳文に付き合う必要性などない、と判断したからである。

現代社会に対して『源氏物語』という過去の物語が何を教えてくれるのか、なぜ作者の紫式部がこの物語を書いてから千年後に生まれた自分がここまで『源氏

物語』に感動したのか、わたしはじっくりと見つめ直したいと思う。いつの日になるかはわからないが、それが見えて来たときに、『源氏物語』の現代語訳に人を賭けて挑戦してみたい。

何箇所かの読書会で、わたしは十年近く『増註源氏物語湖月抄』を読みつづけている。かなりの巻の講読了えた。少しずつ、『源氏物語』の全体像がわかってきた。わたしは既に四十六歳だが、まだ遅すぎることはなからう。

【七月三十日＝飯尾宗祇忌】

谷崎潤一郎の忌日である七月三十日は、室町時代の代表的な連歌師である宗祇が亡くなった日でもある。西暦に換算すると、一四二一年に生まれて、一五〇二年に没している。京の都を焼き尽くした応仁の乱が起きたのが一四六七年であるから、宗祇はまさに中世社会の激動期を生きたことになる。八十歳を超えても旅をつづけ、最後は富士山を見ようとして、箱根湯本で没した。

宗祇の本名は、飯尾宗祇と言う。この時代の一流の文学者のほとんどが摂政関白などを歴任した大貴族の出身だったのと異なり、宗祇はまったくの平民から出現して最高の文学者となった人物である。奇跡的というよりも、実に感動的である。

宗祇の代表句は、応仁の乱が起きて、諸国放浪を余儀なくされた頃に、信濃国で詠んだという句である。

世に経るもさらに時雨の宿りかな

『新撰菟玖波集』という連歌集に入っている。大意は、「長いこと、つらい人生を生きてきた果てに、冬にわびしいさすらいの旅をして、都を遠く離れた旅の宿りで夜に寂しい時雨の音を聞くような身の上にもなるものであるなあ」というもの。自分の人生の夢と可能性とを諦めようとして諦めきれない嘆きが、この句には籠もっている。

この宗祇の句をほとんどそのまま借用して、江戸時代の俳聖・松尾芭蕉は、

世に経るもさらに宗祇の宿りかな

と詠んだ。『虚栗』という句集に、入っている。松尾芭蕉は、『笈の小文』の冒頭

部分において、西行法師や宗祇こそが我が人生の永遠の憧れであると宣言しているので、よほど宗祇に影響を受けているのだろう。芭蕉の命日は、旧暦の十月十二日であるが、「時雨忌」と呼ばれている。彼の代表作の一つである、

初時雨猿も小蓑をほしげなり

から名付けられたのだが、『猿蓑』の冒頭に据えられたこの俳句が、飯尾宗祇の「世に経るもさらに時雨の宿りかな」を発想と表現の水源としているのは、明らかだろう。

旧暦の七月三十日に亡くなった飯尾宗祇の文学者としての意義を、これから説明したい。宗祇は、『源氏物語』と『伊勢物語』、そして『古今和歌集』という我が国の誇る三大古典文学作品の権威であり、この時代最高の研究者だった。

それでは、宗祇は『源氏物語』という四百年以上前の過去の物語を、応仁の乱の起きた乱世（時代の転換期）にどのように読み、激動する社会にどのように活用しようとしたのだろうか。

宗祇は、『源氏物語』の二番目の巻である帚木巻に関する注釈を残している。男たちが理想の女性について語り合う「雨夜の品定め」の含まれる巻である。わたしが、高校生時代に谷崎潤一郎の現代語訳で読み始めたものの、途中で投げ出してしまった部分に当たる。谷崎は、ひたすら「女性」という神秘的存在への好奇心で訳文をつむいでいて、それがともすれば人生と社会の理想を追求する青年期のわたしに「いらだたしさ」を感じさせたのだと思われる。

宗祇は、「雨夜の品定め」を、女性論とか恋愛論などとは読まなかった。乱れ果てた世の中を生きる宗祇は、この「雨夜の品定め」が理想の政治のあるべき姿を描いたものと解釈した。同時に、正しい政治家の理想像を読み取り、あまつさえ「幽玄の美学」のモデルをもここに発見しようとしている。

宗祇は、帚木巻の注釈の中で、自分の人生観を思い切って『源氏物語』にぶつけている。「大きな望みを抱いた男は、生まれや財産がものを言う厳しい社会の中で生きてゆかねばならず、絶えず挫折感を抱いてしまう。それを、温かい家庭で、妻と一緒に生活することで、解消したがるものである」。

あるいは、こうも言っている。「光源氏や頭中将などの『雨夜の品定め』の聞き手は、将来必ず政治の世界で最高権力者になる逸材である。若い彼らの柔軟な頭に、女性論の見かけをした人間論を聞かせることで、彼らに政治家にとって必

要な『人間を見る目』を養ってほしかったのである」。

また、次のようにも言っている。「『源氏物語』は虚構の作り話かと思うと、いかにも真実味の籠もったリアリティもある。一方、信濃国の中山道の街道沿いにあるという『帚木』は、遠くから見たら確かに存在するが、近づいてみたら消えてしまうと言われている。あるようで無い、無いようであるという帚木は、まさに本当と思えば嘘、嘘と思えば本当である『源氏物語』の本質とよく似ている」。

宗祇の『源氏物語』に関する注釈は、五十四のすべての巻に関しては残っていない。実に残念である。しかし、彼が武士の時代にあつて、それも武士社会の秩序が大きく変動する下克上の戦国時代にあつて、はるかな昔、貴族社会が全盛であつた頃に書かれた『源氏物語』を、「現代社会を生き抜く最高の指針」として読んでいたことに、わたしは感動すら覚える。これは、『源氏物語』を自分の生きる時代にふさわしく読み改めることのできた宗祇の、強いエネルギーのたまものである。

『源氏物語』は、書かれてある文章を書かれてある通りの意味で解釈するだけでも、研究者の一生を必要とする。宗祇は、それに留まらず、現代社会をよりよく生きる手掛かりを『源氏物語』に求めようとした。彼は、何とも強烈な問題意識を持っていた。「叩けよ、さらば開かれん」という諺の通りである。『源氏物語』を読むためには、そして『源氏物語』から何かの教訓を引き出すためには、読む側の積極的な働きかけが必要なのである。

平和な時代に、宗祇のような『源氏物語』の読み方は役に立たないかもしれない。しかし、社会も人間も進むべき方向を見失っている二十一世紀初頭の時代を生きるわたしたちには、飯尾宗祇の『源氏物語』に対する姿勢は参考になるようにも思われる。

宗祇は、「世に経るもさらに時雨の宿りかな」という代表句を残したが、彼自身は冷たい時雨に一方的に降られるだけの受動的な姿勢では一生を終わらなかつた。彼の文学者としての美意識は、何も行動しない敗北主義ではなく、積極的な打開策を求める実践的なものだったと思う。そこが、行動的な文学者である松尾芭蕉に影響を与えた理由ではないか。

過去の文学者の業績に対する評価を、『源氏物語』と強引に関連づけているという危惧をお持ちの読者もあるかもしれない。しかし、『源氏物語』という古典物語を「補助線」として設定することによって、すべての文学者の本質がはっきりと透けて見えてくるのだ。

【八月一日＝八朔】

「八月」という声を聞いて、わたしがまず思い出すのは、「八朔」という言葉である。毎月の一日のことを、「さくじつ」と言う。「朔」は、詩人の萩原朔太郎の「朔」という字を書く。萩原朔太郎は、明治十九年十一月「一日」の誕生である。

ちなみに、「ついたち」という大和言葉は「月立ち」の訛ったもので、「一日」という意味と、「月の上旬」という意味とがある。

昔、農村では、旧暦の八月一日に新しく実った農作物を贈答して、祝い合う風習があった。江戸時代になると、初代將軍だった徳川家康が初めて江戸に入城したのが八月一日だったことから、この日に武士の間でも主君と臣下が贈り物を贈答するようになったと言われる。

また、果物屋の店先でよく目にする「八朔」という柑橘類のフルーツがある。食べるのは春頃なのに、なぜ「八朔」すなわち「八月一日」という名前が付いているのだろうか不思議に思っている読者のために語源を説明しておく、「八月一日頃から、少しずつ実が熟し始めるので」、というのが通説のようだ。

もう一つ、八月一日に関わる話題をしよう。新潟出身で、美術史の学者でもあった歌人に、会津八一がいる。早稲田大学の坪内逍遙の弟子に当たる。奈良の寺の仏たちを「ひらがな」だけで歌った独特の短歌を残した。書道家としては、「秋艸道人＝しゅうそうどうじん」と号した。

この会津八一の「八一」という名前は、彼が八月一日の誕生であることに因んでいる。明治十四年八月一日の生まれで、昭和三十一年に亡くなった。旧制中学の時代には、「八朔郎」というペンネームで俳句を作っていたと言う。

わたしは、これまでに二度、新潟市北部の海岸沿いにある「会津八一記念館」に行ったことがある。厳しい冬の風が吹き付ける海岸地帯には、松の木が低く太く、いかにも風雪と戦うような姿勢で生えていた。文学者は、その生まれた風土と密接な関係があるとわたしは信じているが、新潟の松の木は、いかにも頑固で利かん気で、しぶとくて、自分に対する自信に満ちた新潟の文人たちのシンボルのように感じられた。会津八一が書道家としても一家をなしたことは既に述べたが、その独特の書体も、なぜかあの松の木の節樺立った生え方と似ているように思われる。

【八月＝葉月】

さて、八月のことを、旧暦では「はづき」と言う。古くは、「はつき」と濁らない発音もあった。語源はよくわかっていないが、旧暦の八月は秋の真ん中なので、「木の葉が紅葉して落ちる月」ということで、「葉の月」すなわち「はづき」となったのではないかと言われている。

ところで、『葉月物語絵巻』という絵巻物がある。尾張の徳川家に伝わった絵巻物で、同じ徳川美術館所蔵の国宝『源氏物語絵巻』と絵の雰囲気が大変によく似ている。タイトルは、もともと付いてなかったのだが、最初の書き出しが「八月十日」すなわち「八月十日あまり」となっているので、とりあえずの分類と整理の必要上から『葉月物語絵巻』と名付けられたのである。絵はともなう雰囲気がいまいち、見ていて華麗なのだが、惜しいことに詞書が断片的で、どうにもストーリーがつかめない。

作品の季節感、秋である。「八月十日あまり」、つまり八月中旬に始まったこの絵巻は、やがて「八月二十日あまり」すなわち八月下旬に入っても、人々はまだ扇を手放せずに暑さをしのいでいると語られている。暑さと涼しさの交錯する季節感が、描かれている。

わたしも、国文学研究を始めたばかりの大学院生の頃、『葉月物語絵巻』というネーミングに、抒情性と魅力を感じた。けれども、「何かありそうだけれども、何もわからない」という印象だけを残して、この作品との縁が切れてしまったのが残念である。

『葉月物語絵巻』は、八月中旬に一人の男が、「しもつかた」すなわち京都の「下京」と呼ばれる一角に住む女君を訪れるところから始まる。女は、着ている服を脱ぎ、かなり官能的な姿を男に見せる。そこに、太陽の光が差し込む。

雰囲気としては、八月中旬に京の五条あたりで愛が燃え上がった『源氏物語』の夕顔巻を連想させる。光源氏と夕顔の関係である。そして、女が大胆な下着姿になっているのは、夕顔巻だけでなく、同じ『源氏物語』の浮舟巻における「句宮と浮舟」の濃密な情愛描写を連想させる。要するに、『葉月物語絵巻』は、『源氏物語』の夕顔や浮舟のイメージを持つ女君の物語なのであろう。

図書館には、必ず「日本の絵巻」というシリーズがあるので、読者にはそこで『葉月物語絵巻』を実際に手に取ることを勧めたい。華麗な絵である。

【八月を詠んだ近代の短歌】

八月の季節感に、話題を戻そう。旧暦の「八月＝秋の盛り」と違って、現代の

新暦では、八月は真夏である。そして、下旬になると「晩夏」というイメージがある。わたしは、大学生の頃から短歌に魅力を感じていて、それで文学の研究者になったと言つてよいくらいである。これから、近代や現代の短歌に歌われた新暦の「八月」を中心として、説明を進めてゆこう。

古典文学では、八月は「野分」すなわち台風の吹く季節だったが、現代でも八月は台風がしばしば訪れる。

いつまでかわが胸去らぬ 八月の嵐のごとも来て去りし人

と、佐佐木信綱は歌っている。まるで夏の台風のように突然に現れて、作者の心に波紋を残して突然に去った人だったのだろう。春の嵐でもなく、冬の木枯らしでもなく、「八月の嵐」という比喩が効果的である。

台風一方で、朝晩の風はことのほか爽やかで涼しいものである。与謝野鉄幹は、次のように歌っている。

草の香と馬のほひを打ちまぜて裾野に吹ける八月の風

この歌の情景は東京の八月ではなく、避暑地（富士山の裾野）の八月だが、「八月の風」の雰囲気や、「草の香り」や「馬のほひ」という嗅覚を用いて表現しているのが面白い。

この歌の作者の与謝野鉄幹は、周知のように『みだれ髪』の作者・与謝野晶子の夫である。本名は、与謝野寛と言ふ。「鉄幹」というのは、いかにも金属的なイメージのペンネームだが、梅の苔むした古い幹のことを意味している。彼の作風は決して現代風ではないが、長い時間をかけて接すれば少しずつ柔らかさと優しさがわかってくるだろう。

与謝野鉄幹は、東京の暑い夏を直接に詠んだ歌も残している。ちょっと、不気味な歌ではある。

東京のあつき八月くちなはの鱗のごとく光る八月

東京の八月は、まるで蛇の皮膚がざらざらとぬめりつつ光っているようなものだ、というのだ。わかるような、わからないような、フィードバックである。それ

が、詩人・歌人の感受性なのだろう。

精神を痛めつける八月の病的なまでの暑さを与謝野鉄幹は歌っていたが、吉野秀雄という歌人は、愛する妻が夏の暑さによって次第に病気で肉体が衰弱してゆく悲しみを、歌に詠んでいる。

八月の西日除けむと丸窓に板戸を閉して汝を病ましむ

「病ましむ」の「しむ」は、使役の助動詞。直訳すれば、「妻であるお前を、わたしが病気で苦しめたことだ」という意味になる。自分が妻の病気のために何もしてあげられない、ただ指を銜えて傍観しているだけで、西日を避けるために窓に板戸をさすのが精一杯だ、という無念の気持ちの表現である。同様の感情は、出征した息子の戦死の知らせを受けた父親が、「我が子を死なしめたり」と歌う場合にも籠められている。

この歌の作者の吉野秀雄は、先程紹介した会津八一の弟子である。吉野秀雄の波乱に満ちた人生を暖かいまなざしで小説にしたのが、山口瞳の『小説吉野秀雄先生』である。わたしは、大学一年の時に読んで、感動した記憶がある。なお、吉野秀雄の妻は、敬虔なキリスト教詩人として知られる八木重吉の幼な妻でもあった女性である。吉野秀雄の妻となつて、瀕死の状態で、夫と最後の交合を行った。それを大胆に告白して詠んだ吉野秀雄の短歌は、歌壇に衝撃を与えた。

短歌に見る八月の話をもう少しつづけよう。わたしたちが無意識に感じている季節感を、短歌では巧みに切り取つて言語化しているのが、わかる。

八月は、子どもにとっては夏休みの月であり、大人にとつても、レジャーの月である。伯爵家の跡取り息子に生まれ、京都の祇園で派手に遊んだことで有名な歌人に、吉井勇がいる。

八月となれば夢見る人おほく避暑地たのしくなりにけるかな

いかにも吉井勇らしい、呑気で気楽な歌である。評価できるとすれば、八月に浮き浮きと心が浮かれる人を、「夢見る人」と表現している点だろうか。ちなみに、吉井勇の師匠筋に当たる森鷗外も、自分のことを「夢見る人」というペンネームで歌ったことがある。

吉井勇と同じ金持ちの有閑階級出身者でも、次の歌などは暗い陰りがあって、

わたしは好きである。

八月の空気のなかに一ところが心のまはり暗きかげあり

作者の名前は、片山広子。この女性は、日本銀行の理事を勤めた財界人の妻だった人。「松村みね子」というペンネームを持ち、アイルランドの文学を日本語に翻訳したりした才媛として知られた。短歌は本名の片山広子で作り、翻訳や評論は松村みね子のペンネームで発表している。

彼女は金持ちのママムで、なおかつ類いまれな知性の持ち主で、それに加えて美貌の持ち主と、三拍子揃っていたので、芥川龍之介が大変に崇拜した。芥川龍之介の自伝小説である『或る阿呆の一生』にも、彼女との恋愛関係が出てくる。また、芥川龍之介の葬儀に現れた際の片山広子の雰囲気巧みに小説に写し取ったのが、芥川の愛弟子だった堀辰雄である。堀辰雄の代表作『聖家族』には、細木（＝さいき）夫人という臆つけた女性が登場するが、この「細木夫人」こそ、片山広子その人をモデルとしている。堀辰雄から見れば、「先生である芥川の恋人」を通り越して、聖母マドンナのような憧れの女性だったのだろう。彼女の人生のさまざまな場面を連想するだけで、一編の短編小説が書けそうである。

忘れてならないのが、八月は太平洋戦争が終わった月だということである。多くの歌人が、八月に、愛する人との死別を体験した。窪田空穂も、その一人である。窪田空穂の長男は、早稲田大学教授で中世の和歌文学研究に大きな貢献を残した窪田章一郎だが、その弟である次男の茂二郎は、ソ連に抑留されたまま病死してしまった。父の窪田空穂は、「五七五七……七七」とつづく戦後最長の長歌を作って、その死を深く悼んだ。ここでは、戦争を詠んだ窪田空穂の短歌を引用しておく。

死といふもの胸にいだきて眼に見たるかの八月の空よ忘れず

これは、東京の空襲の光景なのかもしれない。「あの年の八月、人間の死というものの実体を自分は確かにこの目で見た、その時の悲しかった八月の空を自分は永遠に忘れない」という意味だろう。すつと心に沁みる歌である。

鎌倉時代の初期に編纂された『新古今和歌集』を代表する女性歌人だった式子内親王は、「しきし」とも「しよくし」とも発音するが、若い頃に賀茂神社の齋

院だった体験をなつかしく思い起こして歌に詠んでいる。

ほととぎすそのかみ山の旅枕ほの語らひし空ぞ忘れぬ

「昔」という意味の「そのかみ」と、賀茂神社のかたわらにあった「神山」という地名との懸詞である。「空ぞ忘れぬ」とは、あの青春の充実した思い出を、わたしは絶対に忘れない、という意味である。それに対して、窪田空穂が「かの八月の空よ忘れず」と歌ったのは、あまりにも悲惨だからこそ忘れない、という意味である。輝かしい青春も、いたましい晩年も、どちらも人間には忘れてはならないものなのだろう。

さて、軍部に協力して戦意高揚に努めたとして、戦後激しく批判されたのが、斎藤茂吉だった。詩人では、高村光太郎もそうだった。斎藤茂吉は、郷里の山形に隠遁して、あたかも「流人」のような暮らしをする。斎藤茂吉の万感の思いの籠もった歌があり、空虚な八月を詠んでいる。

われつひに心なかりき八月の木立に雨のそそぐを見つ

八月の青々とした木立に、雨が降り注ぐ。その光景を、何もすることがない敗残の老歌人がひたすら眺めつづけている。しかも、その間、何も心に湧き上がる思いはなかった、というのだ。そう言いながら、戦争と個人の運命に関わるたかさんの懺悔と自己弁護が、後悔の念と共に、茂吉の心に渦巻いていたのではなかったらどうか。

少し重苦しくなったので、八月の短歌を紹介する最後に、与謝野晶子がフランスのパリで作った軽やかな歌を挙げておこう。

ふらんすの八月の朝涼しくも靴くくとなる石だたみかな

「靴」が「くく」と鳴るといふ擬音語（オノマトペ）が、実に印象的である。わたしは、まだ日本という国から外に出た経験がない。でも、こういう歌を読むと「いかにパリらしい」と納得してしまうのが、不思議でならない。短歌におけるリアリティとは、一体何なのだろうか。言葉とイメージの力によって、時代を越えて作者と読者の心が一つに結び付く。パリに行った経験のない読者にも、

「パリの雰囲気」をありありと伝えてくれる。時間と空間を自由自在に超える力。これこそが文学の神秘性だ、とわたしは常々思っている。

【八月三日＝吉田健一忌】

八月三日は、吉田健一という文学者の命日である。彼は、明治四十五年、吉田茂の長男として誕生した。そして、昭和五十二年の八月三日に亡くなった。

父・吉田茂の国葬が行われたのが、昭和四十二年。もう三十年以上も前のことだが、その時に喪主を勤めたのが吉田健一だったので、わたしと同じくらいか、あるいはそれ以上の年齢の読者は、「ああ、あの人がか」とテレビで見た記憶を蘇らせることが可能なのではないか。

少し脱線するが、人間の記憶というものは本当にすごいものだと感じた経験がある。それは、妻（放送大学助教授・島内裕子）とわたしとが、吉田健一の年譜の中で空白になっている、ある講演会のことを調査していた時に感じたことである。八王子と高崎を結ぶ八高線というローカル線の沿線に、埼玉県児玉町という場所がある。この児玉町で、昭和二十七年に、吉田健一は講演会を開いているのだが、それが何月何日の開催で、テーマが何に関する話をしたのか、従来のどの年譜にも書いてないのだ。

そこで、昭和二十七年当時に、吉田健一の講演会を実際に聞いた体験のある人々に、尋ねて回ることにした。すると、もう五十年近く前のことだったので、「イギリスのエリザベス・ボウエンという小説家についての講演でした」とか、「やや女性的な話し方をする人でした」とか、「講演会のあとの懇親会の席では、親父（吉田茂）も、ああいうワンマンに見えて、実は苦しんでいるのさ、という率直な打ち明け話が聞かれました」とか、実に具体的な証言が得られたのだ。人間が、多感な青春時代に心に焼き付けたことは、いつまでも色あせることなく、記憶に残っているものなのだろう。

さて、この吉田健一の文学史的な意義は、「文学は作り話である」という立場をはっきりと宣言したことにある。我が国の文学は、平安時代の『竹取物語』や『源氏物語』がその典型なのだが、一貫してフィクションの作り話だった。

ところが、明治時代になると「自然主義」という文学運動が力を持った。「私小説」も全盛となった。この結果、「文学は嘘をついてはならない」とか「小説には真実しか書いてはならない」とかいう、まことにおかしな「常識」が定着してしまっただけだ。

吉田健一は、近代文学の「非常識な常識」に反逆して、「文学はもっと楽しいものだ」と主張した。たとえ荒唐無稽なストーリーであつたとしても、そこに描かれている人間たちが生き生きとした精彩を放つていけば、それが本物の文学ではないか、というのである。『源氏物語』を最高峰とする日本文学の歴史を見渡すならば、確かに、吉田の言う通りだと思う。

吉田健一は、「純文学」と「大衆文学」という区別にも反対している。時代小説だから二流だという思い込みは、絶対に間違っている、逆に、作家の深刻な恋愛のものが書いてあれば、一流の写実小説だという思い込みも間違っている、と吉田は主張している。公平な価値基準である。

自分の話で恐縮だが、わたしは今、『歴史読本』という雑誌に「歴史小説」に関する評論を毎月連載している。『源氏物語』や夏目漱石の研究でこれまで培った文学に対する鑑定眼・鑑識眼を駆使して、一流の文学として位置づけられる「歴史小説」を分析しているのだ。神話や物語やお伽草子の伝統を現代に受け継ぐ「文学の本流」として、歴史小説を見ようとするとわたしにとって、吉田健一の歴史小説に関する評論はまさに勇氣百倍の力強い味方である。

吉田健一には、翻訳書・評論書・小説・エッセイなど、実にさまざまなジャンルの著作がある。それは、すべて「本物の文学はどういうものか」とか「本物の文明とはどういうものか」とかを、テーマとしている。

彼の署名の入った貴重な初版本や、現在では絶版になってしまった彼の珍しい本などを、これまで一冊一冊と古本屋で手に入れてきた。その結果、わたしの書齋に並んでいる本の中で、もっとも価値のあるコレクションはおそらく吉田健一の著作だと思われる。

「本棚を見たら、その人の本質がわかる」と言われる。文学は堅苦しいものではなく、楽しいものだ、という文明論を展開しつつ、おいしいお酒と御馳走を「うまいうまい」と言いながら味わい、文壇では孤立しながら、わかる人にはわかってもらえると信じて独特の文体で不思議な本を書きつづけた吉田健一。その吉田健一の本は、わたしの研究の最終目的が何であるか、今わたしが何をしなければならぬのか、今わたしは何と戦わなければならないのか、書棚の奥から、毎日わたしに語りかけている。

読者も、きっと吉田健一という名前はどこかで聞いたことがあると思う。「あつ、その人、知っている」で済ませず、図書館で彼の著作をひもといてほしい。こういう文学者がいたのだ、こういう変わったスタイルも文学なんだ、という発

見が必ずあることだろう。吉田健一が死んでから既に四半世紀、二十五年近くが経過した。未だに読んで新しい発見のある文学者というのは、そうそういるものではない。昭和五十二年の八月三日に亡くなった吉田健一は、その本物の文学者の一人である。

【旧暦と新暦の季節感】

これから、新暦では暑い盛りのはずの八月を舞台に、旧暦八月の「仲秋の名月」八月十五夜の話をしたのだが、読者の体内の季節感が合わないかもしれない。だが、現代人は旧暦と新暦の二つの暦を巧みに立体化させ、かつ使い分けて楽しんでるように思える。

例えば、六月の最後の日に、「水無月祓え」という行事がある。「夏越（なごし）の祓え」とも言う。旧暦では、六月が夏の終わりで、次の七月からは秋だから、「六月のつごもり」に行われる「水無月祓え」は、夏の間に溜まりに溜まった罪や汚れを奇麗さっぱりと洗い流してしまふ儀式であった。

わたしの勤務している電気通信大学のキャンパスの近くに布田天神という大変に由緒正しい神社があり、そこでも新暦の六月の下旬に、「茅の輪くぐり」のための丸い輪が設置されている。神社によっては、七月に行っている所があるようだが、新暦の六月に実施して何も不思議に思わない季節感覚がわたしには興味深いのである。

最近では、「水無月祓え」は、夏本番を迎えるための準備だと錯覚している人もいるようだ。この新暦と旧暦の入り交じった現代人の生活風習は、不便なようで、実に楽しいのではないだろうか。「もう一つの現実」、あるいは「もう一つの生活時間」が、わたしたちにはあるのだ。

【八月十五日秋の最中】

とういわけで、旧暦の八月十五夜の話をする。

「七月・八月・九月」の三箇月が秋だから、その真ん中は「八月」である。また、ひと月は三十日だから、その真ん中は「十五日」である。よって、「八月」の「十五日」は、秋のど真ん中ということになる。

平安時代の歌人に、源順という人がいる。『源氏物語』以前に書かれた長編である『うつほ物語』の作者ではないかとも言われる大文学者である。その源順には、八月十五夜の「名月」を詠んだ歌がある。

水の面おもてに照る月なみを数ふれば今宵ぞ秋の最中もなかなりける

「月なみ」は、「月の年齢、すなわち月齢」という意味に、水の表面に立つ「さざなみ」の意味を懸詞にしている。「最中もなかもなか」は、真ん中という意味。池の表面にあかあかと照り輝いている月が映っていたので、ふと思いついて月齢を数えたところ、何と今日が八月十五夜、何と秋という季節のど真ん中であったのだなあ、と源順は興じている。この和歌に織り込まれている「秋の最中」という言葉は、何と美しい日本語だろうか。こういう季節感にあふれる言葉こそ、わたしたちの美意識の中核として、いつまでも残したいものである。

秋の真ん中のことを、漢文では「仲秋」と言う。「中秋」とも書く。

【『白氏文集』の月と『源氏物語』の月】

さて、八月十五夜を愛するのは、日本人だけではない。中国の詩人の中で、平安時代に最も好まれたのは白楽天である。白居易とも言う。その白楽天の詩集が『白氏文集』である。もともとは「ハクシブンシユウ」と発音していたのを、いつの間にか「ハクシモンジュウ」と間違つて発音するようになってしまったそうである。でも、わたしが大学の講義などで「ハクシブンシユウ」と発音すれば、「ハクシモンジュウ」が正しいのではないかと質問する（中途半端な知識の）学生が必ずいる。「全くの無知」 ↓ 「とりあえずの知識」 ↓ 「本当の知識」という順序で、人間は進歩してゆく。しかしながら、「ハクシモンジュウ」という中途半端な知識が横行している時代では、「ハクシブンシユウ」は通用しない。仕方なしに、「ハクシモンジュウ」という発音をせざるをえない。

有名な『長恨歌』や『琵琶行』などの詩も、この『白氏文集』に収録されている。この『白氏文集』に、有名な漢詩がある。

三五夜中新月の色、二千里の外故人の心

「三五夜」は、掛け算の「三五、十五」で「十五夜」のこと。その澄み切った名月を見ていると、さまざまのことが脳裏をよぎり、遠く二千里も隔たってしまったなつかしい友人のことまで思い出す、というのである。「故人」は、亡くなった人という意味ではなく、親友・知己のこと。

この白楽天の漢詩に影響を受けて書かれたのが、『源氏物語』の須磨の巻である。そもそも、『源氏物語』は作者の紫式部が月の名所である石山寺に参籠している時に、琵琶湖に映った仲秋の名月を見て、須磨・明石の二つの巻のストーリーを得たという伝説もあって、「名月」と深いゆかりがある。

わたしの個人的な考えでは、紫式部は「高い身分の男性が、罪を得て地方をさすらい、一人寂しく海に映る仲秋の名月を見る」というストーリーを得ただけでなく、光源氏という主人公のイメージまで得たのではないかと思われる。

光源氏は、満月のように「まんまる」の顔をして、満月のように美しく光り輝く。そして、満月が満遍なく地上のすべての地域に光を降り注ぐように、生きることのつらさを嘆いている世の中の女性のすべてと光源氏は関係して、その悩みを救う。なおかつ、満月が次第に欠けてゆき、遂に新月になって消滅してしまうように、光源氏も晩年には悲しい出来事をいくつも体験し、最後には『雲隠巻』で、月が雲に隠れてしまうように、この物語から去ってゆく。光源氏こそ、窮極の月の化身だったと言えよう。

さて、『源氏物語』の須磨巻で、秋の夜、その光源氏が空を渡る雁の悲しげな鳴き声を聞く。彼は失脚して、都を遠く離れた須磨の土地に蟄居している。そのうちに、「今宵は、十五夜なりけり」、ああ今夜は何と、八月の十五夜だったのだなあ、と気づいた。そして、去年の今頃は、宮中で天皇と共に名月の宴に参加してもなのに、と考えると、わけもなく泣けてくるのだった。そして、白楽天の「三五夜中新月の色、二千里の外故人の心」という漢詩を口ずさんで、わずかにわが心を慰めるのだった。

この漢詩を口にした光源氏は、悲しい心を抱いて名月を眺めるといふ体験が、決して自分だけのものではなかったと、心強く感じたのである。白楽天もまた、そうだったのだから。また日を『源氏物語』以前に転ずれば、『竹取物語』のヒロインであるかぐや姫も、月を見ては物思いにふけった人物である。そして、八月十五夜には、月の世界へと戻っていつてしまった。

月は、美しい。だから、名月を見れば、誰しも感動する。けれども、感動があまりにも大きすぎるので、かえって心が千々に乱れてしまうのだ。『百人一首』の大江千里の歌にも、次のようにある。

月みればちぢにもこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど

「ちぢり千」という大きな数字と「一」という小さな数字の対比が、鮮烈である。また、『古今和歌集』の読み人知らずには、

わが心なくさめかねつさらしなや娘捨山に照る月を見て

という歌もある。「なくさめかねつ」とは、「どうやっても自分の心をなくさめることができない」という嘆きの表現。『更級日記』という書名の由来となった歌である。「娘捨正宗」という信濃の銘酒もある。

かつて、人類が初めて月に立った時、テレビの解説者が、おかしなことを言っていた。「クレーターだらけの、殺風景な月の真実の姿が人々にわかってしまうと、かぐや姫のロマンが消えてしまうのではないか」というのである。そんなことは、絶対になかった。科学は科学。文学は文学。現実とは現実。夢は夢であるのだから。

【八月十六日 精霊流し・送り火】

さて、新暦の八月十六日は、現代人が盆をする時期である。わたしは長崎県佐世保市の出身だが、長崎県には「精霊流し」という風習がある。わたしの高校生時代、長崎で活動していた二人組のフォーク・グループである「グレープ」が、『精霊流し』という名曲をヒットさせて、長崎県人としてとてもうれしかったことを思い出す。「グレープ」は、その後解散して、さだまさしがソロとして活躍することになる。

去年のあなたの思い出が、テープレコーダーから流れてきます。

という歌詞が始まる『精霊流し』は、日本文学の一つの伝統（あるいは約束事）を示すものでもあり、わたしは絶好の教材としてしばしば講義で使っている。男である「さだまさし」の声で歌われるこの歌は、「男性の恋人を亡くして、今年の新盆を迎えて、八月十六日に精霊流しをしている若い女性」の立場で歌われていたのだ。

『百人一首』の藤原定家の歌は、

来ぬ人をまつほの浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ

というものであるが、この歌は「男を待つ女」の立場で「男性歌人」が歌ったものだ。すなわち、日本文学は、男性が女性の立場で「わたし」とか「われ」と表現することができたのだ。そんなことは当たり前ではないかと思う読者がいるかもしれないが、近代社会は自然主義全盛であって、「小説家は自分の体験した真実を書くべきで、絶対に嘘を書くべきではない」という変な思い込みが強くなっている。男が女の立場に成り代わって私小説を書いたら、世間の猛反発を受けること必至である。ところが、古典文学は決してそうではなかったのだ。男が女の立場で「われ」と歌って虚構にリアリティを持たせることもできたし、女性歌人が「架空のわれ」を男性の立場で詠むことも可能だった。

去年のあなたの思い出が、テープレコーダーから流れてきます。

という『精霊流し』の歌が女心を歌ったものであることと、作詞者や歌手が男性であることは、まったく矛盾しないのである。

話が脱線したようなので、本筋に戻ろう。現在では、八月十六日に、京都では大文字の送り火が焚かれている。江戸時代までは、むろん旧暦の盂蘭盆、すなわち七月十六日に行われていた。京都東山の如意ヶ岳の中腹に、「大」という字の形をした送り火が燃えさかる。第一画が八十メートルもあり、第二画が百六十九メートル、第三画が百二十メートルの長さだと言われている。燃やされる灯火の数は、全部合わせると七十五個にのぼると言われる。

ノーベル文学賞を受賞した川端康成の代表作の一つが、『古都』である。この小説を執筆するために、川端康成はわざわざ京都で長期間滞在して、季節感を身に染み付かせたと伝えられる。この『古都』が大文字の送り火を大切な舞台背景として用いていることは、映画などで有名である。

江戸時代の文学者である柳亭種彦は、如意ヶ岳の「大文字」の漢字の勢いは、弘法大師の筆になるものに違いないと推測している。柳亭種彦は、薪が積んである所を見たり、火がいつまでも消えないように手伝ったりしたというのだが、松明はまるで「護摩壇」のように規則正しく積み上げられていたと報告している。

「大」という文字の部分には、山腹にあるのだけれども、弘法大師の秘術によって、草や木が一切生えないようになっていて、大文字の火を燃やしても、草

木に棲息している虫たちを殺生する心配もない、とも述べている。冬に雪が降ると、それはそれは見事な「雪の大文字」が見られるとも絶賛している。病に苦しむ人たちは、この大文字の火を拝んで祈りをすれば、弘法大師の力でただちに平癒すること必定であるとも、柳亭種彦は書いている。

「大」という漢字は、画数は全部で三画からなるが、三本の線が一つになっている部分があり、そこを「カナワ」と言う。柳亭種彦は、この「カナワ」の部分こそ、「大文字」の行事の始まりとなった盆の送り火が燃やされた神聖な場所だったのだらうと推測している。「カナワ」とは、「鉄の輪」と書き、現在では「五徳」と言った方がわかりやすいだらう。余談だが、室町時代には後妻に嫉妬した前妻が頭に鉄輪をかぶったところ、それが取れなくなり、生きながら恐ろしい鬼になってしまったという物語「鉄輪」が書かれている。

如意ヶ岳以外でも、銀閣寺山ではちよつと小ぶりの「大」の字が焚かれ、「左大文字」と言われる。松ヶ崎の大黒天山では、「妙法」の二文字が燃える。西賀茂の妙見山では船の形をした「船形」が燃やされるが、これは蒙古襲来を撃退しようとした祈りの名残ではないかとも言われている。

大文字を詠んだ俳句を、いくつか紹介しよう。まず、大谷句仏の、

大文字におくれてもる左大

という俳句がある。如意ヶ岳と銀閣寺山で、時を合わせるようにして点火されるのだらうが、それが時間的に微妙にずれている、という遠くから見た燃え始めの状況を巧みに捉えたものである。

山口誓子は、

燃えさかり筆太となる大文字

という俳句を作っている。点火された「大」の字が最初は細く見えたのに、燃えらうちにだんだん勢いがついて、最盛期には「筆太」の「大」の字が夜空を焦がした、というのだ。そして、「大」の字が消える時が来る。森澄雄は、

送り火の法は消えたり妙も消ゆ

と詠んでいる。何か、華やきのあとの一抹の寂しさを感じさせる句である。「祭りのあと」と言ってもよいかもしれない。

【八月十五日 終戦記念日】

八月十六日から一日、さかのぼる。昭和二十年八月十五日は、日本がポツダム宣言を受諾して、太平洋戦争の終わった日である。俳句では、この日のことを、「八月十五日」「終戦日」「敗戦日」「終戦忌」「敗戦忌」などという季語で表現する。

「なにに忌」とは、その日なくなった人物を悼む俳句用語であるが、「終戦忌」や「敗戦忌」という言葉は、明治日本という国家を擬人化して把握し、その命日という意味なのだろう。

終戦記念日を詠んだ短歌・俳句は多く、現代詩も小説も評論もたくさんある。庶民の一人一人が八月十五日をどう迎えたか、切々と書き記された「白分史」もある。その一つ一つにあまりにも大きな悲しみと怒りが籠もっている。この文章で軽々しく触れることはかえって失礼ではないかとも思われる。

ここでは、わたしの最近の読書体験を書き記したい。司馬遼太郎の長編小説として名高い『竜馬がゆく』を、必要があって最近読み直した。すると、若い頃には気づかなかった大切な点に、いくつか思い至った。

司馬遼太郎は最終巻の「あとがき」の中で、とても大切なことを書いていた。それは、坂本竜馬を始め、長生きすればどんなに国家にとって有益だったか計り知れない無数の志士たちが、喜んでとは言いながら、若い命を無残に散らせてしまったという事実である。司馬遼太郎は、坂本竜馬によって見いだされ、有名な『五箇条の御誓文』の原案を書き、明治政府で高官となった山田良三という人物の「心の中」をのぞき込んでいる。そして、山田良三だけでなく、明治維新の激動期を無事に生き延びて、明治政府の高位高官となった人物たちは、自分よりも有能な志士たちが空しく死去したことに対して、何度も何度も「一種のうしろめたさ」に苦しめられたのではなからうか、と述べている。ここに、わたしはグッと来た。

『竜馬がゆく』の作者である司馬遼太郎自身も、激しかった第二次世界大戦の生き残りである。幸いにも命ながらえ、直木賞作家となり、「司馬史観」と呼ばれる独自の歴史解釈と文化論を完成させ、文化勲章の榮譽にも浴した。司馬遼太郎が『竜馬がゆく』で書いたのは、あるいは書きたかったのは、明治維新の歴史

だけではなく、太平洋戦争で死んでいった無数の「若者たち」への「一種のうしろめたさ」のためではなかったろうか、とわたしは気づいた。

生きていることの喜びを謳歌するだけでなく、自分が生きていられるために犠牲となった人々への感謝を忘れてはならない、と司馬は言いたかったのではないだろうか。戦争という悪の告発で終わらずに、「亡くなった人達へのうしろめたさ」の気持ちを忘れないことが、彼らの魂を鎮める真実の「鎮魂の儀式」なのだという主張でもあろう。

似た例をあげれば、森鷗外の『山椒太夫』には、姉の安寿の命の犠牲によって生きながらえた弟の厨子王の姿が書かれている。厨子王は、一生、姉への「うしろめたさ」の気持ちを忘れないだろう。忘れたくとも、忘れられまい。亡き姉を思い出すための儀式を定期的に行うことで、「うしろめたさ」を発条（ばね）として、不条理に満ちた現世を強く生きる勇氣を持てるようになるのだろう。

ところで、尾花仙朔という現代詩人がいる。宮城県の仙台で活躍している現役の詩人である。「仙」台に住む萩原「朔」太郎の生まれ変わり、という意味のペンネームだろう。萩原朔太郎は、近代詩の斬新な文体を切り開いた表現者だった。その尾花仙朔に、松尾芭蕉の『奥の細道』の俳句を現代詩に書き直したような作品がある。尾花が踏まえた松尾芭蕉の句は、

むざんやなかぶとの下のきりぎりす

である。尾花は、戦さに寄せる気持ちを、次のように表現している。戦死した武士が成仏できず、そのさまよえる靈魂が、兜の下に閉じ込められたきりぎりすに話しかけるといふ設定である。

きりぎりすよ 無明の世界に

幽閉されてひさしい きりぎりすよ

眉目すずしい貴人の面立ちしたそなたをわたしは いまあはれと思ふ

それなのに現身をはなれて六道をさまよひながら

わたしはまだ おのれの甲冑姿をみはなせないのだ

それゆゑ蒼蒼めた冥界の使者のやうに そなたは呪縛からのがれられずに
髑髏と化したわたしの眼窩にすがりついて鳴いてゐる

ああ 涼々しくもやさしい面輪のきりぎりすよ

戦はもう とうに終つたといふのに

さうしてひとしれず命果てるそなたをわたしはいとほしく思ふ

だが いまのわたしにはそなたにあたへるべき肉がない

ひとときの飢えをしのぐ甘露がないのだ

——ひとを殺めたか 殺めなかつたか

いまはもう それさへ記憶もおぼろな仇野に

ただ 甲冑をつたふ硝煙ばかりがまだ地に漂ひ臭つてゐる

松尾芭蕉の「むざんやなかぶとの下のきりぎりす」という俳句は、源平騒乱の際に、白髪を黒く染めて戦つて討ち死にした平家の侍大将・斎藤実盛のことを詠んでいる。わたしは、金沢周辺の文学遺跡を巡つた時に、この時の実盛の兜が奉納してある神社を、小松市に訪ねたことがある。

この俳句を現代詩に書き換えた尾花仙朔は、太平洋戦争の際に南の果ての島々で戦死した兵士たちのことを、脳裏に思い浮かべていたのではないだろうか。尾花の詩の表現の背後には、「うしろめたさ」と「心の痛み」の感覚とが漂っている。この「いたみ」の誠実で痛切な感情は、読者の心に惻々々と伝わってくる。

尾花仙朔の全詩集が出版された際に、縁あって、わたくし島内景二が「解説文」を書いた。その時、彼の履歴書を見せてもらったのだが、何と彼は戦争に従軍していなかったのである。「自分の戦争体験をありのままに、あるいは文芸的に昇華させて詠んだのだろう」というわたしの思い込みは、無残に打ち砕かれた。そして、尾花の子ども心に焼きついた第二次大戦中の心の痛みの感覚が、戦後も持つて、このような優れた詩を書かせたことにはなほだ驚いた。

このことは、戦争体験のまったくない若い世代にも、戦争に対する「いたみ」の感覚を伝えることが可能だという希望を抱かせる。ただし、そのためには語る側と語られる側の両方に柔軟な「感受性」が必要だと思われる。その感受性を培うものこそが「文学」なのだ、とわたしは信じる。

文学は、ものを感じる力であり、ものを感じる力である。それが、奇跡のようにして、ものを作る力へと転化する。人間も、文明も、社会も、想像力と創造力によって不断に作られてゆくのだ。そのような「文学」への信頼感を、どんなに科学文明が進歩しても、どんなに経済が発展しようが不景気になるうが、捨ててはいけないのではないか。

【八月二十日＝藤原定家忌】

奇しくも同じ旧暦の八月二十日に、中世の歌聖・藤原定家と、近世の大文人・細川幽齋が亡くなっている。この二人の大文学者が同じ命日だということは、松永貞徳の『戴恩記』という本の中にも書かれている。王朝から中世への転換期を生きた藤原定家、中世から近世への転換期を生きた細川幽齋。命日を同じくする彼らの文学的業績を振り返ることは、空前の転換期にあつて進むべき道を探しあぐねている現代の文学者たちに、多大のヒントを与えてくれることになるのではないか。

まず、藤原定家の方から説明しよう。藤原定家は、西暦に換算すると、一一六二年に生まれて、一二四一年の八月二十日に亡くなった。藤原俊成を父とする和歌の名門に生まれ、歌人としても古典研究者としても超一流の活躍をした。この和歌の家柄を「御子左家＝みこひだりけ」と呼ぶ。

藤原定家の息子は、藤原為家と言う。その為家の子どもの世代、つまり定家の孫の世代で、御子左家は、二条家・京極家・冷泉家の三つに分裂した。このうちの二条家は、定家の嫡流としての格式を誇つたが、断絶した。『徒然草』の兼好法師なども、二条家の門弟である。京極家も断絶したが、『玉葉和歌集』『風雅和歌集』という異彩を放つ二つの勅撰集をまとめ、近代の折口信夫（釈迢空）に絶賛されることとなった。冷泉家だけは、現在もつづいており、貴重な古典の継承者として、広く知られている。なお、冷泉家の初代・為相は、為家が、『十六夜日記』の作者として知られる阿仏尼との間に作つた子どもである。為家と阿仏尼とは、親子ほども年の離れた夫婦だったが、大恋愛の末に結ばれた。阿仏尼の和歌は大変に情熱的で、官能的な恋愛小説を読み慣れた現代人が読んでも、顔が赤くなってしまう。

さて、藤原定家である。「さだいえ」が正しい読み方なのだろうが、尊敬の意味を込めて音読みして「ていか」と呼ぶのが普通である。彼が生きた時代は、最初は「源氏と平家」の武士同士の権力闘争の時代であり、やがて後鳥羽院（朝廷）と鎌倉幕府（武士）との戦いが始まった。藤原定家は、結果としては鎌倉幕府の三代將軍の源実朝を和歌の弟子としたので、鎌倉幕府側の立場に立つた政治姿勢を取つたと言える。その結果として、世俗的にも幸福な晩年を送つた。定家と並び称される『新古今和歌集』の大歌人・藤原家隆が隠岐島に流された後鳥羽院にずっと義理立てをして不遇だったのと、好対照である。

藤原定家の日記として有名な『明月記』には、文学は政治闘争とは無関係だと

いう、大変に感動的な一文がある。

紅旗征伐、吾が事に非ず。

源氏の赤旗が、平家の白旗を都から追い落とし、やがて壇ノ浦で全滅させるといふ政治の激動が、「紅旗征伐」といふ言葉の意味である。この歴史的な大転換を目撃した藤原定家は、「そんなことは、白分や文学にとってはいかほどの意味も持たない」と言つてのけたのだ。この宣言は、例えば、近代の文学者・芥川龍之介の『或る阿呆の一生』の冒頭部分とも似ている。若い頃の芥川龍之介は、本屋で高い梯子に乗つて、洋書を探していた。さまざまの人が本屋の中を歩き回っている。それらの人々を高めから見下ろしながら、芥川は、「人生は一行のポオドレルにも如かない」と吐き捨てたのだ。

人間の長い一生というものは、フランス象徴主義の詩人であるボードレルのたった一行の詩の文章にも及ばない、といふのである。このような立場を、「芸術至上主義」と言う。芥川は、芸術のために自分の娘を焼け死なせた画家の恐ろしいまでの執念を、『地獄変』という小説の中で書いてもいる。

個人的な思い出話で恐縮だが、わたしは最初、大学の法学部に入學して、三年の間、法律の勉強をした。その結果、どうしても法律や政治が自分の体質には向かないと判断した。大学で学ぶ無味乾燥の法学や政治学が、生きた人間の心の奥深い領域にはとうてい到達できないといふ、もどかしさを感じて苦しんでいたのである。

そういう時期に、文芸雑誌の『新潮』に、『紅旗』というタイトルの小説が発表されているのを見つけた。本当のことを言えば、当時好きだった立原正秋の自伝小説である『幼年時代』『少年時代』を読みたくて購入したのだが、その雑誌にたまたま野口武彦の小説『紅旗』が掲載されていたというわけである。『紅旗』は、もちろん、藤原定家の『明月記』に書かれている。

紅旗征伐、吾が事に非ず。

から名付けられていた。野口武彦の小説は、藤原定家の時代の争乱と現代の大学紛争とを重ね合わせつつ、文学と政治との関わりあいを探求するといふ内容だった。読後感は苦くて、必ずしも快いものではなかったが、現代社会を生きる若者

たちの挫折の苦さと希望とを見事に表現していた。単行本として出版されたときには、『旗は紅に燃えて』へとタイトルが一変されていたと記憶するが、雑誌でしか読んでいないのでどこまで推敲がなされたかはわからない。

法学部から文学部へと方向を一変したいと決心しつつあるわたしに、文学部へと「飛び込む勇氣」を与えてくれたのが、藤原定家の、「紅旗征伐、吾が事に非ず」といふ言葉だったのである。

これには、伏線がある。大学に入學した年である昭和四十九年に、大学の生協書籍部で、わたしは一冊の本と出会った。現代歌人・塚本邦雄の『定家百首』という本だった。『拾遺愚草』という家集に収められている藤原定家の膨大な和歌から秀歌を百首選び、その和歌を現代詩に翻案し、なおかつそれに評釈を加えて鑑賞する、というスタイルの本だった。この本に、わたしは、文字通りハマってしまった。この本と出会わなければ、そのまま法学部を卒業していたと思う。

塚本邦雄の『定家百首』から、そのエッセンスを御紹介しておきたい。藤原定家の代表作とされるのは、『三夕の歌』の一つ、

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

である。この和歌を、塚本邦雄は次のように翻案して現代詩に仕立てていた。

はなやかなものはことごとく消え失せた

この季節のたそがれ

彼方に 漁夫の草屋は傾き

心は非在の境にいざなはれる

美とは 虚無のまたの名であつたらうか

こういう古典解釈に、わたしは初めて出会った。古典研究は、重箱の隅をほじくりかえすことではなく、現代文化を生まれ変わらせる（毒を含んだ）治療薬だといふことが、初めて理解できた。このような藤原定家との出会いがあり、野口武彦の『紅旗』という小説との出会いもあり、気づいてみたらわたしは文学部国文学科の学生になっていた。

そして、結局は『源氏物語』の研究者を志したわけだが、「青表紙本」と呼ばれる『源氏物語』の最も信頼できる本文を確定したのが、何と藤原定家だったの

である。わたしの人生は、よくよく藤原定家と結びついていたものだと、あきれられるばかりである。

わたしは、大学院の博士課程をおえたあと、いきなり電気通信大学に採用された。わたしの人生で、最も幸運な出来事だった。そして、大学の所在地である調布市で、当時は「調布ブククラブ」、現在は「愛とびあ」と言っている読書会の講師を務めることになった。この「源氏物語を読む会」は、もう十年近く続いている。最初は、『源氏物語』のストーリーや人間関係を解説したり、あちこちをつまみ食いのように読んでいたが、やがて桐壺巻から順番に『源氏物語』本文を読み進めることにした。現時点では紅葉賀巻を読んでいる。講読のテキストとしているのは、藤原定家がテキスト・クリティークした「青表紙本」と呼ばれる系統の本文に、鎌倉時代から江戸時代までの主要な注釈書の見解が網羅された『増注源氏物語湖月抄』である。

わたしは現代人が金科玉条のように崇めて読んでいるのは、紫式部が亡くなってからおよそ二百年後に、藤原定家がテキスト・クリティークした『源氏物語』なのである。「河内本」という対立する本文で『源氏物語』を読むと、また違った姿が見えてくる。藤原定家を水先案内人として、『源氏物語』を読むことのあたりがたさを痛感すると同時に、それを相対化する視点もまた必要であろうと思う。藤原定家の遺した和歌は、『拾遺愚草』という家集に収められている。わたしの好きな歌を、引用しておこう。

たまゆらのつゆも涙もとどまらずなき人恋ふる宿の秋風

この歌は、ちょっと読むと、恋人の死を悲しむ歌のようだが、詞書には「定家の母親が亡くなったあと、秋の野分、台風が吹いてきたので」という状況で詠まれたことがわかる。「厳しい運命の象徴である野分に吹き飛ばされて、ほんの少しの間しかこの世に存在できない露のような母親はかない命が、消えてしまった。母を恋い慕うわたしの涙までも、この野分によって吹き飛ばされてしまう。わたしは、かつて母と暮らした幸福な記憶の残るなつかしい家で、亡き母を必死にしのぶだけだ」という意味。

何という美しいレクイエムであろう。なお、藤原定家の母は、藤原俊成の妻でもあったわけだから、夫の俊成も、彼女の死を悲しんだ歌を遺している。

まれに来る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ

これは、「亡くなった妻の墓にたまに来てみると、索々と吹き渡る松風が悲しく耳に響いてくる。この悲しげな松風の音を、妻はお墓の中で毎日毎晩聞いていたのだろうか。何とあわれなことか」という意味である。

定家の歌も俊成の歌も、どちらも心に沁みるものがある。定家の歌からは、『源氏物語』の桐壺巻で語られていた、野分の吹く日に、桐壺帝が今は亡き桐壺更衣をしのぶ場面を連想する。そして、藤原俊成の歌からは、明治時代の文豪・夏目漱石が、ヘクトーという名前の犬が死んだ時に手向けた俳句、

秋風の聞こえぬ土に埋めてやりぬ

を、連想してしまう。俊成は、寂しい秋風を聞かねばならぬ妻の魂を哀れがり、夏目漱石は、秋風の寂しい音が少しでも聞こえないようにと詠んでいる。一見すると逆の内容を詩歌に詠んでいるようだが、死者への深い同情と哀惜の気持ちは重なっていると思う。

藤原定家が亡くなったのは、仁治二年、西暦一二四一年の八月二十日。晩年には、有名な『小倉百人一首』をまとめたたりしているが、彼の最大の業績は『源氏物語』の本文校訂だったと言えるだろう。定家は、『源氏物語』の注釈研究も行っている。別の見方をするならば、定家の時代から『源氏物語』は「古典」となったのである。もはや同時代文学として楽しく読むことはできなくなり、何が書かれているのかを学問的に追究することから読書行為を開始せねばならなくなった。その中で、どこまで『源氏物語』を「楽しく」読めるのか、わたしも試行錯誤している最中である。

『源氏物語』をどう読むか、現代人の文化水準と文学水準が問われている。そのためには、『源氏物語』の「第二の作者」とも言うべき藤原定家がどのように読んだか、はっきりさせることが必要だという気がする。わたし自身のこれからの研究課題の一つである。

【八月二十日＝細川幽齋忌】

同じ八月二十日だが、こちらは慶長十五年、西暦一六一〇年の八月二十日に、細川幽齋が亡くなっている。細川幽齋は、西暦一五三四年の生まれで、若い頃は

細川藤孝と名告っていた。

室町幕府第十三代將軍の足利義輝に仕え、室町幕府の力を回復させるために力を尽くした。この足利義輝という將軍は、剣の道の達人としても有名である。これほど身分の高い人物が「剣豪」であったというのは驚きで、それを題材にした歴史小説もいくつか書かれている。

細川幽齋は、織田信長と結んで足利幕府を復活させようとしたが、これも挫折。織田信長が明智光秀に本能寺で討ち取られた後は、豊臣秀吉に仕え、その豊臣秀吉の死後に起きた関ヶ原の戦いでは徳川家康の東軍についていた。その功績によって、細川家は肥後熊本藩の大名として万全の地位を築き上げた。

細川幽齋は、官僚（文官）としても武將（武官）としても優れた才能を持っていたが、それ以外にも歌人や研究者として一流だったというのだから、驚くほかにない。細川幽齋は、藤原定家とは違って、「紅旗征伐」の政治的激動の真只中に生きながら、それを「吾が事」として誠実に対処し、和歌や物語の世界にも深く入り込んだ。「平家物語」にも、すぐれた武人でもありすぐれた歌人でもあった平忠度が登場するが、細川幽齋の才能は平忠度をはるかに上回っている。

当時、貴族社会の間では衰退する一方の自分たちの存在根拠を高めるために、『古今和歌集』や『源氏物語』などの王朝文化の知識を独占しようとする動きがあった。『古今和歌集』の秘密の解釈を「一子相伝」で伝えて、秘密にすること、貴族文化の素晴らしさ（朝廷と天皇制の力）を、武士たちに見せつけようとしたのだ。これを、「古今伝授」と言う。

細川幽齋は、『源氏物語』の研究者として名高い三条西実隆の孫である三条西実澄から、この『古今伝授』を受けた。これが世間の注目を浴びたのが、天下分け目の関ヶ原の合戦の直前である。徳川家康の東軍側についていた細川幽齋は、田辺城（今の京都府舞鶴）に五百人にも満たない部下と共に籠城し、一万五千人を越える西軍・石田三成の大軍に包囲された。この時に、細川幽齋がどれだけ日数をかせげるかは、東軍の戦闘準備にも大きな影響を与える。細川幽齋は、「古今伝授」を受けた唯一の生存者である自分が戦死すれば、『古今和歌集』の秘密は永遠に失われると主張し、天皇の勅命によって西軍と一時的な和議を取り結ぶことに成功し、八条宮智仁親王に「古今伝授」をした。この智仁親王は、桂の宮家の初代であり、有名な「桂離宮」の基を作った人物である。この「時間稼ぎ」が、東軍にとっては貴重なポイントとなった。

武人にして、歌人でもあった細川幽齋。彼を小説の主人公にして長編歴史小説

を書いた作家がいる。安部龍太郎と言って、わたしのよき友人である。わたしは彼と知り合ったきっかけが、この「古今伝授」なのだ。出版社から、わたしに安部龍太郎という作家と会ってみたいかと話があり、電気通信大学のわたしの研究室で初めて対面した。「古今伝授」がどんな意味を持っていたのか、訥々と説明するわたしの話を、実によく聞き、理解してくれた。そして、わたしの想像もつかない構想力と表現力とに支えられた小説『関ヶ原連判状』を完成させ、現在は新潮文庫（上下二冊）にもなっている。

友だちだから褒めるのではない。わたしは、安部龍太郎という作家と話しているうちに、「この人は夏目漱石の『明暗』や、ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』を深く読んでおり、人間というものへの捉え方が実に純文学的である」と見抜いた。その人間観を、大衆的な歴史小説というジャンルで世に問おうとしている。しかも、司馬遼太郎なき現在の歴史小説界の中で、安部龍太郎ほど日本の古典文学に造詣が深い作家はいないと判断している。

『関ヶ原連判状』は、とても長い作品だが、読んでいてわたしは二回ほど泣いた。正確には、泣かされた。細川幽齋を描いた異色の歴史小説として、この『関ヶ原連判状』は長く記憶されるに違いない。

安部龍太郎は、つい最近、『信長燃ゆ』という長編小説を出版したばかりでもある。数ある「織田信長モノ」の中で、これほど神話や王朝物語を踏まえた小説はなからう。信長を神話上の人物であるヤマトタケルに喩える発想や、信長と皇太子妃殿下である女性との禁じられた恋を、『源氏物語』の光源氏と藤壺の不義密通に喩える着眼など、実に感動的である。この『信長燃ゆ』や先程の『関ヶ原連判状』を題材にすれば、古典を現代人が受け継ぐとはどういうことか、すなわち現代の「古今伝授」について、考えることが可能になる。

話を、細川幽齋に戻そう。細川幽齋は、『伊勢物語』の優れた注釈書を遺している。『伊勢物語疑抄』と言う。我が国の古典文学の中で、『伊勢物語』ほど自由（＝勝手に）恣意的に読まれてきた物語はなからう。読者の解釈の自由領域がこれほど確保されている不思議な作品は、他にはないのではないか。しかし、細川幽齋は実に「穏当」な解釈をしている。彼の温厚な人柄の反映なのだろう。それでいて、物語についてコメントを述べる「鑑賞」の部分が、深い日本文化への理解に裏打ちされていて、個性的なのだ。『伊勢物語』が書かれてからおおよそ六百年後に、細川幽齋の『伊勢物語疑抄』が書かれたわけだが、この六百年間で初めてなされた重要な指摘が、実にたくさんあるのだ。それは、『源氏物語』

が『伊勢物語』から受けた影響の具体的な指摘などである。

一例を挙げよう。『伊勢物語』十四段は、都から田舎まで東下りをしてきた貴族の男性が、田舎娘と関係するエピソードである。男は、愛してもいない女の家から、朝のまだ暗いうちに逃げ出してしまふ。細川幽齋は、『伊勢物語』のこの場面から、『源氏物語』の末摘花巻が影響を受けたと指摘する。

末摘花は美しくない女性で、かつ氣も利かないので、呆れはてた光源氏は最初に共寝したあと、さつさと暗いうちに末摘花の家をあとにする。確かに、『伊勢物語』十四段と似ている。このような指摘が、随所にあつて精彩を放っている。細川幽齋がいかに深く『源氏物語』を読みこなしていたかを、読者に推測させるものがある。

その細川幽齋に、本格的な『源氏物語』の注釈書が残っていないのが、わたしは残念でならない。幽齋が古今伝授を受けた師匠筋である三条西家の『源氏物語』研究は、『細流抄』という注釈書に結実しているが、それと匹敵し、さらにさまざまな新機軸を打ち出せるだけの才能と教養が、細川幽齋にはあつたと思うのである。

細川幽齋の王朝物語に対する見方で現代人が学ぶべき点は、二つあると思う。一つは、一言で「作り話」と言っても、その作り方に二通りがあると区別している点である。

例えば『伊勢物語』は、在原業平が実際に体験した「事実」を基盤として、それをいかにも「フィクション」であるかのように表現したものである。一方の『源氏物語』は、どこにも存在しなかった光源氏という虚構の人物の人生を基盤として、いかにも現実に昔生きていたかのように表現したものである。幽齋が区別したこの二つの物語の「フィクション」の違いは、近代文学の「虚構」と「真実」の問題にまで持ち越されていると思われる。すなわち、現代の文学研究にも有益な視座が、細川幽齋によって示されているのだ。

また、細川幽齋の王朝物語に対する見方が優れている二つ目の点は、『源氏物語』や『伊勢物語』が表面的には「男と女の恋愛」の物語に終始しているように見えて、その本質は恋愛描写にないところにある。細川幽齋は、たくさんさんの領民を収める立場の大名だった。支配者・為政者として必要な人間関係への洞察力を、『源氏物語』や『伊勢物語』は与えてくれる、というのだ。王朝物語を表面的にしか読まず、「反道徳的だ」とか「非道徳的だ」と悪口を言う文化人は現在でも少なくないが、温厚誠実な常識人だった細川幽齋は、『源氏物語』

は「政道」つまり「まつりごと」の倫理を探索した書物だと述べている。以前に触れた飯尾宗祇の『源氏物語』観とも通じる。

わたしは、それをさらに発展させて、『源氏物語』は人間の心の成熟をめざした「心の教科書」だと捉えたい。細川幽齋の見方には、学ぶべき点が多々ある。鎌倉時代と室町時代は歴史区分としては「中世」と呼ばれているが、その中世の最初に現れた大文学者である藤原定家、中世の終わりに現れた大文学者である細川幽齋の二人は、命日が同じだけでなく、同じような文学的使命を果たしたことがわかってくる。彼らは、過去の王朝の文化と文学とを自分たちの生きている「それぞれの現代社会」に受け継ぎ、再生させるという大きな業績を果たしたのである。

【さらば、夏の光】

「八月」という言葉は、詩の中のどこにも出て来ないのだが、毎年、八月下旬になって、もうすぐ九月だという時期になると、わたしが必ず「さむ詩がある。作者は、フランスの象徴主義の詩人で、ボードレールと言う。詩のタイトルは、「秋の歌」。「悪の花」という詩集に入っている。わたしが「さむ詩」は、誰の翻訳なのか自分でも意識していないのだが、

さらば、さらば、夏の光よ。

という美しい詩句である。さむさむ時の雰囲気、少し表現をいじって、

さらば、さらば、真夏の光。

と口ずさむ場合もある。「さらば青春」という青春歌謡があり、作詞作曲は小椋桂というシンガーソングライターだったが、どことなく「さらば夏の光よ」の本歌取りではないかと思われるフシがある。また、遠藤周作の原作で、郷ひろみが主演した映画に、「さらば、夏の光」というのがあつたが、このタイトルは明らかにボードレールの詩の引用である。

ボードレールの詩は、翻訳者によって微妙に雰囲気が違う。鈴木信太郎の訳では、

やがて、沈まむ、冷やかなる闇のさなかに。
さらばよさらば、東の間の夏の光の列しとよ。

となつてゐる。「やがて、沈まむ」の主語が省略されていて、これでは意味がわかりにくい。永井荷風の『珊瑚集』の訳では、

吾等忽ちに寒さの闇に陥らん、
夢の間なりき、強き光の夏よ、さらば。

となつてゐる。堀口大学の『月下の一群』では、

われ等やがて、冷たき闇の中に沈み入らん、
おお、さらば、左様なら、短きに過ぎし、われ等が夏の、生気ある輝きよ！

となつてゐる。少しづつ翻訳が違つてゐるが、世間では、「さらば、夏の光よ」あるいは「さらば、短き真夏の光」というフレーズで口ずさまれているのではないか。

かけがえのなかつた夏という激しい人生の季節が終わろうとする一瞬の寂しさが、非常に巧みに歌われていると、わたしは思う。

この名文句は、前述したように、ボードレールの「秋の歌」という詩に含まれている。この同じ詩の中には、次のような部分もある。

かかる懶き音に揺られ、何処にか、
いとも忙しく柩の釘を打つ如き、……それは、
昨日と逝きし夏の為め。秋来ぬと云ふ

この怪しき声は宛に、死せる者送り出す鐘と聞かずや。

どこかで、人が亡くなつて柩に釘を打つ音が聞こえる。それは、昨日死んだ「夏」を悼む葬式の出棺の音のようだ、というのだ。このあたりの表現に感動した詩人の立原道造は、「また落葉林で」という詩を作った。「優しき歌」という詩集に入つてゐる。その詩の第一連と第二連とを引用しておこう。引用したばかりのボードレールの詩の「本歌取り」であることがわかつていただけよう

いつの間に もう秋！ 昨日は
夏だつた……おだやかな陽気な

陽ざしが 林のなかに ざわめいてゐる
ひとところ 草の葉のゆれるあたりに

澄んだ空に 大きなひびきが

鳴りわたる 出発のやうに

私は雲を見る 私はとほい山脈を見る

「夏」というエネルギーに満ちた季節が終わる空虚さを、感じさせる。

【三島由紀夫の「真夏の死」】

一度去つてしまつた「夏」という季節も、暦の上では翌年、再び帰ってくる。ところが、人生における「夏」という季節は、一度去つたらなかなか戻らないものである。人生における時間は、ある意味では不可逆性を帯びてゐる。人々は、苦しみつつも充実して生きた「夏」という過ぎ去つた季節を思い出しながら、「秋」という人生の季節へと足を踏み入れてゆかねばならない。

「過ぎ去つた夏」の意味を重く考えさせられる短編小説として、三島由紀夫の「真夏の死」を取り上げたい。短編集『真夏の死』の表題作となつた、作者の自信作である。この短編集には、「サーカス」「翼」「雨のなかの噴水」という忘れがたい佳品も含まれてゐる。「真夏の死」は、三島好みの悲劇的なストーリー展開となつてゐる。「夏」とは何かという、鋭い問いかけの刃を、読者の喉元に突き付ける迫力にあふれてゐる。

三島由紀夫は、この小説の「扉」に、

夏の豪華な真盛の間には、われらはより深く死に動かされる。

ボードレール「人工楽園」

と書き記してゐる。「夏」という人生の頂点において突然兆す「秋」という死の季節の予感を、ボードレールの引用によって示してゐるのだ。ボードレールの『人工楽園』を、わたしは安東次男訳『人工の天国』（人文書院）ボードレール全

集Ⅱ』所収)で読んだ。阿片とアシーシュ(麻薬)が人間の精神に及ぼす快楽と破滅を探究した不思議なエッセイである。「夏の豪華な真盛の間には、われらはより深く死に動かされる」という言葉は、確かに『人工楽園』の中に発見できる。その前後には、

そこから焼けつく夏の日ざしが輝き溢れこんでいた。「空気は乾き、空には一点の雲もなかった。蒼空の深さは完全な無窮の典型のようにみえた。人生と人生の栄光とのこれ以上悲劇的な象徴は、眼に見ることも、思い描くこともできなかった。」

などという印象的な文章がつづいており、三島由紀夫が「真夏の死」という短編を執筆する際に大きなヒントを得たものと推測される。

では、三島由紀夫の『真夏の死』という小説の粗筋を説明しよう。幸福な結婚をして、経済的にも恵まれていて、子どもも既に三人いる、という絵に描いたような幸せな夫婦がいる。夫はバリバリのエリート・サラリーマンで、妻はのんびりした性格である。

ある夏のこと、妻と子どもたちは海水浴に出かける。

夏はたけなわである。烈しい太陽光線にはほとんど憤怒があった。

と作者は、書いている。「憤怒」とは、激しい怒りのこと。夏の太陽は、人間たちが謳歌している平凡な幸福に対して憤りを覚え、罰を与えたのだ。突然の大波が子どもたち二人と、お守り役の叔母(夫の妹)の三人の命を、あつと言う間に奪ってしまった。夫は、「真夏の光」にあふれている事故直後の海水浴場に到着し、悲しみに沈む妻を慰めるばかりだった。

それから、数年。生き残った子ども一人に加えて、新しくもう一人子どもが生まれ、夫婦は表面的な平穏を取り戻した。ところが、妻の心の中に、不思議な変化が発生した。かつて子どもたちの命が悲劇的な事件で奪われた瞬間があまりにも悲しかったために、高揚した時間を彼女は知ってしまった。すると、そのあとの平穏な生活の中で、妻はどうにも心の充実感が感じられなくなってしまったのだ。作者は、

再び人は夏を味わうことができない。

と表現している。妻は、夫と二人の子どもと共に、いまわしい事件のあった海水浴場を訪れようと提案する。夫は、子どもの手を握って海辺に立った。まさに、「たけなわの夏」である。夫は、妻が何かを「待っている表情」をしているのに気づいた。妻の抱いているある期待を背中を感じながら、夫は無言で立ちすくむのだった。ここで、「真夏の死」という短編小説は終わっている。昭和二十七年の発表である。

わたしは昔、ある大学の講義でこの小説の全文を学生諸君と一緒に講読したことがある。わたしが、学生全員に向かって「妻は何を待っていたのだろうか」と質問したところ、十数人の学生からさまざまな解答が帰ってきた。しかし、誰一人として、作者が読者に理解してほしいかった「妻の心の乾き」を読み取った学生はいなかった。この文章を読んでいる読者が大人ならば、もうわかりだろう。妻は、もう一度大波が押し寄せてきて、夫と子どもの命が生命の危機にさらされる「事件」の再来を、痛切に願っているのである。

泣きながら悲しんだ瞬間の「自分は生きている」という確かな実感と手ごたえが、安定した日常生活の中では失われてしまっているのだ。文学は、非日常の世界を描くものである。空前絶後の出来事、前人未踏の偉業や悪行などが、次々に展開する。善であれ悪であれ、この世ならぬ世界を描く物語には、「夏」がふさわしい。夏には、普通は起きない事件が起きる。夏の異常なまでの悲劇的事件に巻き込まれた人間は、その事件のあとでは、長い平穏な人生を幸福と感じるどころか、かえって「退屈」だと感じ、いらだつことになってしまう。

三島由紀夫にとっては、この「真夏の死」という小説を書く七年前に終わった「戦争」という事件が、まさに「死と隣り合わせの異常な夏の季節」だったのである。激しい戦争のさなかで、「自分は何とかして生き延びたい」と心から願った人たちは、その類い希なる悲劇の中で「確かに生きている」という実感が得られていた。戦後の日本社会は、そのあとも周期的に、「日米安保闘争」や「大学紛争」という夏の嵐の季節を繰り返して、国民に「生き甲斐」を提供することができた。

わたしが大学生となった昭和四十九年には、もはや「三無主義」と呼ばれる平和で凡庸な青春しか待ち受けていなかった。青春の情熱を何かにぶつける「夏」や、掛け替えの無いものを「喪失」することで別の何物かを「獲得」する夏を、

これまで一度も体験しなかったわたしが、平成の時代を生きる大学生諸君はなおのこと静かで恵まれた少年時代を送っている。だから、彼らに小説「真夏の死」を読ませて、平和で安定した日常生活に疑問を抱かせることは、土台無理だったのである。この小説は、そのあと二度と教材として使わないことにした。わたしが高校一年生の時に、「乱」を起こそうとして三島由紀夫は割腹自殺した。何と四十五歳の若さだった。三島は、人生の「秋」さらには「冬」を受け入れることができなかつたのだらう。

先程、非日常を描く「文学作品」は夏の季節に喩えられると言った。しかし、「研究」あるいは「批評」という作業は、決して「夏の真只中」の精神状況はなしえないことだと思ふ。厳しい「冬」の、絶対零度の澄み切った理性と知性で、「日常」と「非日常」のかかりあいを冷静に見極めねばならないと思うのである。

小説の中には、悪や反道徳的な内容に満ちあふれているものがある。『源氏物語』にも三角関係と不義密通しか書いてないし、夏目漱石の小説にも三角関係のもつれと近代人のエゴイズムしか書いてはない。非日常の世界での人間の心の醜さを見つめたこれらの作品の中から、どうすれば読者は日常世界を正しく生きる指針を得られるのか。それこそが、文学研究の使命であり、文学評論家の役割ではないだらうか。

紫式部は、あの長い『源氏物語』を書き終えたあとも、十年近くは生存していたと推測されている。『源氏物語』の執筆の最中には、紫式部は「夏」の季節にも似た異常なまでの精神の高ぶりを感じていたことだらう。しかし、宇治十帖の浮舟の人生を書くことで、「夏」の季節に別れを告げ、「文学の季節」にも別れを告げた。そのあとは、文学も必要とせず、『源氏物語』すらも必要とせず、あるがままの平凡な日常生活を淡々と生きていたのだと思われる。

夢浮橋巻の最後で、「さらば浮舟」「さらば源氏物語」と言うことのできた紫式部は、「夏」の極限にあつて、突然に無限の「自由」を感じたのだらう。ここで、ボードレールの「さらば、さらば、夏の光よ」の詩句に話を戻したい。わたしたちは夏の光の輝きの無窮の魅力を知つたうえで、夏にこだわらずに生きてゆくだけの「強い精神力」を持つべきだと思う。八月下旬になると、「もう一度、夏が帰ってこないかな」と、誰しも憧れるものだ。しかし、秋は必ず来てしまうし、冬も来る。その運命を納得し、受け入れることが大切なのだらう。

【八月二十八日 大伴家持忌】

爽やかな夏の話題をせずに、大袈裟な文学論になつてしまった。わたしには、まだ「夏」に対する憧れが心の底に残っているのだらう。

気を取り直して、次の話題に移らう。大伴家持という歌人が亡くなったのが、旧暦八月二十八日である。時に延暦四年、西暦では七八五年である。今から、千二百年以上も前のことになる。

大伴家持は、『万葉集』の編纂に深く携わつたことでも知られている。『万葉集』の最後は、大伴家持の歌なのである。

あらたしき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事

「真つ白い雪が、元日早々から降りしきつていいる。雪が降り積もるように、我が門によいことがたくさん起きてほしい」という意味。大伴一族は、由緒ある武門の家柄である。信時潔の作曲で戦前に広く歌われ、「君が代」に継ぐ「第二の国歌」とまで言われた「海行かば」は、大伴一族に伝わる伝承歌を基にしている。また、天武天皇に従つて戦い、古代社会最大の内乱と言われる「壬申の乱」で活躍した大伴御行は、平安時代の『竹取物語』でかぐや姫にプロポーズして失敗する「大伴の大納言」のモデルとなっている。

大伴一族の命運は、次第に衰えてゆき、大伴家持の死後には、「大」の字を削られて「伴」という名字になった。そして、有名な『伴大納言絵巻』（『伴大納言絵詞』とも言う）の世界となり、伴善男は謀反人として処罰されてしまう。衰えゆく一族の未来を予感した、感受性豊かな歌人が、大伴家持である。

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ
春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげにうぐひす鳴くも

官能的でなまめかしいと同時に、憂鬱で悲しげである。どことなく、近代人の憂いをなまめかしく歌つた北原白秋の世界と似ている。千二百年以上前の人物の歌とは、思えないみずみずしさに満ちている。

わたしは、歴史小説の評論にも手を染めているのだが、大伴家持を主人公にした有名な歴史小説に、高木卓の『歌と門の盾』がある。文豪として知られる幸田露伴の妹に、幸子がいて、我が国における女性バイオリニストの先駆者である。

その幸子の子どもが、高木卓である。本職は、ドイツ文学を教える大学教授だった。大伴家持の人生を描いた『歌と門の盾』は、昭和十五年に芥川賞に内定したが、作者が受賞を辞退したというので、これまた有名になった。学者と小説家の両立が不可能な時代に、高木卓は学者の道を選んだのである。

この『歌と門の盾』という小説を、わたしは高校生の頃から読みたかったが、住んでいる地方都市では手に入らなかった。大学に入ってすぐに神田の古本屋で買いためた。サルトルがノーベル文学賞を辞退したのと、同じような神秘性を感じていたのだ。期待が大きかったためか、一読して全く感心できなかったのが、今から反省すれば大変に生意気なことだった。大伴家持の心がまったく感じられなかった。

高木卓への幻滅とちよほど同じ頃、わたしの文学史に対する認識が大きな転換点を迎えていた。大学一年生の時である。

わたしは、高校時代の文学史で、「万葉集は、現実的で力強く、ますらおぶり」と言うのだと教わった。それに対して、「古今和歌集は、言語遊戯的で、弱々しく、たおやめぶり」であると習った。さらには、「新古今和歌集は、芸術的だが現実逃避の退廃的な幻想文学」であると、覚えさせられた。

この「万葉集」を高く評価し、「古今和歌集」を一段劣ったものとし、「新古今和歌集」を更に低くみなす文学史は、明治時代に正岡子規が打ち立てたものである。正岡子規は、「古今和歌集の代表的歌人である紀貫之などは、下手な歌詠みではない」という意味の過激な発言をしている。正岡子規の短詩型文学の革新が俳句で大成を収めながら、短歌の世界では賛否両論だったのは、『古今和歌集』への批判が、それほど射つていなかったからだろう。

けれども、学校教育の現場では、既に正岡子規の文学史観が「多数説」となっていたのである。それに影響を受けて、わたしも『万葉集』を代表する柿本人麻呂の長歌を、何十首も必死に暗記しては、「これが日本最高の詩歌なのだ」と感動にふけていた。

大学生になって、わたしは塚本邦雄という前衛歌人の著書を何冊も読むようになった。結果的には、数百冊を読んだ。『塚本邦雄全集』が刊行される時には、編集委員まで仰せつかった。その出会いの経緯については、以前「藤原定家」の話題をした時に盛り込んだ。法学部学生として、自分の進路に迷っていた時に、「写実主義」が文学のすべてではなく、また最もすぐれたものでもない、という塚本邦雄の主張には心から驚かされた。

塚本は、世間の（および学校教育の）一般常識とは違って、『万葉集』よりは『古今和歌集』、『古今和歌集』よりも『新古今和歌集』を、良しとしていたのである。その『新古今和歌集』の中でも、人工的な作風の藤原定家を良しとし、自然派の西行を低く評価していた。こんな乱暴な見方が許されるのか、と最初は眉に唾をつけて読んでいたうちに、『万葉集』が実際以上に高く評価されすぎているのではないかと、思うようになったから不思議である。

いつだったかは思い出せないが、中学生の頃に教わった国語の先生が、わたしが日本文学に関心を持っていることを知って、『源氏物語』は反道徳的で墮落している。立派な人間が研究すべき作品ではない。研究するのならば、万葉集か西行をやりなさい」とまで、わたしに勧めてくれたことがある。しかし、わたしはもっと現実的な仕事をしたかったので、法学部を選んだ。そのようなわたしが法学部に行き詰まって文学部を選んだ時に、『万葉集』を最高とする文学観から解放されたのは、必然だったのだろう。

国文学者になることを選択してから、二十五年。いまだに、わたしにとって『万葉集』は苦手科目である。正確には、興味と関心が向かわない空白地帯を形成している。その素晴らしさをどう認め、また高く評価されすぎている部分についてはどう軌道修正するか、まったくわかっていない。『万葉集』から『源氏物語』へ、という文学史の道筋が見つけられなくて困惑しているところである。

ただ、最近になって、とても参考になる本が出版された。品田悦一という若い万葉学者がいて、彼が『万葉集の発明』という本を書いたのだ。明治時代にどのようなプロセスで国民歌集としての『万葉集』のイメージが作られ、日本人の心のよりどころとして増幅して行ったかを、つぶさに解明した力作である。『古今和歌集』をけなして『万葉集』を絶賛した正岡子規が、『万葉集』を国民文学とする官民一体となったナショナリズムの一翼を担った、あるいは担わされたということが、よく理解できた。

この本は、一般読書界ではさほど話題にならず、残念なことだった。『万葉集』を無条件で崇拜（信仰）している万葉ファンは現在でも多く、ある意味で宗教的な信仰にもなっており、彼らの夢や憧れを幻滅させる書物とみなされたからかもしれない。でも、本当の『万葉集』ファンであるならば、是非ともこの本を読んではほしい。これを読んで、なおかつ『万葉集』は素晴らしいのだ、という点に気づく人こそが、『万葉集』の本当の文学的価値を発見できる人だろうし、この『万葉集』の編纂に関わった大伴家持の千二百年前の「祈り」を理解できる人で

あろう。

常識を疑い、真実の素顔に触れる喜び。それは、『万葉集』だけでなく、『源氏物語』もそうだと思う。『平家物語』も『奥の細道』も同じことである。手垢の付いた他人の見方に従うのでなく、自分の目と心で作品の生命に触れたいものである。

【旧暦九月＝長月】

旧暦では、九月のことを「長月＝ながつき」と言った。「ながつき」と濁って読む場合も、ある。「長月」と聞いて、読者がまず思い出すのは、「百人一首」の、

今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

という素性法師の和歌ではないだろうか。素性「法師」というからには僧侶なのだが、女性の立場でこの歌は詠まれている。男性が女性の家を訪問するという「妻問い婚」の存在も、前提にある。

「あなたが、今夜わたしの家に来るよ、と言ったばかりに、わたしは旧暦九月の長い夜を空しく待ちに待ちました。夜明け方になって、やっと来てくれたと思つたのは、あなたではなく、何とお空の有明の月だったことでした」、という意味。たった三十一文字なのに、歌に詠まれている状況や心情を説明すると、とても長くなってしまふ。これは、古典文学を現代語に訳す場合の、最大の問題点である。原文のニュアンスをどこまで詳しく説明してよいか、現代語（口語）に移し替える人の言語感覚が験されている。

長月は、夜の長い季節である。その長い夜の間、ずっと男の訪問を祈りつづけたり、来たのは有明の月だけだったので、「これではわたしがまるで有明の月を待っていたかのようにありませんか」、と素性法師の和歌の中の女は、男に恨んでいるのだ。

このように、「九月」は、夜の長い月としてイメージされている。漢詩でも、同様である。『源氏物語』の中で、光源氏が、

八月九月、正に長き夜。

と口ずさむ場面がある。本当に、「秋の夜長」というわけだ。旧暦の九月は、晩

秋である。次の十月、すなわち神無月は、冬の始まりだから、九月は紅葉が色づく月であり、草花が枯れ果てる月であり、虫の鳴き声が少しずつ弱まってゆく月でもある。

【長月の和歌】

古典の花園の中から、「長月」を詠んだ和歌を鑑賞してみたい。最初の勅撰集である『古今和歌集』には、先程の素性法師の歌があるのみ。二番目の勅撰集である『後撰和歌集』には、四首発見できる。

なお、古典和歌を索引で調べる時には、『国歌大観』という書物を用いる。和歌の研究者の必需品である。「大観」の「観」は、この場合は「書物」という意味である。わたしの学生時代には、四冊セットで三万七千円もした。実家からの仕送りの少ない苦学生だったわたしは、この『国歌大観』を買うために、食費を切り詰めて腹を空かせていたことが忘れられない。

さて、『後撰和歌集』の「長月」の歌を挙げる。

もみぢばの散り来るみれば長月の有明の月の桂なるらし

この歌の作者は、「読み人知らず」である。「長月の、月の美しい夜に、色鮮やかな紅葉がはらはらと散っている。それを見ていると、赤々と照っているお月様から、赤い葉が落ちて来るとしか思えない。そういえば、お月様の中には『桂』の木が生えているという伝説がある。その桂の木の葉が赤く色づいて月を明るくし、そのあとで散ってきて、この地上の落ち葉となったのであろう」、という歌である。長月は、紅葉の季節、そして月の美しい季節としてイメージされていることがわかる。

『後撰和歌集』の別の歌を見てみよう。

宇治山の紅葉を見ずは長月のすぎゆく日をも知らずぞあらまし

懸詞がある。「日」の部分に、「[日]」の「日」、「[月]」の「日」と、「氷の魚」と書く「ひを」が懸詞になっているのだ。鮎の稚魚のことで、透き通って見えることから、「氷魚」と書いて「ひを」と言う。

長月の下旬のこと、宇治を訪れた人がいて、ずっと都にいた人に「秋の贈り物」

を届けてくれた。その贈り物が、赤い紅葉の葉に、透明な氷魚を載せたものだった。そのお礼として詠まれたのが、この「宇治山の」の歌だというのだ。

意味を、確認しておく。「あなたが、宇治から送ってくださった紅葉をわたしが見ることがなかったのなら、長月が終わり、秋という季節が過ぎ去る最後の日々のことを知らなかったでしょう。そして、宇治の名物としての氷魚、鮎の稚魚のことも知らず仕舞いだったことでしょう」。

この歌の「長月」のイメージは、「秋の終わる月」である。それを彩る季節の景物として、「紅葉」と「氷魚」とがある。

ところで、宇治の紅葉の美しさは、『源氏物語』の宇治十帖にもしばしば描かれている。平安時代から、宇治には貴族や皇族たちの別荘が作られていた。そして、「氷魚」も宇治十帖に何度も登場している。「網代の氷魚」というように、「網代」とセットで用いられている。

先程、『後撰和歌集』に「長月」を詠んだ歌は四首あると言った。そのうち、これまでに、二首を説明した。残りの二首は、「菊の花」を詠んでいる。そのうちの一つを紹介しておこう。

菊の花長月ごとに咲きくれば久しき心秋や知るらむ

「菊の花が、毎年長月になったら必ず咲いてくれる。また、菊の花に置いた露を綿に含ませて飲んだ人間は長生きできるとも伝えられている。いつまでも変わらない心というものを、秋という季節は知っているのだろうか」という意味である。菊の花の咲く月という「長月」のイメージについては、九月九日がまさしく「重陽」すなわち「菊の節句」なので、その話題の時に詳しく説明したい。

『後撰和歌集』の次に成立した三番目の勅撰集が、『拾遺和歌集』である。その中から、一首だけ引用しておく。

君が代を長月とだに思はずはいかに別れの悲しからまし

作者は、村上天皇。村上天皇の娘である楽子内親王が長月十五日に、斎宮に任命されて伊勢に下ることになった。都に留まる父親が、都を離れる娘に対して詠んだ切々たる歌である。「君が代」は、普通は「天皇の御代」という意味だが、ここは天皇が自分の娘のことを「君」と言っているのだから、斎宮である楽子

内親王の御代」を指す。

歌は、「あなたの御代が、長月という言葉のように長いものであると信じられないのであれば、さぞかし親子の別れはつらいものだったであろうに」という意味。「長月」は、その言葉の中に「長い」という言葉を含んでいる。その長月に旅立つあなたの、人間としての命も栄えも、長くつづくものであってほしい、という父親の祈りがあふれている。

『源氏物語』の六条御息所

この村上天皇の和歌からの連想だが、「長月」「斎宮」「別れ」という三つの要素がそろっている古典文学として、『源氏物語』の賢木巻がある。光源氏は、七歳年上の貴夫人・六条御息所を愛せなくなり、冷たく見限っていたのだが、捨てられた六条御息所は娘が斎宮に任命されたのをよいシオに、娘と一緒に伊勢国に下ってしまおうと決心した。光源氏は、もはや六条御息所を愛する気持ちはないのだが、せめて「美しい別れ」という思い出を作ろうとする。六条御息所の都からの出発が長月十六日と決まった、そのわずか九日前の「長月七日」、光源氏は六条御息所が精進齋している嵯峨の野の宮を訪れた。晩秋の野の宮を背景として、悲しくも美しい大人の男女の別れが描かれている。

時は流れて、室町時代。作者は未詳ながら、おそらく金春禪竹の作ではないかと言われている謡曲に、『野宮』がある。「長月の七日」の日に、諸国一見の僧が偶然に洛西の野宮神社を通りかかると、一人の女性が神事を営んでいた。彼女こそ、六条御息所の靈魂だったのである。光源氏がわざわざ自分を訪れて、過去のいきさつを心から謝罪してくれたこの「長月七日」という日を、自分の全生涯の最も大切な一日に決め、毎年この日になると、たった一人で光源氏の魂をまつる神事を取り行ってきた、というのである。

明治時代の作家である尾崎紅葉は、『金色夜叉』で、間貫一が生涯忘れられない屈辱の一日として、許婚者のお宮に裏切られた「一月十七日」を設定して、「今月今夜のこの月を」という名文句を口にさせた。現在でも、一月十七日には、熱海市で「尾崎紅葉祭」が開催されているそうである。

謡曲『野宮』の六条御息所にとっては、「長月七日」が永遠に忘れてはならない人生最良の一日だった。彼女は、光源氏を愛したがゆえに苦しみ、生き霊となって光源氏の妻・葵の上に崇つたりした。けれども、自分が確かに光源氏を愛した、自分が確かに光源氏に愛されたという確信のよりどころは、彼女の人生が

「正しかった」ことを証明する「長月七日」の日付だったのだろう。

わたしも、これまで何回か、京都の野宮神社に行ったことがある。普通の観光地となっており、『源氏物語』や『野宮』の世界をしのぶすがもないのが残念だった。六条御息所は、自分の誕生日でもなく、愛する光源氏の命日でもない、「長月七日」を人生の大切な記念日として毎年、祝いつづけてきた。その心を思いやると、しみじみとした感動が湧いてくる。それが、本居宣長の言う「ものあはれ」の感情なのだろう。

先日、わたしの知り合いの女性が、稽古の発表会で、この『野宮』を能舞台で演じたのを見た。女性に年齢は開けないので、彼女の本当の年齢は知らないのだが、舞台の上では三十歳のまだ若さを残す六条御息所に成り代わって、光源氏を思う女心を熱演し、愛する光源氏にも永遠の別れを告げて成仏しようとする「恋の断念」と諦めを、必死に表現していた。わたしは、謡曲『野宮』の世界と、その材料となった『源氏物語』賢木巻の世界とを、頭の中で思い浮かべつつ、「長月七日」という日付の意味を考えていた。

そのうち、夏目漱石の『三四郎』の最終場面で美禰子が「野々宮さん」への恋情を断念して平凡な結婚を決意する気持ちも、漱石が好きだった謡曲『野宮』と関係しないのだろうかという思いつきが脳裏に浮かんだが、それについては別の機会に触れることにしよう。美禰子というヒロインの名前も、『野宮』で引用されている古歌、

琴の音にみねの松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ

から来ているかもしれない、などと空想が広がるばかりである。

【短歌に歌われた長月と九月】

古典和歌から近代短歌へと、目を転じよう。近代短歌にあつては、「長月」はどのように歌われているのだろうか。

その美貌と歌の才能が高く称賛された柳原白蓮に、次の歌がある。

あれどなきこの人の為め喪に籠るけふにふさへる長月の雨

「ある人のために、わたしは喪に籠もっている。今日は、長月の雨がしとしと

と降りしきっているが、この雨の情緒は、喪に服すしめやかな今日の日に何とふさわしいことであろうか」という意味。「あれどなき」という歌い出しの部分の意味がよくわからないので、大意では省略したことをお詫びする。「ふさへる」という言葉は、「ふさわしい」という意味の動詞「ふさふ」の已然形「ふさへ」に、完了の助動詞「り」の連体形「る」が接続したもの。柳原白蓮は、「長月」を「雨」と結び付けて発想している。「秋の長雨」ということだろうか。その長月の雨の雰囲気は、「喪」であることが重要である。

もう一首、柳原白蓮の歌を紹介しておこう。今度は、恋の歌である。

長月のこよひを待つといふ人のたよりを抱けば若がへるおもひ
 どういう事情でこの歌が詠まれたのか、よくわからないが、「長月のこよひ」が「恋」の雰囲気には満ちていることはよく理解できる。

柳原白蓮といえば、伯爵家の令嬢として生まれ（姉は大正天皇の生母）、九州の炭鉱王・伊藤伝右衛門と結婚（再婚）し、「筑紫の女王」と呼ばれたが、社会運動家の宮崎龍介と駆け落ちして、世間を驚かせた数奇な女性である。その柳原白蓮は、晩年に「ことたま」という雑誌を主宰している。わたしは、若い頃から短歌が好きで、古い歌集や歌人の短冊などを少しずつコレクションしているのだが、柳原白蓮の主宰していた雑誌「ことたま」（あるいは「ことだま」と濁って発音するのも可しい）を五、六冊大切に持っている。晩年の柳原白蓮の歌には、もはや若かりし頃の華麗さはなく、枯れた雰囲気が漂っている。

明治天皇の御製にも、長月が詠まれている。

ながつきの在明の月の影さえて紅葉のうへにみゆるはつ霜

「近代短歌」というよりも、「古典和歌」の文体と発想である。アララギの大歌人斎藤茂吉は、明治天皇のことを「歌聖」とまで称賛しているが、歌の調べの自在さを褒めているのだろうか。さて、明治天皇の歌の「長月」は、「紅葉」と「初霜」のイメージである。「ながつきの在明の月」と始まっているのは、おそらく「百人一首」の素性法師の、「長月の有明の月を待ち出でつるかな」に習ったのだろう。

明治天皇の後だった昭憲皇太后には、『昭憲皇太后御集』という歌集がある。

『源氏物語』や『伊勢物語』や『枕草子』などの言葉が巧みに使われていて、読むのが楽しい歌集である。単に古典文学が踏まえられているだけでなく、「船」「親」「心」「夢」「玉」などのキーワードと、天皇の不在（地方巡幸）中の「待つ女」としての心情告白によって、一人の近代女性の存在感がくつきりと象られている。この『昭憲皇太后御集』には、歌だけではなく、エッセイも載っている。その中から、「九月」に関連する「月あかき夜」というエッセイを紹介しておく。

昭憲皇太后がまだ皇后時代の思い出である。旧暦の九月十三夜の月見を楽しみにしていたが、月は雲に隠れて見えなかった。その二日後の「十五夜」には、皇后は風邪を引いてしまって、自分は寝所に横たわって「枕をそばだてて」（『白氏文集』の言葉）月を眺めたところ、とても素晴らしい月だった。女官たちの何人かが、宮殿の庭にある紅葉山まで出掛けて月を眺めたということなので、皇后は「紅葉山で見た月はどうだったの」と質問した。すると、女官たちは口々に「別に大したことはありませんでした」と答えた。自分が寝所での見た名月と、女官たちの報告が食い違っていたので、皇后は不思議に思う。しかし、それは女官たちの皇后への思いやりだったことがわかる。もし、女官たちが「紅葉山の月は綺麗だった」と報告すれば、皇后は風邪を押して庭に出て夜風に当たり、病気をこじらせるかもしれないと考えた女官たちが嘘をついていたのである。そのことを感じ取った昭憲皇太后は、

なかなかに見えむよりもうれしき人のなさけにこそ。

と、このエッセイを結んでいる。「きれいな月を見るよりもかえってうれしいのは、主人であるわたしのことを心配してくれる女官たちの愛情であるなあ」という意味である。

【九月三日＝釈道空忌】

釈道空は、歌人としてのペンネームで、国文学者としては、折口信夫と呼ぶ。「おりくち」なのか「おりぐち」なのか、「しのぶ」なのか「のぶお」なのか、諸説あるようだが、普通には「おりくち・しのぶ」である。

釈道空は、明治二十年に生まれ、昭和二十八年九月三日に亡くなった。柳田國男（普通は「やなぎだ・くにお」と発音するが、正しくは「やなぎだ・くにお」

に最初は師事したが、やがて柳田國男と袂を別ち、独創的な古代文学研究を築き上げた。国学院大学で教壇に立ち、岡野弘彦などの多くの弟子たちを育てた。歌人としても、独特のスタイルの歌を作っている。歌の中に、句読点を持ち込んだのである。一字分の空白も、さかんに用いられている。歌がうねうねとつづくのではなく、ぶつつ、ぶつつと切れている。それが、何とも言えないリズムを作っている。一例を示しておく。

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

学者としての折口信夫が、『源氏物語』に関して鋭い洞察を示したことは、大きい業績と言わねばならない。中でも、「貴種流離譚」という巨大な「話型」を古代文学の基礎として位置づけ、その貴種流離譚という文学的発想が、どのように発生して『源氏物語』の須磨・明石の両巻に流れ込み、どのように『源氏物語』から中世文学へと流れ出していったかを分析した『国文学の発生 序説』は画期的な研究だったと思う。

どことが、素晴らしいのか。わたしは、二つあると考える。一つは、古代から近世まで、奈良時代から江戸時代までの多種多様な文学作品のすべてに共通する文学のパターンとして、普遍的な「話型」すなわち「話の型、話のタイプ」を発見した驚くべき透視力である。折口信夫の目は、レントゲン写真のように文学史の海をのぞき込んでいる。そして、たった一つのストーリー・パターン（鑄型）から、無数の作品（個性的表現）が誕生する「進化論」を打ち立てたのである。

もう一つの折口信夫の着眼点の鋭さは、日本文学の「中心」として『源氏物語』を設定している点である。ここが、『源氏物語』や『伊勢物語』などの文字に書かれた文学作品を軽んじた柳田國男との決定的な違いである。折口信夫の「貴種流離譚」という話型への関心は、実は『源氏物語』の須磨・明石の二つの巻の凝視から始まっている。日本文学の最大の傑作である『源氏物語』には、主人公である光源氏の旅立ちが描かれている。それは、なぜだろうか。ということでは、『源氏物語』以前にさかのぼって研究がなされる。次には、光源氏が身をもって示した貴種流離譚が、次の時代にはどのように受け継がれたのだろうか、ということでは、『源氏物語』以後の時代の精神史の研究がなされる。日本文学史の中心に『源氏物語』を据え、それ以前とそれ以後とを対比させる、という研究方法なのである。

わたしは、東京大学文学部と大学院で、十年間勉強した。人間は、出身大学の研究手法と人脈にある程度は縛られるものである。だから、わたしは「国学院派」の総帥としての折口信夫について、本当はよく理解できていないのかもしれないにも拘わらず、「話型」、ストーリーパターン、テイルタイプを中心に据えて、『源氏物語』の構造を分析するという方法論においては、わたしは折口信夫を受け継ぎ、現代風に組み替え、まったく別物に発展させたという自負がある。わたしの初期の著書である『日本人の旅』『御伽草子の精神史』には、そのような話型研究が展開されているので、御一読いただければ幸いである。

また、わたしは古代文学の結実として『源氏物語』を見るという「発生源論」を採用しない。逆に、『源氏物語』につながつたものがあれば、『源氏物語』から古代文学へと溯ってゆく。

面白いエピソードがある。小林秀雄は、我が国に初めて近代的な意味での文芸批評を打ち立てた評論家として名高い。その小林秀雄が、本居宣長について長編評論を書こうと思いついた時のこと、幸いにも古代文学の第一人者である折口信夫が存命だったので、小林秀雄は折口を訪ねて教えを乞うた。折口はひとしきり本居宣長について話をしたあとで、帰り際的小林に向かつて、「本居宣長の本質は、『源氏物語』ですよ」とささやいたというのだ。

本居宣長は、『古事記伝』を書き著した古代文学研究の大学者である。その本居宣長の本質は、古代の『古事記』や『万葉集』ではなく、王朝文学の『源氏物語』にあった、と折口信夫は透視しているのだ。おそらく本居宣長も、折口信夫も、『源氏物語』という巨大な作品への共感と反発を出発点として研究者となった、そして『源氏物語』を中心に据えた独自の文学史を構築した、ということなのだろう。本居宣長も、折口信夫も、屈指の『源氏物語』の読み手であった。

小林秀雄はそこまで深く『源氏物語』を読めなかったようで、『本居宣長』を初めとする彼の古代文学論は、冗漫な割には中身の薄い結論で終わっている。『無常といふ事』のような中世文学論は、本当にため息が出るほど素晴らしいのであるが。近世や中世の時代精神は、そればかりを研究している国文学者よりも、外国文学で理論武装した文芸評論家に明瞭に見えてくるということがあるのだろう。ただし、古代人の精神世界は、そうではない。「古代の発見」ないし「古代の再発見」という文学の真のルネッサンスは、優れた国文学者（国学者）の出現に待たねばならない。折口信夫は、その数少ない一人であった。『源氏物語』を理解できた数少ない近代人の一人に、折口信夫、ペンネーム・釈道空がいた、と

いうことである。

【九月九日＝重陽】

旧暦の九月九日は、菊の節句である。正しくは、「重陽」と言う。「重陽」の「陽」とは、奇数のこと。奇数のことを「陽数」と言う。「重陽」の「重」は、二つ重なっている、並んでいる、という意味。中国では、偶数よりも奇数が貴ばれていて、一桁の奇数の中で最も大きい「九」が二つ並んだおめでたい日が、「重陽」の節句である。

重陽、すなわち九月九日の日に、奈良を訪ねた松尾芭蕉の句がある。

菊の香や奈良には古きほとけたち

菊の花の優雅で、品のある香りと、奈良の由緒正しい寺の仏像群とが、雰囲気として実に似通っている、という意味である。

「菊の花」は、天皇家の紋章にもなっているが、天皇家と菊の御紋章との関係は、菊の花を好んだ鎌倉時代の後鳥羽院の時代から固定したとも言われている。この「菊の花」について、全世界的な観点から壮大な文化論を組み立てたのが、上居光知という英文学者（比較文学者）である。彼は、日本昔話の「百合若大臣」の骨格は、古代ギリシア文学の『ユリシーズ』から来たのではないか、と言ったことでも知られている。

上居光知は、世界各地で似たような話や、似たようなネーミングの人物がいた場合に、片一方からもう一方へと誰かが「話」（あるいは話の種）を持ち歩き、語り伝えたと考えた。だから、ギリシアから日本まで、誰かが（船乗りか、商人かが）、インド洋かシルクロードを越えて、話を持ってきて手渡したと考えるわけである。むろん、一人の人物が全行程を持ち歩く必要もなく、複数の人間が長い年月をかけて運搬することもある。これを、「伝播論」と言う。最近の大学生は、「でんぱ」と正しく発音できず、「でんぱん」と間違える。

その「伝播論」の土居光知の面目躍如たる学説が、「菊の花」についての論稿である。かつて古代エジプトで、不老不死を表すデザインとして、蓮の花（ロータス）の図像があった。この蓮の花のデザインは、人間すべての憧れる不老不死のシンボルであったので、あつと言う間に世界各地に伝播した。ただし、中国や日本に伝わった時には、蓮の花から、それとよく似た文様の菊の花へと変わって

いた、というのだ。ロマンがあることは事実だが、正しい説かどうかは証明できない。

けれども、土居光知が言うように、中国にあつては「菊の花」は、不老不死のシンボルである。「蓮の花」の変型かどうかは不明だが、「菊の花」のシンボル性については土居の言う通りである。ある国王に、美少年が寵愛されていた。ところが、その少年は慢心して、国王の枕をまたぐという失態を演じた。少年は、この罪で、南陽県という田舎に流された。ところが、何が人間の幸福につながるかわからない。その南陽県を流れる川の上流には、菊の花が咲いていた。菊の花の滴の落ちた水を、下流で飲んだ少年は、永遠の生命を獲得した。そして、少年の姿のまま、いつまでも長生きしたというのだ。『ピーター・パン』みたいな話である。神話学者は、「永遠の少年」という概念に分類している。

この少年の名前は、「菊慈童」と言う。我が国の室町時代には、その名も『菊慈童』という謡曲作品が作られた。小説家の円地文子にも、『菊慈童』という名作がある。円地文子の小説の中では、『なまみこ物語』が最も有名だが、わたしは『菊慈童』や『彩霧』などの「老女物」が好きだ。

【菊の花の文学史】

我が国の古典文学に、話題を戻そう。「菊の水」で有名なものが、『太平記』のエピソードである。『太平記』の巻二に、藤原俊基という人物が鎌倉幕府の転覆を計画して捕えられ、鎌倉へ移送される旅の部分がある。「道行」と言う。『伊勢物語』には在原業平の東下りが語られているし、『平家物語』にも壇ノ浦で捕えられた平家の貴公子の東海道の旅がある。『太平記』は、それらの集大成であり、「道行文」の最高峰と称えられている。

落花の雪に踏みまよふ、交野の春の桜狩り。

で始まる美しい日本語を御記憶の読者も、多いことだろう。

罪を得て東海道を鎌倉へと下る藤原俊基が、ある宿場に差しかけた。俊基が自分を警護している武士に、宿の名前を尋ねると、「菊川」という返事が帰って来た。昔、承久の変で鎌倉幕府に対立し、この菊川の宿で殺害された藤原宗行が残した漢詩を、同じような身の上の藤原俊基は思い出した。宗行の漢詩は、次のようなものだった。

昔、南陽県の菊水。下流を汲んで齢を延ぶ。

今は東海道の菊河。西岸に宿つて命を終ふ。

「昔、南陽県」というのは、先程説明した菊慈童が、菊の花に触れた滴を川の下流で飲んで、長生きしたという伝説のこと。「今は東海道」というのは、末世の日本では、長生きできるはずの「菊川」という場所で、正しい志を持った人間が短い命を終えねばならない、という悲しみや怒りを詠んだものである。この悲しい場面を描いた日本画を、わたしは展覧会で何回か見たことがある。

さて、『太平記』には、悲劇の藤原宗行のエピソードを思い出した、同じ立場の藤原俊基が書き記した和歌も載せている。

いにしへもかかるためしを菊川の同じ流れに身をや沈めん

「昔、承久の変の際には、鎌倉幕府の逆鱗に触れた藤原宗行は、この菊川の宿で空しく殺害されたという。その前例を聞くと、自分も彼と同じように菊川の流にしかばねを沈めることになるのだろうか、悲しく思われてならない」という意味である。「ためしを聞く」の「聞く」と、「菊川」という地名の懸詞となっている。「懸詞」は、決して言語遊戯ではない。複雑な人間の感情を、複雑なま（二面性を帯びさせたまま）言語表現として定着させる手法なのだ。

この歌は、人間の不老不死をもたらずはすの「菊の花」や「菊の水」が、人間の死に場所でもあるという運命の皮肉さを感じさせる。

旧暦の九月九日が「菊の節句」であることから、菊の花のイメージを説明している。『源氏物語』幻巻にも、菊の花が描かれている。愛する妻・紫の上と死別した光源氏は、悲しみの一年を過している。一月から十二月まで、目に触れるもの、耳に聞くものすべてが、紫の上の生前を思い出させるよすがであった。九月九日には、菊の花に女房たちが綿をかぶせて、例年通りに菊の滴を集めている。けれども、紫の上と死別した光源氏にとっては、長生きする薬である菊のしづくが、もはや何の魅力もないものだった。悲しい重陽の光景である。

江戸時代の菊の節句で、思い出されるのが、上田秋成の短編集『雨月物語』に含まれる「菊花の約」である。播磨国の加古川に住む丈部左門という青年と、出雲国の赤穴宗右衛門という青年とが、偶然に出会い、互いに相手の心が立派であ

ることを理解し合って、義兄弟の契りを結んだ。兄となった宗右衛門は、しばしの別れで、生まれ故郷に帰ることになったが、「今度の重陽の節句の日には、何があっても会いにもどってくる」と弟の左門に堅く約束して、去ってゆく。ところが、宗右衛門は、下克上の混乱や、一族の裏切りによって、故郷で幽閉されてしまう。約束は必ず守らねば人間としての信義にもとると決断した宗右衛門は、重陽の日のみずからの命を断って、魂となって千里の距離を駆けて、弟の左門に会いに来たのだった。すべての経緯を知った左門は、出雲国に行き、兄のかたきを討った。

日本文学には珍しい「男同士の友情」の物語である。「源氏物語」の光源氏と頭中将の友情ですら、ここまで高らかに歌い上げられてはいなかった。その友情の花が、九月九日の重陽の節句に美しく開いた、という感動的な物語である。上田秋成の文章は漢字が多くて、決して読みやすいとは言えないが、「秋の夜長」にじっくりと読むのには最適である。「源氏物語」が女性的な文学の代表とすれば、「雨月物語」は男性的な文学の代表と言えるだろう。なお上田秋成には、「源氏物語」の長所と短所を鋭く抉ったエッセイ『秋山記』がある。

【九月七日＝泉鏡花忌】

「九月九日＝重陽」からさかのぼること二日、九月七日は泉鏡花と吉川英治の命日である。泉鏡花は、明治六年に金沢で生まれ、昭和十四年九月七日にじくなくなった。

ところで、わたしは、ここ二十年くらい、「文学散歩」の面白さに取り憑かれていた。そのきっかけとなったのは、吉田健一という文学者への関心の高まりだった。吉田健一は、毎年のように、冬になると金沢に行っていたので、わたしも金沢に足を運ぶようになった。すると、石川近代文学館などにも当然行くことになり、「金沢の生んだ文学者たち」にも興味を持つようになった。泉鏡花も、その一人である。開館したばかりの泉鏡花記念館にも、早速行ってみた。地元の知識人がボランティアで詳しい解説をしてくれて、ありがたかった。

泉鏡花は、わたしの大学生の頃（昭和四十年代後半から五十年代前半）に、ちよつとしたリバイバル・ブームがあった。当時のキーワードは、「幻想」と「怪奇」だった。おどろおどろしい退廃美が、不景気の暗い時代にあって、脚光を浴びた。むろん、『高野聖』などに、泉鏡花の文学の幻想性は感じられる。しかしながら、泉鏡花という文学者のすべてを「幻想」や「怪奇」でくくってしまうこ

とには納得できない。昭和五十年当時、文学青年たちが草木も靡いた「怪奇幻想文学の巨匠」泉鏡花に、わたしは距離を置いて接していた。けれども、金沢に足を運ぶようになって、わたしも精神的な次元での「大人」になったのだろうか、泉鏡花の世界が何となくわかりかけてきた。

泉鏡花の代表作を、ただ残せば、『婦系図』だろう。これほど、大衆に支持された作品はない。泉鏡花を幻想的に捉えたいファンから見れば、この『婦系図』は無視したい作品かもしれない。しかし、『婦系図』に敷設されている人間関係は、『源氏物語』とも通じている。泉鏡花の師匠である尾崎紅葉が、『源氏物語』を原文で読み込んでいたのは、本当のことである。泉鏡花本人も、最初の原稿料はお金ではなく、その博文館から出版されていた『源氏物語』の活字本だったと言われている。『婦系図』は、『源氏物語』にも通じるオーソドックスな男女関係と師弟関係とライバル関係に支えられている。だからこそ、「新派」の舞台であれほど繰り返し上演されているのだろう。

この『婦系図』に、「めの惣」とか「めの字」とか呼ばれている威勢のよい魚屋さんが何度も出てきて、重要な働きをしている。貴重な「脇役」である。この「めの惣」のモデルとなったのは、萩原徳次郎。その子孫は、現在も神楽坂の地で料亭を営んでいる。神楽坂こそは、泉鏡花の師匠であった尾崎紅葉の家があった場所であるし、そこに書生（玄関番）として住み込んだ泉鏡花の青春の思い出が込められた場所である。尾崎紅葉は、泉鏡花が神楽坂の芸者と結ばれた時に大変な見舞で叱り付け、別れさせたが、鏡花よりもたった六歳しか年上ではない。でも、この出来事を用いて『婦系図』が書かれたのだから、名作の材料を作った尾崎紅葉はやはり偉いというべきだろう。

『婦系図』は、紅葉によって強引に愛する女性との仲を引き裂かれてしまった鏡花の「意趣返し」であり、死せる絶対者・紅葉への復讐劇だという見解もあるようだが、実につまらない皮相な解釈である。男女関係を上回る理想的な師弟関係の姿が、ここには見事に書き込まれている。俗に言う「親子は一世、夫婦は二世。そして、師弟は三世」。

金沢や神楽坂を何度か歩くうちに、少しずつ泉鏡花の文学世界の現実性がわかってきた。それは、現実的であると同時に、王朝物語以来の作り話の系譜を取り入れることで、フィクションとしての娯楽性も兼ね備わっているように感じられた。単なる直感だが、金沢の浅野川のほとりの料亭街をもとおりつつ感じたのは、実に東京の神楽坂と似ているということである。神楽坂は、泉鏡花にとって懐か

しい場所だったのではなからうか。

それから、泉鏡花をめぐる「文学散歩」で忘れてはならないのが、『歌行燈』の舞台となった桑名である。桑名は、松尾芭蕉も郷里である伊賀上野への往復の途中、何度か立ち寄って、俳句を残している。江戸時代の東海道は、熱田神宮のあった「宮」という宿場から、この「桑名」の宿までは、陸地ではなくて海路であった。「七里の渡し」と言う。船が苦手だった將軍などは、京都へ上洛の際にこっそり陸地を通っていたようだが、普通の旅人は船に乗り換える。その桑名側の船着き場の近くに、『歌行燈』の中の言い方では「湊屋」がある。本当の名前は、「船津屋」である。桑名名物の焼き蛤を出すことで、有名である。

わたしも桑名の町並みを歩き回り、芭蕉の句碑を捜し求めたり、船着き場の跡地で「一の鳥居」(東海道から伊勢街道への分岐点でもあり、そのお伊勢さんの一の鳥居である)をくぐってみたりして、やっと土地勘ができた。そのうえで当地の名物を食べ、地元で作られている地酒を飲んだら、「地霊」(大地の精霊)と言ったら大袈裟だが、桑名という町の「魂」文化的伝統が理解できたように思えた。そして、泉鏡花の『歌行燈』を読み返すと、文章の行間に深い味わいが発せしてくる。泉鏡花は最初の桑名訪問で、『歌行燈』を書いたと言われるが、泉鏡花も旅人の目で新鮮な捉え方をしたからこそ、いつの時代の読者にも新鮮な描写になったのだろうと、これまた通りすがりの旅人であるわたしは思ったことであつた。

大学で文学を研究していきがたいと思うのは、「文学散歩」をしている最中、自分のこれまでの著書を献呈し、研究目的を告げると、相手の人がわたしを信用してくれて、いろいろな「秘事」を教えてくれることである。そのうちのいくつかは、絶対に活字にはいけないことだが、そうでないものは、かつがつ活字にしてきた。研究と趣味が表裏一体となっているのは、とてもうれしいことである。

【九月七日＝吉川英治忌】

吉川英治は、明治二十五年に神奈川で生まれ、昭和三十七年九月七日に亡くなった。多数の名作を量産したが、代表作は何と言っても『宮本武蔵』。わたしは子どもの頃から、『宮本武蔵』が大好きだった。最近、若者に爆発的な人気を博している漫画・劇画に、井上雄彦の『バガボンド』がある。『バガボンド』というのは、放浪児・さすらい人という意味。昨年の五月下旬に、日本橋のデパート

で、「武蔵からバガボンドへ」と銘打った「吉川英治の回顧展」が開催された。わたしも見に行ってきた。胸が熱くなるのを覚えた。わたしは、専門である『源氏物語』の研究と並んで、歴史小説の評論にも手を染めているが、その最初のきっかけは、吉川英治の『宮本武蔵』との出会いの衝撃だった。ちなみに、その次のきっかけは、隆慶一郎という作家との出会い(わたしの学問上の恩師・秋山虔先生の旧制高校時代の同級生だという)、三番目の出会いは、自分と同じ世代である安部龍太郎という作家との出会いということになる。

『宮本武蔵』という小説の素晴らしさは、「人間の未熟な心が成熟するプロセス」をまったく銜うことなく、堂々と正面から取り上げている点にある。人間の魂が成熟にいたるドラマは、実は、平安時代の『源氏物語』から一貫して受け継がれている文学のオーソドックスなテーマだと考えられる。「とりあえずここまで到達したら、人間の心が成熟したことにしてしよう」などという自己満足を持たずに、どこまでもどこまでも自分の心を磨いてゆく武蔵とお通の姿は、何度読んでも感動的である。永遠の青春の文学と言えよう。

しかも、本位田又八と朱実という、何をやっても駄目な、人生の芽が出ないカップルも、しっかりと描き込まれている。それでいて、「武蔵とお通」という最高のカップルも、「又八と朱実」という最低のカップルも、どちらも同じように素晴らしい、生きる価値のある人生だったと、作者の吉川英治は主張している。これほど、勇気つけられる作品はないだろう。

『源氏物語』という我が国の最高峰に位置する物語文学をまったく読んでいなかった吉川英治が、彼の書生をしていた若者から偶然に教えられた江戸時代の『講談本』をネタにして、『宮本武蔵』という作品の構想を得たと、巷間では伝えられている。ある意味で、奇跡的な事実である。しかし、ある意味では当然の帰結でもある。わたしは、江戸時代の大衆的な「講談」が、決して『源氏物語』と無関係だったとは思わない。日本文学の一番奥深いところに、『源氏物語』の根っこがあり、その根っこに日本文学の大衆文学もつながっている、と考える。だからこそ、『源氏物語』も『宮本武蔵』もすべての現代人の心に強く訴えつづけているのだと思う。

わたしは、かつて『剣と横笛』という『宮本武蔵』に関する評論を出版したことがある。『源氏物語』の大衆性を強調することで、大衆文学の再評価を意図したものであった。先日、インターネットで検索していたら、宮本武蔵の出身地と言われる岡山県の大原町(兵庫県との県境にあるそうである)が宮本武蔵に関する

る著書をコレクションしているという情報が見つかった。うれしいことに、わたしの『剣と横笛』も既にしっかりと収蔵されていた。

「未熟な青年が旅に出て、宝物を獲得して幸福になる」という永遠のテーマを堂々と追求した吉川英治の文学がオーソドックスであることを、何度でもわたしは強調したい。青梅市にある吉川英治記念館に足を運ぶと、彼の偉業がよく理解できる。

ところで、吉川英治は毀誉褒貶の激しい作家である。わたしのように心酔している者もいれば、絶対に認められないと否定する人もいる。特に、吉川英治が批判されるのは、批判者の言葉を借りれば、「時代の潮流に迎合して、戦前には国家主義的な作品を執筆して多数の純粋な若者を求道的愛国者に仕立て上げて戦地に赴かせておきながら、戦後は民主主義的な作品を執筆し、大衆におもねり、へつらい、豹変をしつづけた」という点にあるようだ。

我が国では、大衆文学を純文学よりも一歩も二歩も低く評価する研究者が多かった中で、早稲田大学教授（ドイツ文学）を勤めた中谷博は、チャンバラ小説をドストエフスキー『罪と罰』にも通ずる近代知識人の苦悩の現れと捉えた、画期的な文芸評論家であった。このように自由な物の見方が可能だった中谷博も、吉川英治が大の嫌いで、「人間が変わりつづけることは破廉恥である」と思っていたようだ。その中谷の変わらない精神世界の持続にも感心するが、わたしは「変わりつづけた」側の吉川英治の姿にも文学の本質を見る。

『源氏物語』を、例にとつて説明しよう。光源氏の人生の価値観は、いったい何度変わりつづけたことだろう。そして、作者である紫式部が求める幸福も、何度変わりつづけたことだろう。文学は、書きつづけること、そして読みつづけることによつて、人間の心の在り方を抜本的に変革しうるのだ。それが、『源氏物語』の与えてくれる最大の教訓である。

自分を変える勇氣を持ちつづけた吉川英治を、一方的に批判することはできないのではないか。すべては、松尾芭蕉の言うように、「不易流行」である。変えなくてはならない部分を維持し、変わらなければならない部分は勇氣を持って変えてゆく、その二面性が必要なのでないだろうか。

【九月十日〓向井去来忌】

旧暦の九月十日は、俳人・向井去来の命日である。向井去来は、一六五一年に長崎で生まれ、一七〇四年九月十日に亡くなった。わたしは、長崎県佐世保市の

生まれなので、高校時代に国語の先生から「郷土長崎県の生んだ大文学者」として、向井去来の名前を教えられた記憶がある。

向井去来は、京都の西の嵯峨という土地に別荘を作つて、「落柿舎」、柿の落ちる家と名づけた。ここに、俳諧の師匠である松尾芭蕉を迎えたことでも有名である。松尾芭蕉本人は、先程わたしが書き記した「不易流行」という彼の文学理念をどこにも書いていない。弟子である向井去来が師匠の説として、『去来抄』という書物に書き留めているのだ。

元禄四年、一六九一年、松尾芭蕉が向井去来の落柿舎に滞在した記録が、『嵯峨日記』という紀行文であり、名文として名高い。去来自身の俳句としては、

応々といへど識くや雪の門
柿ぬしや梢はちかき嵐山

などが知られている。「柿ぬしや」の句は、「落柿舎」という彼の別荘の名前の起りともなったもの。去来が、敷地内の柿の木の実を商人に売つて儲けようと計画していたら、売却する直前に嵐が吹いて、木の実が全部落ちてしまったというのである。この間延びたというか、気が抜けたようなホツとしたフィーリングこそが、俳諧の精神なのだろう。

去来の妻の向井可南女も、俳人だった。

罌粟咲くや籬の小袖の虫はらひ

という句を残している。華麗な罌粟の花がはかなく散つてしまうことを、虫に食われてしまいそうにはかなく小さい、ひな人形の小袖に喩えている。実に繊細なものを見方ある。「小袖」のかわいらしさ、「罌粟」の小ささ、よくマッチしている。

【九月十六日〓藤原義孝忌】

九月中旬にも、数多くの文学者たちが亡くなっている。晩秋の九月は、亡き人をしのぶのに、まことにふさわしい季節である。例えば、旧暦の九月十六日を命日としている歌人として、平安時代の藤原義孝がいる。天才少年として高く評価されていたが、西暦九七四年にわずか数え年の二十一歳で夭折した。代表作は、

次の歌である。

秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露（うしかのせかぜ、うしかのしも）

「ただならね」は、「たたならず」（尋常ではないほど素晴らしい）の打消の「ず」が已然形となったもの。「こそ」の係り結びとなっている。

「萩」と「萩」はとても似た漢字だが、萩は草冠に獸偏、萩は草冠に禾偏を書く。萩は痩せた湿地に生える雑草であり、萩は秋を代表する美的な鑑賞に堪える植物である。萩は葉の上を吹き過ぎる風が索々として寂しく、萩は葉の下に置いて露が寂しいというのだ。「萩の上風、萩の下露」は、対句仕立てになっている。春は曙、秋は夕暮れがよい、と言ったのは清少納言の『枕草子』だが、藤原義孝もやはり秋は夕暮れがただならぬ美意識を漂わせていて、心が深く揺すぶられると歌っている。それは、萩に上風が通り過ぎる時間帯であり、萩の下露が下りる時間帯でもあったのである。

百人一首に取られた藤原義孝の歌は、

君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

であった。若くしてこの世を去るべき運命を持って生まれてきた、繊細な感受性の若者の恋歌として、心に迫るものがある。

【九月十三夜】

少し時間がさかのぼるが、旧暦の九月十三夜は、八月十五夜と並ぶ「名月」である。「後の名月」とも言う。

『源氏物語』夕霧の巻に、九月十三夜の月が光をはなやかに射してきた、という文章がある。この箇所に関して、『源氏物語』の注釈書である『岷江入楚』（みんがはにこ）には、「八月十五夜の月は、古来人々から珍重されてきたが、九月十三夜の方は、古代から愛でられてきたわけではない。中国でも九月十三夜を眺める風習はないようだ。それでは、いつから九月十三夜の月が日本人に愛されるようになったのだろうか」という疑問が書き記されている。

江戸時代には、実に数多くの随筆が書かれたが、それらはエッセイというよりは、むしろ歴史的事実の考証に近いものが多い。そこでは、九月十三夜を賞美す

るようになった「起源」、即ち「最初の一回」（＝九月十三夜のアルケオロジー）が、いろいろな書物で考証されている。

その結論では、どうも醍醐天皇の御代からのようである。西暦九一九年に初めて九月十三夜に宮中で月の宴が開かれたことが起源だったようで、醍醐天皇の命令ではなく、当時天皇を退位していた宇多法皇の命令だったという説もある。さらに少し溯って、菅原道真の漢詩からだという説もあるが、少数説である。いずれにしても、十世紀の始め頃には九月十三夜を鑑賞する風習が我が国には確立していたということがわかる。

【樋口一葉『十三夜』の世界】

九月十三夜に関する文学作品として、和歌や俳句も用例に事欠かないが、ここでは明治二十八年に樋口一葉が発表した小説『十三夜』を紹介したい。樋口一葉は、この小説を明治二十八年の九月十七日に書き終わっている。九月十三日にこの小説の構想を得たのかもしれないと考えるのは楽しいことである。紫式部の『源氏物語』は、石山寺に参籠して琵琶湖に映る名月を見ていてインスピレーションが湧き起こったと言われているが、樋口一葉の場合には東京の九月十三夜の月だったのであろうか。

樋口一葉は、明治五年に生まれて明治二十九年の十一月二十三日には早くも亡くなっている。『十三夜』は、亡くなる前の年に書かれた短編小説である。

樋口一葉は、膨大な日記を残していることでも知られる。その日記を通読すると、彼女がどんなに深く『源氏物語』や『伊勢物語』や『枕草子』や『徒然草』を読み込んでいたかがわかって、肅然とさせられる。明治時代は、いわゆる「近代社会」である。近代社会を生きる近代人の心の中の苦しみを、樋口一葉は何と『源氏物語』や『徒然草』の文体とボキャブラリーで表現できたのである。

わたしたちは、「言文一致」ということが近代文学の夜明けだと、学校の文学史の時間に学んだ。近代人が話す通りの日本語で文章を書くことが、小説の理想だという考え方である。一葉亭四迷が、『浮雲』で口語体の言文一致の小説を完成させたのが、明治二十年から二十四年にかけてのことであった。一方、樋口一葉の『十三夜』は、明治二十八年に書かれた。樋口一葉の「文語体小説」は、「言文一致」へ向かうという文学史の流れや、小説の進歩の歴史に逆行しているように感じる読者もあるかもしれない。

けれども、「文学」というものはそう簡単ではないのだということを、わたし

は樋口一葉の作品を味わうことによつて主張したいのだ。『源氏物語』の文体ですらも、近代人の心の闇が表現しうる、いや、『源氏物語』の文学のスタイルを踏襲しなければ近代人の喜怒哀楽が表現できなかった女性作家が明治時代に存在した、という事実の重さをわたしは噛み締めた。『十三夜』には、例えば次のような文章がある。

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえだえに物がなしき上野へ入りてより、まだ一町もやうやうと思ふに、……

ヒロインが夜、人力車に乗つて、上野に差しかかるという場面である。樋口一葉は、「上野」という地名から、「野」すなわち「野原」という歌ことばを連想した。そして、上野という野原の上空に十三夜の月がかかり、秋風が寂しい音を立てて吹き、夏の間は元氣一杯に鳴っていた虫の声が細くなつてきた、という自然描写を施したのである。

わたしは、この樋口一葉の文章を読むと、『源氏物語』の賢木巻の文章を連想してしまふ。光源氏は、六条御息所と美しい別れをするために、九月七日に嵯峨野の野の宮を訪れる。嵐山から松風が吹きおろし、虫の声も枯れ枯れになつた物哀れな「嵯峨野」に、夕月夜が差し込む。そして、一度は愛し合つたはずの光源氏と六条御息所とが、もはや二度と愛し合えないこと、別れを前提としてのみ話し合えることを確認し合う。

『源氏物語』では、うまくいきそうぞで、決してうまくいかない「男と女」の関係を、秋の月と風と虫とお睦立でしている。しかも舞台は、寂しい「秋の野原」である。

樋口一葉の『十三夜』では、「お関」という美女と、録之助という男が出て来る。彼らは上野で再会し、月と風と虫に囲まれて、うまくいかなかった男女の縁をしみじみと噛み締めたが、もはやどうしようもなく、別れるしかなかった。この二人は、幼なじみで、互いに心の中では結婚するなら、あの人だと思ひ合つていた仲である。これは、『伊勢物語』二十三段の「筒井筒」の世界そのままである。樋口一葉は、「筒井筒」の人間関係に立脚して、代表作『たけくらべ』も書いている。ところが、『十三夜』の幼なじみは、結婚できなかった。ある日、お関が隣の家の娘と羽根板を付いて遊んでいると、その白い羽根が偶然に通りかかった人力車に飛び込んでしまった。乗っていたのは、新政府の高級官僚の原田勇

という男だった。

この運命的な事件によつて、お関の美しさに溺れた原田は、貧しいお関の両親を強引にくどき落とし、頼み込んで結婚する。お関は、心の中のほのかな録之助への慕情を口にする勇氣がなく、そのまま原田の妻になった。結婚した後、なぜか原田はお関をうとみはじめ、子どもが出来たのに、彼女を罵倒しつづける。とうとう我慢出来ずに、お関が原田と離婚しようと実家に逃げ戻ってきたのが、九月十三夜だったのである。

羽根板を契機とする原田とお関との偶然の出会い、どことなく『源氏物語』の若菜上巻で書かれている一場面を連想させる。猫のいたずらで、柏木が女三の宮を偶然に見てしまい、恋に落ちてしまう場面だ。ちよつとした偶然の出来事が、それさえなかったならば平穩に生きていられたはずの男と女の運命を一変させるのだ。また、原田のお関への幻滅は、どことなく光源氏が女三の宮を冷たく扱つていたという部分と似ているようにも思う。樋口一葉は、どちらかと言えば『源氏物語』の作者である紫式部よりも、『枕草子』の作者である清少納言に近い文学性と感受性の持ち主だと思われるが、深く『源氏物語』をも読み込んでいたのである。

運命が狂つたのは、お関の幼なじみだった録之助も同じことだった。商売熱心で皆から好かれていた立派な若者は、失恋ゆえに放蕩の味を覚える。親類の勧めで、お関ではない女性と結婚して、子どもも作つたものの、心の奥底に巣食つた飢えと乾きは癒せず、とうとうすべてを捨てて人力車を引く車夫の身の上に転落してしまふ。

九月十三夜の日に、実家に戻つてきて両親に原田との離婚の希望を訴え、父親から強く諫められたお関が、泣く泣く鬼のような原田の家に戻るために人力車に乗る。この人力車を引いていたのが、何と録之助だったのである。谷崎潤一郎の『蘆刈』ではないが、何とも皮肉な再会ではあった。

お関の父親が、娘に向かつて「一時の激情にかられて、離婚を思い立つても、一生後悔するだけだ」と諭す場面がある。ここは、『源氏物語』帚木巻などで女性が夫の愛情の薄さに耐え兼ねて、突然に家出をして「尼」になつても、あと後悔するだけだ、という教訓が書かれていることと対応していると思う。夫の愛情を信じられない女の「安易な出家」を戒める文脈である。樋口一葉は、この「出家」を「離婚」に置き換えて近代小説を紡ぎ出しているのだろう。

女は、愛のない原田の家に戻つてゆく。その一瞬、九月十三夜の明るい月の光

のもとで、かつての相思相愛の男女が巡り会う。しかし、彼らがそれぞれの住むべき場所に向かって別れてゆく場面で、『十三夜』は終わっている。これもどことなくだが、心の中では互いに引かれ合っていた光源氏と空蟬が、結局は別れ別れになり、関屋巻で一瞬の再会を果たすものの、光源氏は石山寺へ、空蟬は都へと別れ去った部分を連想させるものがある。

「似ている」というのは、『源氏物語』を読んだ体験のある読者が、樋口一葉の『十三夜』を読めば、近代小説の奥底に広がっている古典的性格に気づかざるをえない、ということである。

樋口一葉の『たけくらべ』を絶賛して、彼女を文壇に登場させたのは、森鷗外だった。この森鷗外もまた、『源氏物語』の世界を近代小説の中へと取り込もうとして、苦しい戦いを展開していた文学者の一人だった。森鷗外は、樋口一葉の中に「古典的近代人」の姿を見たのではないだろうか。

それは、「前近代」とは違っている。「古典」に支えられた「近代」なのだ。それが、ストーリー・人物造型・文体のすべての点にわたって、樋口一葉の文学の独特の「色」というか「けはい」を醸し出している。

余談になるが、わたしは大学生の頃、文京区本郷の東京大学の正門前に下宿していた。にもかかわらず、下宿からほんの数分の距離にある樋口一葉が住んでいた菊坂の家を訪ねて、手押しの井戸を見たり、彼女が通っていた伊勢屋という質屋を見たり、幼い時に住んだことのある法真寺を訪ねたりしたのは、大学を卒業してから相当の時間が経過したあとだった。「燈台（東大）もと暗し」とは、まさにこのことだろう。

【九月十八日＝徳富蘆花忌】

「九月十三夜」の話題から発展して、『源氏物語』という古典物語のエッセンスを近代小説に作り替えようと試みた樋口一葉の努力を評価したい、という話になってきた。

そこで、九月十八日に亡くなった徳富蘆花について、『源氏物語』との関連を語りたい。わたしの勤務する電気通信大学は京王線の沿線にあるので、通勤の途中、「芦花公園駅」を通過する。徳富蘆花は、晩年に「美的百姓」という生き方で昭和二年の九月十八日に亡くなった。

徳富蘆花の人生は、大秀才だった兄の徳富蘇峰へのコンプレックスとの戦いだ

つたようだ。兄の「徳富」の「富」は「ウ冠」だが、蘆花の「徳富」の「富」の方は「ワ冠」である。ここらあたりにも、同じ漢字を書きたくないという、兄弟の抜き難い確執が感じられる。

さて、蘆花の代表作は、何といっても『不如帰』である。明治という近代社会を生きながら、封建的家族制によって追い詰められてゆく浪子と武夫の悲劇は、何度読んでも悲しい。子どもを生めないがために姑に嫌われ、離婚させられた浪子が、遂に結核で若い命を落とす結末は、樋口一葉の『十三夜』とはまた別の意味で、読者に人生の苦しさを痛感させる。『源氏物語』の言葉を用いてわたしが代弁すれば、「生きることのアヤにくさ」である。「アヤにくさ」とは、「ああ、憎い」、「何と、うまくいかないことか」という嘆きの言葉である。

この『不如帰』でも、偶然かもしれないが、『源氏物語』と共通するストーリーやボキャブラリーが発見できる。作者の徳富蘆花が英語に堪能だったことはいろいろな書物で書かれているが、『源氏物語』を読んだことは文献で明瞭には書かれていない。もしも、蘆花が『源氏物語』を読んでいることが証明されれば説明が簡単なのだが、そうでなければ『源氏物語』によって千年前に確立された文学の様式が、明治三十一年に連載の始まった『不如帰』にまで無意識の影響を及ぼしているということになる。

結核を病み、愛していた武夫から離婚を言い渡された浪子は、発作的に自殺を図る。断崖から、海へ飛び込もうとしたのである。そこに、偶然に、一人の女性が現れ、死のうとする浪子を助ける。この場面を読むたびに、わたしは『源氏物語』の宇治十帖を思い出さずにはいられない。浮舟という女が、三角関係に行き詰まってしまい、宇治川に飛び込んで死ぬしかないと思いつめる。しかし、彼女は、偶然に通りがかった横川の僧都という老賢人に助けられた。『不如帰』で浪子を助けたのも、小川清子という宗教家の老女だった。男と女の差異はあるものの、明らかに共通する人間関係の構図が指摘できる。

結局のところ、『源氏物語』から『不如帰』まで、日本文学はストーリーと人間関係のパターンに関しては、さほど変化していないことだろう。人生の希望を失い、心の迷路に迷って入水を図る若くあわれな女がいる。その前に「老賢人」あるいは「老賢女」が現れて、彼女に「運命を受け入れて、生きられるだけ生きる」ことの大切さを教える。このようなパターンが、『源氏物語』から『不如帰』まで共通しているのは、「迷える人間の心」をどのようにすれば救えるのが、文学の一貫したテーマだったからだろう。人々が「文学」に求める

テーマも、古代から現代までそれほど変化してはいない。

でも、浪子は結核で死んでしまう。それが、彼女の運命だった。その墓に、母に命令されて浪子を離婚した武夫が、詣でる場面がある。『不如帰』の最後の最後である。ここに、風が「馬鬣の如く松を振ふ」という言葉が使われていて、わたしはドキッとした。「馬鬣の松」という古語があり、「馬の鬣のような松」のことである。亡くなった人の墓の目印のために植えられる松の林のことである。江戸時代の本居宣長の墓には、山桜が植えられていたそうだが、普通には松の木を植える。その松の木が何本か並ぶと、遠くからは馬の鬣のように見えるというのだ。また、植えた時には小松だったものが、星霜を経ると松の大木の群がりへと成長してゆく。遠望すれば、巨大な馬の鬣に見えることだろう。

「馬鬣の松」という言葉は、もともと『文選』という中国の古代詩集に見られる言葉である。それで、なぜわたしはドキッとしかたと言ったかと言ったと、『源氏物語』の幻巻に「うなる松」という珍しい言葉が使われている事実を連想してしまうからである。光源氏が、最愛の妻だった紫の上の死去を深く追悼する場面である。亡くなった妻を光源氏が恋慕う場面に語義未詳の「うなる松」という言葉があるのだが、『源氏物語』の注釈書によれば、これは「馬鬣の松」のことだということである。室町時代に書かれた紀行文や旅の記録類にも、「馬鬣の松」や「うなる松」のことはしばしば見えている。『文選』から始まり、「源氏物語」に受け継がれ、中世紀紀行文で話題を提供した「馬鬣の松」の文学史のほとんど最後のページに、徳富蘆花の『不如帰』が位置するのである。

わたしは、『不如帰』を強引に『源氏物語』と結び付けたいのではない。『不如帰』は明治三十年代に書かれ、国内でベストセラーになっただけではなく、世界各国語に翻訳された。ここまで広い大衆の支持を受けた理由としては、その「大衆性」と共に「古典性」もあずかっているのではないかと思われる。「古典性」というのが、そのまま『源氏物語』的な文学世界なのだ。わたしたちは、思いもよらず、たくさんあることを千年前の『源氏物語』から影響を受けているのかもしれない。

ちなみに、薄幸の女・浪子のモデルとなったのは、大山巖元帥の愛嬢だったとされる。その墓は、最初は青山墓地にあったと言われる。わたしは今年度、渋谷の青山学院大学に非常勤講師で赴いているので、足を延ばしてその「浪子の墓の跡地」を見つげようとしたが、探し方が悪くて見つからなかった。

【九月十九日】正岡子規忌

俳句と短歌の「近代化」を推し進めた理論家にして実作者である正岡子規が亡くなったのは、明治三十五年九月十九日だった。わたしは、小学生の頃に切手をコレクションしていた。「文化人切手」というシリーズがあって、森鷗外・樋口一葉たちと並んで、正岡子規の切手も大切にしていた。子ども心に、その切手の正岡子規の横顔が、とても年寄りに見えた。しかし、年譜を見ると、満三十五歳の誕生日を迎えた翌日に、正岡子規が亡くなったことがわかる。切手の顔の年齢は、意外と若かったのだ。老けて見えたのは、病苦のためだろう。

正岡子規と『万葉集』の関係については、かつて大伴家持について説明した時に大まかに述べたことがあるので、繰り返さない。

彼は、下谷の根岸で亡くなったが、この場所に現在でも「子規庵」が保存されている。関東大震災では無事だったが、太平洋戦争の空襲で全焼した。現在の子規庵の建物は、復元したものである。毎日開いているわけではなく、水曜・土曜・日曜の三日間開いているだけなので、訪れる前に曜日を確認しておく必要がある。近くには、書道家である中村不折の記念館がある。豆腐料理で有名な「笹乃雪」もある。

正岡子規が亡くなる前日である九月十八日に詠んだとされる「絶筆」は、よく知られている。

糸瓜（うり）咲いて痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をととひの糸瓜の水も取らざりき

十五夜の日に、糸瓜の水を取るという風習があったのだが、死の床にある正岡子規は、その余裕がなかったというのだ。迫りくる自分の死を見つめながら、大変にユーモラスに詠んでいる。それが、切実な内容を笑いでオブラートに包む「俳諧精神」の神髄なのだろう。また、子規の提唱した「写生文」の神髄でもあるのだろう。子規庵には、今でも前庭に糸瓜の棚が作ってある。

正岡子規自筆の「絶筆三句」の写真をみると、最後の句が「をととひの」と最初は書かれており、あとから「と」を書き足して、「をととひの」と音律が整えられたことがわかる。何か、胸に迫るものがある。

正岡子規には、随筆として『仰臥漫録』がある。それを読むと、正岡子規が俳

人・歌人としてだけでなく、画家としても一流の才能に恵まれていたことがよくわかる。

正岡子規は、近代短歌における「アララギ」、近代俳句における「ホトトギス」の流れの出発点に位置する。また、大学予備門の時からつづいた正岡子規と夏目漱石の友情は広く知られている。子規という文学者は、「短歌」「俳句」「小説」の近代化に立ち会ったことを示している。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』という長編小説には、正岡子規が重要な役割を果たしている。日清・日露戦争前後の明治の社会変動を克明に描くことが目的の『坂の上の雲』という小説で、正岡子規が獅子奮迅の働きをしているのは、一見すると不自然である。けれども、司馬遼太郎という小説家が明治時代のすべてを写し取るために、正岡子規の開発した「写生文」という手法を参考に使用したこととの反映であると考えると、腑に落ちる。わたしに言わせれば、司馬遼太郎は「写生文」を発展させた「写世文」を創出したのではあるまいか。

正岡子規の影響力は、意外なところにも及んでいる。

【本稿の終わりが近づいて＝祖型と反復】

一日は、一年の三百六十五分の一の長さを持っている。三百六十五日が全部集まって初めて、「一年」という一つの全体像が完成する。この文章は、幸いにも七月一日から九月三十日までの正味三カ月間をカバーすることができた。一年、つまり十二箇月のうちの三箇月だから、ちょうど全体の四分の一の季節がカバーできたことになる。残りの四分の三については、読者の方たちが折に触れて自分で文学作品に触れて季節の風を感じてもらいたい。

今日という日が過ぎ去ってしまったら、同じ日は二度と訪れないというのは、近代的な時間認識である。過去から未来へと流れる時間の中の一つの通過点が、現在でしかないという、直線的なイメージである。ところが、今日という日は、一年経ったらまた戻ってくるし、二年経っても、永遠に戻って来つづける。このように丸く回転する循環的な時間認識こそ、古代的で芸術的なものである。ただし、去年咲いた菊の花と今年の菊の花の咲き具合とは微妙にちがうし、眺める人間の心の状況次第で、美しく感じられたり、悲しく感じられたりする。同じ花が毎年同じように咲き、しかも微妙に違って咲く。「年々歳々花相似たり、歳々人々人同じからず」。何と、素晴らしいことだろう。

ルーマニア生まれでアメリカに渡った宗教学者に、ミルチャ・エリアーデがい

る。彼は、時間の循環構造を明らかにし、永遠に回帰することを指摘した。加えて、「祖型と反復」という理論を唱えたことでも知られる。最初のたつた一回の出来事が、何回も永遠に反復されるのが人間の世界の本質だというのがわたしたちは、子どもの頃、親に向かって「海の水はなぜ塩っぱいか」という疑問をぶつけたものである。すると、親は、「昔、潮吹き白と言うのがあって、塩を吹き出しつつ海に沈んだから、今でも塩っぱいのだ」と答えたものだ。このような世界認識の方法が、「祖型と反復」なのである。最初に潮吹き白があったから、あとはそれが反復して回りつづけているのだ、という説明方法である。

別の喩えを用いると、吉野山が花の名所である理由は、誰かが最初に桜の花を吉野山に植えたからである。そしてそれ以後、毎年、反復して桜の花が咲きつづけたからである。

鎌倉時代初期の歌人で、藤原良経（よしつね）という人がいる。源義経とまぎらわしいので、藤原良経（りょうけい）とも発音する。彼の家集である『秋篠月清集』に、興味深い歌がある。

昔誰かか桜の花を植えて吉野を春の山となしけむ

最初に花を植えた人、最初に花を美しいと眺めた人、その思いが、その後繰り返され、反復され、伝統的な美意識をかたちづくってゆく。

最初に菊の花が咲き、最初に紅葉が赤く色づいたのがいつだったか、そして誰が菊や紅葉を美しいものとして初めてポエジーを感じたのかは、今となっては知る由もない。地球上に「季節」や「自然」が初めて誕生した時から、時間の永遠の反復と循環が始まった。その何回目かを、光源氏は眺めただろうし、何回目かをわたしたちの祖先が眺めたであろうし、現在は「反復」の終着点としてのわたしたちが循環する季節の中の「今日」というかけがえのない一日を生きている。そして、このサイクルの中に、やがてわたしたちの子孫も加わってくる。子どもがいなくても、今の自分の気持ちや文章にして残しておけば、それを読んだ後の時代の人々が、わたしたちと同じ感受性のサイクルの中へと必ず入ってきてくれる。

こうして、「人と人との心がつながった文学史」が作られてゆく。わたしはこの文章の中で、「今日」という日に亡くなった偉大な文学者たちの心を紹介してきた。それによって、過去の文学者たちの心が回転しつづけている文学の宇宙

のサイクルに、読者を案内したかったのである。

【九月二十一日 宮沢賢治追記】

九月二十一日には、宮沢賢治が亡くなっている。明治二十九年に生まれ、昭和八年九月二十一日に亡くなった宮沢賢治の名前は、現在では知らない人はいないだろう。ところが、亡くなった時点では、全くの無名であった。けれども、宮沢賢治という星が文学の宇宙の中を回りつづけてゆくうちに、少しずつその光を仰ぎ見る人が増えてきた。それに伴って、宮沢賢治という星は、「よだかの星」や「さそり座のアンタレス」のように、強烈な光を放ち始め、今では超一級の輝きにまでなったのである。

宮沢賢治は、詩人であり、小説家であった。まず、彼の詩人としての本質から見ておきたい。「春と修羅」という詩集が、詩人としての宮沢賢治の代表作である。妹のトシが亡くなった時に作られた「永訣の朝」という詩は、涙なしには読めない名作である。また、手帳から発見された「雨ニモマケズ」という詩を暗記している日本人は多い。

しかし、宮沢賢治の詩歌には、「人間に対する暖かい見方、優しい見方」だけが歌われているのではない。それどころか、人間に対する悪意と云うか、否定的な感情がしばしば歌われていることに驚かされる。宮沢賢治は短歌も残しているので、そのいくつかを紹介しておこう。

ちばしれるゆみはりの月わが窓にまよなかきたりて口をゆがむる

秋風のあたまの奥にちさき骨くだけたるらん音のありけり

あかつきの真つばればれのそらのみどり竹は手首を宙にうかべたり

読者は、これらの短歌を読んでどう思われたらろうか。実に暗くて、陰鬱な世界である。現在、好んで語り伝えられている宮沢賢治の美しいイメージとは明らかに異なっている。窓から見える三日月を「血走って、口をゆがめている」と擬人化したり、秋風のかそけき音を聞いているうちに、頭の中で小さな骨が砕けた音かもしれないと幻聴したり、明け方の空に浮かび上がった竹の葉を見て、人間の「手首」だと錯覚したりしているのだ。この心象風景は、決して幸福で健康的な人間のものではない。

わたしは、宮沢賢治という人が「聖人君子」ではなく、自分の才能の限界に苦

しみ、他人の幸福を羨む弱い青年だと思わざるをえない。ここには、わたしたちと「等身大」の「人間・宮沢賢治」がいる。

この心の闇の泥沼から、どこまで宮沢賢治という人物が成長したか、そこが大切なのではないだろうか。宮沢賢治は、自分の心の弱さと醜さから、決して逃げなかった。そして、文学の創作を通して、心象風景のコペルニクスの転換をもたらしたのである。

宮沢賢治の小説の最高傑作として、誰しも最初に指を折るのは、『銀河鉄道の夜』だろう。ここには、ジョバンニという弱い少年が登場する。彼は、貧しく、父はなぜか家に戻ってこず、学校では意地悪なクラスメートからいじめられ、アルバイト先でも肉体的なコンプレックスをあざ笑われる。人間としても不幸であり、人間関係を何一つ取り結べない、底無しの孤独地獄の中を生かされている。つまり、作者である弱く醜い宮沢賢治の自画像だと思えないのが、このジョバンニ少年なのだ。

このジョバンニには、カムパネルラという親友がいた。このカムパネルラは、ジョバンニをいじめていた意地悪なザネリという少年が溺れたのを助けて、自分は死んでしまった。長生きすればどんなに社会と人類に貢献したか計り知れない賢いカムパネルラは、深く自分の命を捨ててまで、悪人ザネリを救った。そのカムパネルラの「心」を理解するために、夢の中で、ジョバンニは彼と一緒に銀河鉄道に乗って宇宙を旅することになった。

旅の途中で、ジョバンニは難破した船に乗って沈没した若い死者たちと出会った。この三人連れの死者たちは、タイタニック号の沈没がモデルだと思われるのだが、沈没間近の大混乱の中で、他人を押しつけて自分の命が助かることではなく、自分の命を捨てて他人を助けることを選んだ。そして、その美しい心によって、「天上へ行ける切符」を手にして、彼らは銀河鉄道に乗車してきた。

さらに、サソリの死のエピソードなど、大切なことはたくさんあるが、それは読者各位に『銀河鉄道の夜』の原文を読んでもらって体感していただくほかは無い。夢から覚めたジョバンニの手には、「本当の天上にさへ行ける切符」がしっかりと握り締められていた。これは、ジョバンニがこれから生きる方向をしっかりと発見したことの比喩である。カムパネルラのもっていた「犠牲」と「献身」という美しい心が、しっかりとジョバンニへと手渡された。ジョバンニは、自分一人だけでは弱くて醜いだけの人間でしかない。けれども、自分以外の人々の幸福を祈り、ある場合には彼らのために犠牲になってもよいと思ひ、かつ実行する

勇気を獲得した。たとえ自分が救わねばならぬ相手が、血のつながった親や子でなくとも、また親友でなくとも、自分に敵対する悪人たちに対してすら無条件の「犠牲的精神」を発揮しようというのである。

ここまで考えたジヨバンニにとって、「世界」の姿が一変する。父親は無事に帰ってくるし、学校でもいじめられなくなる。人間の心がけ一つで、住みにくい世界が住みやすい世界へと変貌してくれたのだ。そのキーワードは、自分自身の心の弱さの自覚、そしてこの世界に住むすべての人間に対する無条件の犠牲的精神の維持、の二つであった。

宮沢賢治という人は、よほど苦しみ抜いた末に、このように感動的な小説を書いたのだろう。冷害から農民を救うために、自分の命を犠牲にして火山を爆発させる科学技術者の姿を感動的に描く『ゲスコープドリの伝記』にしても、『よだかの星』にしても、犠牲と献身の主題を高らかに賛美している。この「賛美・賛歌」の底辺に埋もれている「苦悩」の重さを、忘れてはならない。

わたしが宮沢賢治の小説を読んでいつも思うのは、「雨ニモマケズ」の詩にもあるように、「サウイフモノニ、ワタシハナリタイ」という強い願望である。自分を変えたい、自分が変わりたいという、強い憧れである。現実世界を生きた自身の宮沢賢治には、多くの人間的な欠点があったかもしれない。いや、きっとあったに違いない。その手の告発本も、出版されている。けれども、彼の残した文学作品を読めば、「美しい心を持った人間に生まれ変わりたい」と願いつづけた真心が確かに理解できる。ジヨバンニがカムバネルラからもらった「本当の天上にさえ行ける切符」は、ジヨバンニからわたしたち一人一人へと手渡される。そして、私たちが次の世代の人々へと、手渡されなければならない。まさしく、「祖型と反復」の実践である。

わたしは残念ながら、まだ宮沢賢治をめぐる文学散歩をした経験がない。岩手県に関しては、平泉で源義経の最期をしのんだことがあるし、盛岡市内では石割桜を眺めたり、盛岡をかつて訪れたことのある詩人の立原道造の足跡をたどったことがある。けれども、肝腎の花巻にはまだ足を踏み入れたことがない。

宮沢賢治記念館の入り口には、梟の彫刻があるらしく、その梟を見たくて何回も足を運んだというわたしの友人もいる。また、宮沢賢治が「ハイリゲ・ブント」すなわち「聖なる場所」と呼んだ小岩井農場にも行ってみたいと、大学生のころから思いつづけている。しかし、まだ果たせていない。

文学散歩をして過去の文学者と同じ場所に立つことで、既に命をなくしてしま

った文学者たちの心がわたしたちの心の中に蘇ってくる。季節は、黙っていても戻ってきて循環してくれるが、文学散歩はわたしたちが積極的に過去の文学者の「心」が埋もれている場所を訪ね、彼らの「心」を掘り出さなければならぬ。また、文学散歩だけではなく、彼らの残した文章を読むことも必要だろう。読者は、主体的な姿勢を取ること初めて、作者の心を理解し、ある場合には上回るることができる。

宮沢賢治という人物の一生は、「文学」と真摯に関わることで、弱く醜い心の人間が、ほとんどそのまま美しく強い人間に生まれ変わることが可能なのだと教えてくれる。現在、世間では「宮沢賢治は最初から心の美しい天性の偉人だった」というイメージが蔓延しつつあるようだ。それは、人間の心というもの、および文学というものの本質を知らない、表面的なオマージュではなからうか。本当の文学は、人間の心は弱いものだということの痛切な確認から始まる。

【九月尽い秋の終わり】

旧暦の九月は、七月から始まった「秋」という季節が終わる月である。秋の最後の日が、九月のつごもりで、それを「九月尽いくがつじん」と言う。平安時代から、九月尽を惜しむ詩歌が、たくさん詠まれている。

『源氏物語』の作者である紫式部にも、「秋の果つる日」に詠まれた和歌がある。

鳴き弱るまがきの虫も止めがたき秋の別れや悲しがるらむ

紫式部は、数年ぶりで幼なじみの女性と巡り合った。けれども、積もりに積もった思い出話をする時間も無く、二人はすぐに別れ、それぞれの父親や夫に従って、二人とも都を離れなければならなくなった。その別れの悲しみを、「秋の終わりの一日」すなわち「九月尽」に喩えて歌っている。

「鳴き弱る虫」というのは、泣きつかれて声も枯れ果てた紫式部やその女友たちの比喩なのだろう。紫式部も、その友だちも、父親や夫は「受領いずりよう」と呼ばれる地方公務員であった。数年おきに地方勤務を繰り返さねばならない都と地方を行ったり来たりする「さすらい」の人生から何としても逃れたいと思つた少女は、大きくなって『源氏物語』の作者となる。そして、九州をさすらつたあげくに光源氏に見いだされて幸福な女の人生を満喫した「玉鬘」などの物語

を織り上げてゆくことになる。

どんなに人間が惜しんでも無情に過ぎ去ってしまう時間。それを痛感させるのが、秋の終わりの一日だということである。「光陰矢の如し」という諺もある。人間の力でどんなに頑張っても止めることができないのが、人生の時間なのだろう。

平安時代に作られた漢詩と和歌のアンソロジー『和漢朗詠集』には、「九月尽」という項目があり、漢詩が三首と和歌が二首、載っている。和歌の方を、紹介しよう。

山さびし秋も過ぎぬと告ぐるかも槿の葉ごとに置ける初霜

暮れてゆく秋のかたみに置くものはわが元結の霜にぞありける

最初の歌は、秋の終わりの九月尽の日に、槿の葉の一枚一枚に、冬の訪れを告げる初霜が置いているという情景を詠んでいる。「ああ、木々が落葉して山は寂しくなった。ああ、秋も終わってしまった」と、まるで槿の葉が告げているかのようだ、という意味である。槿の葉を擬人化して、人間のように思い入れたっぴりの言葉を話させているのが面白い。

二首目の歌は、人間が年を取ることの嘆きを歌っている。「終わってしまった秋が、わたしに形見として残したものは、何とまあ、髪の毛に置いた霜、つまり白髪だったことだよ」という意味。華やかな秋の終わりをしみじみと味わっている良い歌である。

【摺筆に当たって】

そして、この「季節感の文学史」という文章も、三箇月間にわたる季節の説明を無事に了えることができた。わたしの心は充実感で一杯で、「九月尽」の寂寥感はまったく存在しない。

本稿で語りつづけた七月から九月までの三箇月間は、旧暦では初秋から晩秋までの期間だが、新暦では夏の真っ盛りから秋の訪れまでの期間である。旧暦の「秋」の説明をしながらも、わたしの心の中では新暦の「夏」という季節が共存していた。

わたしたち現代人は、とても贅沢な時間の中を生きている。新暦と旧暦の二つの暦を持っているので、「今」という時間が「秋」でもあり「夏」でもあるとい

う風に、二倍に楽しめるのだ。

なおかつ、我が国には、奈良時代から連綿としてつづく「文学史」の蓄積があった。「七月から九月まで」の時間は、この文章をわたしが書き綴った西暦二〇〇一年の七月から九月までは、たった一回しかなくて、二度と戻ってこないのだが、奈良時代から計算するとおよそ千三百回も繰り返されて来たことがわかる。その千三百回の循環する時間のサイクルの中で、さまざまな文学者たちが活躍しては亡くなった。

この文章では、いわゆる「歳時記」年中行事」だけではなくて、一流の文学者たちの「忌日」すなわち「命日」に注目して、話題を選んできた。その一流の文学者の人生と業績を振り返りながら、わたしは『源氏物語』という作品が日本人にどのように受け継がれたか、また受け継がれなかったかを熱く語るのが常であった。

自分の専門分野が『源氏物語』だから言うのではないが、『源氏物語』は大変に素晴らしい作品である。どこがどのように素晴らしいか、ちよつと見にはわからない。というのは、『源氏物語』には、例えば季節の見方にも、人間の見方にも、これと言った獨創性、オリジナリティが存在しないからである。『源氏物語』以前にも、『源氏物語』以後にも、どこにでもころがっている「普通のものの見方」によって『源氏物語』は組み立てられている。けれども、「平凡な非凡」ということがある。ここまでオードックスに、自らの文学世界を構築できた作品は、おそらく『源氏物語』のほかには存在しないだろう。

この『源氏物語』との関わりの濃さや薄さを測定することで、わたしは日本文学のすべてが鑑定できると考えている。このような「価値評価の基準」となる傑作としては、『万葉集』『平家物語』などもあることはある。けれども、『源氏物語』ほど万能の物差しになる作品はないと思っている。これは、四十六年間、文学を愛してきた人間が手探りで得た「直感」である。

『源氏物語』五十四帖は、何回読み返しても新鮮な感動がある。ページを開いた瞬間に心の中に立ちのぼってくる「香り」も、この物語を読む時の年齢によって微妙に変化してくる。若い時には若い時なりの感動があり、年を取ってからは年を取ったなりの感動があるというのが、『源氏物語』の驚くべき本質である。わたしたちの生きている世界に満ち溢れている季節や自然から何を引き出せるかも、人間の年齢によって変わってくるが、『源氏物語』の与える読後感の変化もそれとちよつと似ている。

【わが魂の雪月花】

平安時代の日本人が最も愛した詩人である白樂天（白居易）は、次のような漢詩を残している。

雪月花の時、尤も君を懐ふ。

「冬に雪が降ったたら、秋に月が照ったたら、春に花が咲いたら、親友であるあなたのことをわたしはきつと思ひ出すであろう」という意味である。四季折々にことに触れて感動する心を自分が持つことがすべての出発点である。そして、その感動を共有できる「心の友」を持つことがその次に大切なことではないだろうか。「心の友」が身の周りにいなかったら、過去の文学者たちに直接向かい合えばよいのだ。それが、読書の醍醐味だろう。

心の友との四季折々の対話を通して、「今日を生きる」ことの喜びと哀しみを感じつづけること、それこそが「美しく生きる」ことであり、「充実した人生」を送ることではないだろうか。

眼前の雪や月や花は、それらを心から美しいと思ったり心から哀しいと思ったり眺めることで、感情を持った人間の心象風景としての雪月花へと昇華してゆく。それこそがまさに「魂の雪月花」であり、人間の永遠の憧れである「理想の美」なのだろう。

この「季節感の文学史」も、七月から九月までの話題を説明している体裁を採用したが、正直に告白すれば「わが魂の雪月花」の宇宙の中からその四分の一を切り出してお見せしたものである。人間一人一人が、自分の読書体験と人生体験を総合して「魂の雪月花」を作り上げることができれば、どんなに心豊かな社会が出現することだろうか。

The Literary Sense of Seasons of July, August and September

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

We Japanese have a long accumulations of literal history. And must hand it down for many generations of future.

To my regret, most of modern Japanese can not understand the excellence of *Genji Monogatari*. This paper tries to resurrect the sensibility for *Genji Monogatari*.

Every day, from July to September, we can and must feel the weight of tradition of *Genji Monogatari*.

- | | |
|--|--|
| July | 7 ; tanabata (lunar calender) |
| | 9 ; anniversary of Mori Ogai's death (solar calender) |
| | 15 ; urabon-e(lunar calender) |
| | 16 ; yabu'iri(lunar calender) |
| | 17 ; anniversary of Mizuhara Shu'oshi's death (solar calender) |
| | 19 ; anniversary of Ariwara Yukihira's death (lunar calender) |
| | 24 ; anniversary of Akutagawa Ryunosuke's death (solar calender) |
| | 30 ; anniversary of Tanizaki Jun'ichiro's death (solar calender) |
| | 30 ; anniversary of I'io Sogi's death (lunar calender) |
| | August |
| 3 ; anniversary of Yoshida Ken'ici's death (solar calender) | |
| 15 ; Juugoya (lunar calender) | |
| 15 ; anniversary of the end of world war II (solar calender) | |
| 16 ; okuribi (solar calender) | |
| 20 ; anniversary of Fujiwara Teika's death (lunar calender) | |
| 20 ; anniversary of Hosokawa Yusai's death (lunar calender) | |
| 28 ; anniversary of Otomo Yakamochi's death (lunar calender) | |
| September | 3 ; anniversary of Syaku Choku's death (solar calender) |
| | 7 ; anniversary of Izumi Kyoka's death (solar calender) |
| | 7 ; anniversary of Yoshikawa E'iji's death (solar calender) |
| | 9 ; choyo (lunar calender) |
| | 10 ; anniversary of Mukai Kyorai's death (lunar calender) |
| | 13 ; juusanya (lunar calender) |
| | 16 ; anniversary of Fujiwara Yoshitaka's death (lunar calender) |
| | 18 ; anniversary of Tokutomi Roka's death (solar calender) |
| | 19 ; anniversary of Masaoka Shiki's death (solar calender) |
| | 21 ; anniversary of Miyazawa Kenji's death (solar calender) |
| 30 ; kugatsu-jin (lunar calender) | |